

ぎ おん ぼる
祇園原地区遺跡

県営農村基盤整備パイロット事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

宮崎県教育委員会

祇園原地区遺跡

県営農村基盤整備パイロット事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

宮崎県教育委員会

序 文

宮崎県教育委員会では開発事業のある地域において、埋蔵文化財の発掘調査を行っており、文化財の保護と啓発に努めております。

祇園原地区遺跡がある台地は、国指定史跡新田原古墳群をはじめとして、各時代の遺跡が埋もれた、文化財の宝庫であります。また、この地域の一帯は、現在整備がすすめられている西都原古墳群など、宮崎の古代史を考える上で、重要なところです。

今回の調査で、縄文時代の竪穴住居跡・古墳の周溝・溝状遺構・古代の竪穴住居跡など、多種多様な遺構・遺物が検出されました。とくに古墳の周溝が多数検出できたことは、古墳群の構造および性格を少しでも明らかにするために、必要な資料といえるでしょう。

この報告書が、学術資料としてまた、生涯学習の場において、活用されることを期待いたします。

本調査を実施するにあたって、御支援・ご協力いただいた関係各位に対しまして深く感謝申し上げるとともに、今後とも埋蔵文化財保護事業に御協力・ご理解をお願いいたします。

平成8年3月

宮崎県教育長

田原直廣

例 言

1. 本書は県営農村基盤総合整備パイロット事業尾鈴地区に伴い、平成4年10月1日から平成5年3月21日にかけて調査を行った、祇園原地区遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎県一ツ瀬土地改良事業所の委託を受け、宮崎県教育委員会が行った。
3. 発掘調査にあたっては、新富町教育委員会および地元の方々の協力を得た。
4. 出土人骨は鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座の峰和治・竹中正巳・小片丘彦氏に、馬骨については鹿児島大学獣医学科の西中川駿・日高祥信氏に、管玉の分析は京都大学原子炉実験所の薬科哲男氏に玉稿を賜った。
5. 本書に使用した図面は、国土地理院発行の5万分の1図を、一ツ瀬土地改良事務所作成の5万分の1図を使用した。
6. 本書の執筆は第1章1を谷口、第1章2・第2章を橋本、第3章を各担当者、第4章を飯田が行った。
7. 遺物および遺物実測図・遺構実測図は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。
8. 現地の図面・写真は各担当者が補助員の協力を得て行った。
9. 遺物復元整理・実測・製図各担当者のほか、次の方々の協力を得た。
柄本久子・長友直美・金丸琴路・永峰まり子・西田節子・田村とし子・金子悦子・長田博子・生駒規子・長谷川恵子・久木田知代子
10. 本書の作成は各担当者が行い、飯田が編集した。

本文目次

序文	
例言	
第I章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第II章 遺跡の位置と歴史的環境	3
第III章 調査の結果	6
第1節 調査の概要	6
第2節 I区の調査	10
縄文時代の遺構と遺物	10
古墳時代の遺構と遺物	15
歴史時代の遺構と遺物	27
I-a区	27
I-b区	27
I-c区	34
第3節 II区の調査	34
縄文時代の遺構と遺物	37
弥生時代の遺構と遺物	40
古墳時代の遺構と遺物	45
歴史時代の遺構と遺物	48
第4節 III区の調査	62
III-a区	62
III-b区	66
第5節 IV区の調査	66
IV-a区	68
IV-b区	68
IV-c区	72
IV-d区	74
第6節 V区の調査	74
第IV章 まとめ	83
付編	
宮崎県新富町祇園原地区遺跡の古墳時代人骨	
新富町祇園原地区遺跡出土の馬歯	
祇園原古墳出土の管玉の産地分析	

挿 図 目 次

第I章 はじめに

第1図 調査区	2
---------------	---

第II章 遺跡の位置と歴史的環境

第2図 工事変更箇所	3
第3図 遺跡の位置と周辺遺跡	5

第III章 調査の成果

第4図 調査区 (1/4,000)	7~8
第5図 I-a・b・c区遺構区分図 (1/500)	11~12
第6図 SC1・2・3実測図 (1/40)	13
第7図 SC1・2・3遺物実測図	14
第8図 1号墳周溝 (1/150)・土層断面 (1/60)	17
第9図 5号墳実測図 (1/150, 1/60)	18
第10図 5号墳地下式横穴墓遺構実測図 (1/40)	19
第11図 1区溝状遺構分布図 (1/400)	20
第12図 I-d区遺構分布図 (1/500)	21
第13図 8号・15号墳実測図 (1/100)	23
第14図 8号 (1/40)・15号墳土坑 (1/20) 実測図	24
第15図 石棺遺構実測図 (1/20)	28
第16図 出土遺物実測図	29
第17図 出土遺物実測図	30
第18図 出土遺物実測図	31
第19図 出土遺物実測図	32
第20図 出土遺物実測図	33
第21図 出土遺物実測図	34
第22図 II区遺構分布図 (1/400)	35~36
第23図 SA1・2・5遺構実測図 (1/60)	39
第24図 出土遺物実測図 SA2・SA5	41
第25図 出土遺物実測図 SA5・6・8	42
第26図 出土遺物実測図	43
第27図 出土遺物実測図	44
第28図 18号墳周溝平面・土層図 (1/100)	48
第29図 18号墳土坑実測図 (1/20)・出土遺物実測図	49
第30図 20号墳周溝平面 (1/150)・土層図 (1/60)	50
第31図 22号墳周溝平面 (1/150)・土層図 (1/60)	51
第32図 20号・22号墳地下式横穴墓遺構実測図 (1/40)	52

第33図	18~20号出土遺物実測図	55
第34図	20~23号出土遺物実測図	56
第35図	23~29号出土遺物実測図	57
第36図	SA3・11実測図 (1/60, 1/30)	58
第37図	獨立柱建物 (1/50) および土坑実測図 (1/20, 1/40)	59
第38図	SA1・11出土遺物実測図	60
第39図	Ⅲ-a区遺構分布図 (1/375)	61
第40図	33号墳周溝平面 (1/150)・土層図 (1/60)	63
第41図	33号墳地下式横穴墓実測図 (1/40)	64
第42図	Ⅲ-b区遺構分布図および土坑実測図 (1/400, 1/20, 1/40)	67
第43図	出土遺物実測図	69
第44図	出土遺物実測図	70
第45図	出土遺物実測図	71
第46図	IV-a区遺構図 (1/150)	73
第47図	IV-c区遺構図 (1/200)	75~76
第48図	出土遺物実測図	77
第49図	出土遺物実測図	78
第50図	IV-d区土坑実測図 (1/40, 1/20)	79
第51図	V区遺構図 (1/200, 1/40)	81~82

表 目 次

周溝一覧表	9
地下式横穴墓一覧表	9
出土土器観察表	107
住居跡山土器観察表	118
石器計測表	120

図 版 目 次

図版1	122	図版11	132
図版2	123	図版12	133
図版3	124	図版13	134
図版4	125	図版14	135
図版5	126	図版15	136
図版6	127	図版16	137
図版7	128	図版17	138
図版8	129	図版18	139
図版9	130	図版19	140
図版10	131		

第I章 はじめに

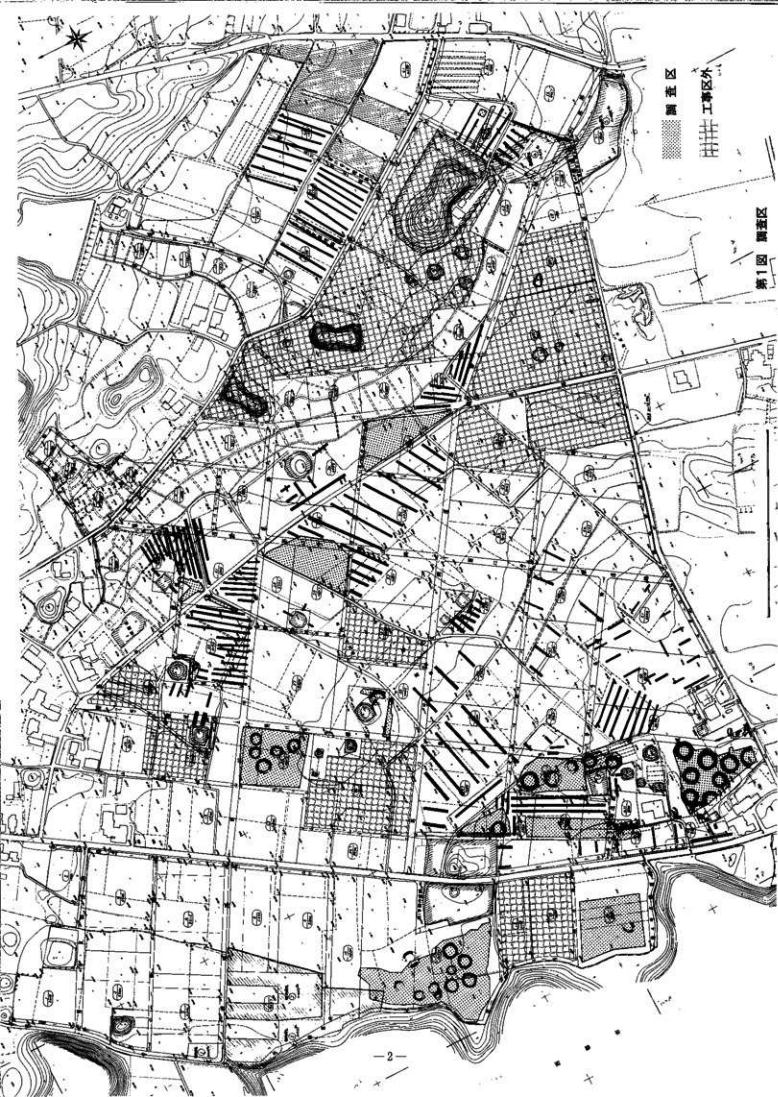
第1節 調査に至る経緯 (第1図)

宮崎県一ツ瀬土地改良事務所では昭和40年代後半から尾鈴・尾鈴II地区農業基盤総合整備事業を実施してきている。改良事務所では昭和63年頃から新田原古墳群を含む砥原地区一帯のほ場整備事業実施が数度にわたり計画され、県文化課は昭和63年、平成2・3年に分布調査および確認調査を実施したが、地権者未同意のため事業実施までには至っていなかった。そういった状況のなか平成4年、ついに計画・施行が決定したため、県文化課・新富町教育委員会では改良事務所と協議を行ってきた。その中で、新富町教育委員会では新田原古墳群公園化の計画が進められていたこともあり、極力旧地形の改変を行わない方向で要望し、前方後円墳の集まる地区については新富町が追加指定・買上げの方向で進められた。しかし、工事計画については地権者の意向が強く、ほぼ当初計画どおりしかも、約50ha一度に行うこととなった。このため、県文化課では、分布調査・確認調査のほか地下レーダー探査も実施し、遺構・遺物確認に努めた。そして文献等から滅失古墳もかなりの数に及ぶことが想定されたため、工事施行が決定した段階で、平成4年10月、地権者の承諾をえて調査を開始した。調査を開始してまもなく工事区の南西側で、滅失古墳17基が密集して検出されその取扱について再度協議を行った。その結果、そのうち5号墳から17号墳が検出された区域については、切り盛りを行わず、現状のまま埋め戻されることとなり、それに伴い、道路位置の変更もなされた。そのほか、国指定120号墳東に検出された周溝についても、地権者の御協力で、保存区域の拡大が実現した。このように発掘調査で検出された遺構についての保存協議を繰り返しながら調査は平成5年3月まで実施した。

なお、調査および保存にあたっては、新富町教育委員会の並々なれぬ努力と土地改良区をはじめ地元各位のご協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。

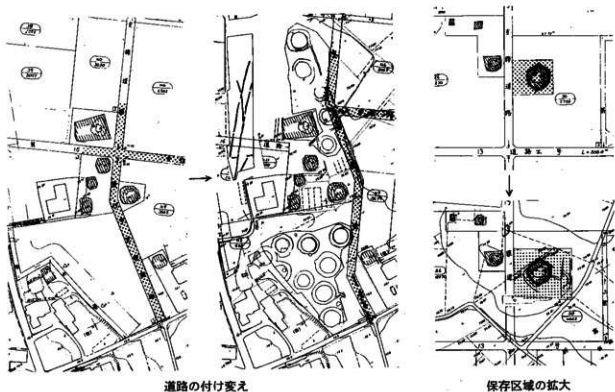
調査の組織

調査主体	宮崎県教育委員会
教育長	高山 義孝
教育次長	安田 天祥
教育次長	宮路 幸雄
文化課長	甲斐 教雄
同課長補佐	串間 安園
庶務係長	税田 輝彦
埋蔵文化財係長	岩永 哲夫 (現主幹兼埋蔵文化財第二係長)
主任主事	谷口 武範 (現埋蔵文化財第一係主査)
主事	飯田 博之 (現埋蔵文化財第二係主事)
調査補助員	橋本 英俊 (現埋蔵文化財第一係主事)
調査協力	新富町教育委員会 土地改良区



调查区
工事区外

第1图 调查区



第2図 工事変更箇所

第二章 遺跡の位置と歴史的環境 (第3図)

祇園原地区遺跡の位置する新富町は、宮崎市の北約20kmにあり宮崎平野の北側の一角を占める児湯郡に属し、一ツ瀬川左岸の主に水田に利用される沖積平野と畑作に利用される洪積台地に位置する。洪積台地は宮崎平野に発達する段丘地形のなかで顕著なものであり、地形区分上、茶臼原面（Ⅶ面—標高120m級）、三財原面（Ⅵ面—標高90m級）、新田原面（Ⅴ面—標高70m級）に分けられる。

本遺跡の位置する新田原は、一ツ瀬川下流左岸にあって北は鬼付女川を隔てて三財原に接し、西は急崖となって一ツ瀬川をのぞみ、南は一ツ瀬川の形成した沖積平野に接する。新田原台地は、日置川水系、鬼付女川水系、藤山川水系による開析が進み、複雑な谷状地形を形成し、台地を断片化しつつある。

祇園原地区遺跡は、このような一ツ瀬川下流左岸台地（新田原面）の最西端にあたり、新富町大字新田字祇園原に所在する。また、遺跡は国指定史跡新田原古墳群の分布域内で、群⁽²⁾としては、新富町教育委員会により、地下式横穴墓が調査された春日地区を含め祇園原支群に属する。

遺跡付近は、大正3年⁽¹⁾8月に路査がなされ、昭和50年7月⁽⁹⁾にも縄文土器が表採されている。

祇園原地区遺跡が含まれる新田原古墳群は標高70mの台地にあり新富町祇園原から春日地区に分布する総数200余基からなる古墳群である。一ツ瀬川を隔てて現在整備のための調査が行われている特別史跡西都原古墳群と相対しており、東都原古墳群と称されることもある。なかでも弥五郎塚古墳は、墳長が94m後円部径52mを計る群最大の規模を誇る前方後円墳であり7期に比定される。

当遺跡の西方の縁辺部には、古墳時代初頭の土坑墓・周溝墓が200基余り検出された川床遺跡⁽⁸⁾があり、東側の河岸段丘上には、弥生時代後半と古墳時代後半を主体とする集落遺跡である北田地区遺跡⁽⁹⁾がありカマド

を設置した住居跡がまとまって確認されている。近接して6世紀後半の円墳で構成された上園遺跡⁹⁸を集落とする富田古墳群⁹⁹が造営され、南側約1.5kmに組み合わせ式木棺をもち本県最古の下屋敷1号墳が立地している。

北側には一ツ瀬川を望む台地の端に東面して築かれ、横穴式石室を有する千畑古墳や、外面2次調整¹⁰⁰にナデを多用する円筒埴輪をもつ児屋根塚古墳¹⁰¹（茶臼原1号墳）・茶臼原古墳群¹⁰²があり、また杉尾横穴墓¹⁰³・松船横穴墓群¹⁰⁴・千畑横穴墓群¹⁰⁵・団横穴墓群¹⁰⁶など横穴墓が密集している。

一ツ瀬川右岸には、川西編年のⅢ期の埴輪をもつ女狭穂塚古墳¹⁰⁷・男狭穂塚古墳のほか、前方後円墳32基・円墳278基・方墳2基・地下式横穴墓10基で構成される西都原古墳群や、県指定の清水西都原古墳群が位置し、墳丘長104m・周溝幅18mを計る国指定史跡松本塚古墳¹⁰⁸や周辺に松本遺跡¹⁰⁹が見られる。

当遺跡の立地する祇園原支群は、新田原古墳群の中にあって全体の2/3強にあたる13基の前方後円墳が集中し多くの円筒埴輪片が採集され、47号墳からは動物（馬・猪¹¹⁰）の足とおもわれる形象円墳が出土している。また、墳丘測量図の作成が行われるようになるなど首長系譜の消長が検討できる基礎的なデータが蓄積されつつある。

- 註1 「新富町の文化財」遺跡詳細分布調査報告書 新富町教育委員会（1982）
- 2 「国指定史跡新田原古墳群保存管理策定報告書」新富町文化財調査報告書 第10集 新富町教育委員会（1990）
- 3 「国指定史跡新田原古墳群確認調査に伴う調査概要報告書」新富町文化財調査報告書 第16集 新富町教育委員会（1994）
- 4 宮崎縣史蹟調査報告書 第3冊 宮崎県（1918）
- 5 沢島臣 他「宮崎県児湯郡新富町祇園原探採の遺物」宮崎古第3集 宮崎考古学会（1977）
- 6 濱田耕作・原田仁「西都原古墳群」『日本古文化研究所研究報告』10（1994）
- 7 柳沢一男「地域政権と畿内政権-日向・筑紫」『古墳はなぜつくられたか』朝日百科（1995）
- 8 「川床遺跡」新富町文化財調査報告書 第5集 新富町教育委員会（1995）
- 9 「北田地区遺跡」新富町文化財調査報告書 第17集 新富町教育委員会（1995）
- 10 有田辰美「上園遺跡」『宮崎県史』資料編 考古2 宮崎県（1993）
- 11 有田辰美「富田古墳群」『宮崎県史』資料編 考古2 宮崎県（1993）
- 12 柳沢一男「宮崎県の考古資料(1)」宮崎考古第13集 宮崎考古学会（1994）
- 13 有馬義人「児屋根塚・大久保塚古墳の円筒埴輪」宮崎考古第14集 宮崎考古学会（1995）
- 14 緒方吉信「史跡の児屋根塚古墳」『西都原古墳研究所年報』第4号 西都市教育委員会（1987）
- 15 藪方政機「茶臼原古墳群」『宮崎県史』資料編 考古2（1993）宮崎県
- 16 日高正晴「日向における千畑横穴墓とその考察」『西都原古墳研究所年報』第3集 西都市教育委員会（1986）
- 17 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号（1978）
- 18 福尾正彦「女狭穂塚陵墓参考地出土の埴輪」『書陵部紀要』第36号 宮内庁
- 19 藪方政機「松本塚古墳」『宮崎県史』資料編 考古2（1993）宮崎県
- 20 緒方吉信・藪方政機「松本遺跡」西都市埋蔵文化財調査報告書第4集 西都市教育委員会（1988）
- 21 柳沢一男・有馬義人「宮崎県の考古資料(2)」宮崎考古第14集 宮崎考古学（1995）
- 22 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長系譜とその消長」『宮崎県史研究』第9号（1993）



- | | | | | |
|-------------|-----------|------------|------------|-------------|
| 1. 祇園原地区遺跡 | 6. 北田遺跡 | 11. 松船横穴墓 | 16. 金剛寺遺跡 | 21. 清水西原古墳群 |
| 2. 花園地下式横穴墓 | 7. 川床遺跡 | 12. 千畑横穴墓群 | 17. 西都原古墳群 | 22. 寺山遺跡 |
| 3. 新田原古墳群 | 8. 北畠原遺跡 | 13. 千畑古墳 | 18. 新立遺跡 | 23. 松本原遺跡 |
| 4. 銀代ヶ迫遺跡 | 9. 茶臼原古墳群 | 14. 囲横穴墓 | 19. 寺崎遺跡 | 24. 松本塚遺跡 |
| 5. 八幡上遺跡 | 10. 杉尾横穴墓 | 15. 千畑遺跡 | 20. 酒元遺跡 | |

第3図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1:50,000)

第二章 調査の成果

第1節 調査の概要 (第4図)

祇園原地区には、開墾によって消滅した古墳などを含めると前方後円墳17基、方墳1基、円墳250余りがあったとされている。一方、新宮町教育委員会では新田原古墳群整備の計画があり、平成2年には管理策定報告書も刊行されている。このため、指定拡大および買上を念頭に入れて、県文化課と新宮町教育委員会との協議の結果、工事着手が確定した段階で、古墳があったとされていたI区から、土地所有者の承諾を得て、工事に先行して滅失古墳の確認調査に入った。さらに、工事施行業者決定後は、重機の提供を受け工事区全体の確認調査を行い、遺構を確認した箇所について本調査を行った。また、同時にかなり小さくなって現存する国指定古墳の周囲にもいくつかトレンチを入れ古墳の規模・時期等についても確認した。調査は、広大な工事面積に対しては非常に短い調査期間で、調査は困難をきわめ、新宮町教育委員会や土地改良区の方々、そして工事施行業者の御協力を得て、平成4年10月より平成5年3月までの5ヶ月を要し無事終了することができた。

祇園原地区遺跡は、新田原古墳群の一部に含まれ、標高70~74m、地形区分では新田原面に位置する。工事区内を斜行(南東から北西方向)した二本の開析谷が入り、二つの区域に分かれる。特に、東側の谷は山からの湧水が集まる湿地帯で、最近まで水田として利用され、地域を明瞭に区分している。

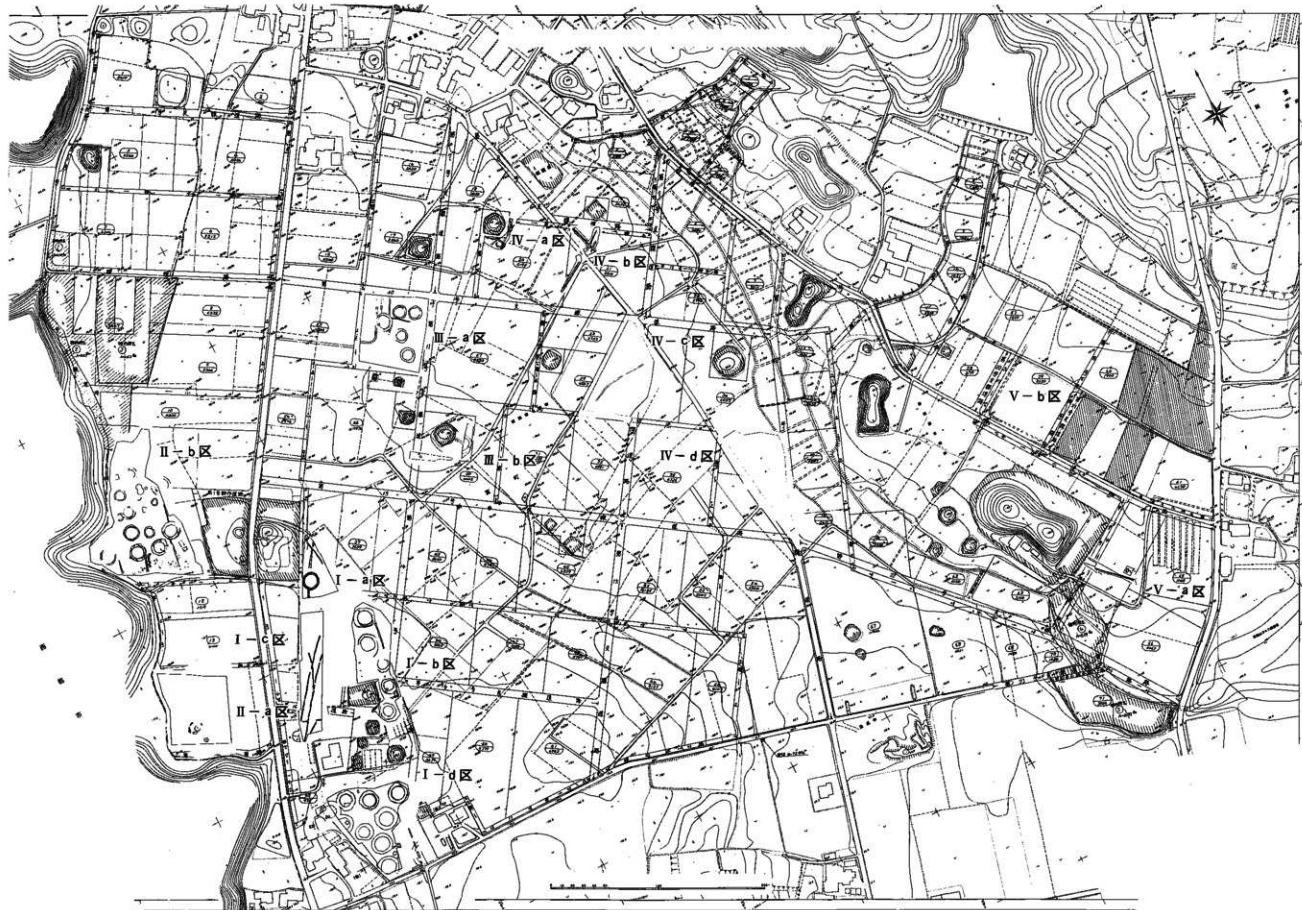
今回の発掘調査によって古墳の周溝は36基、そのほか地下式横穴墓4基、石棺、馬具を出土する土壌、溝状遺構などを検出し、200基を超える古墳の存在を裏付ける資料を得ることができた。

古墳の分布は湿地帯で区分された谷の東側に48号墳を代表とした前方後円墳5基や円墳が、その西側の地域では、谷によって区分された両側の地域に円墳やそれに付随して地下式横穴墓がつくられ、湿地帯の東側とは対象的な様相を呈している。特に円墳は、微高地上に立地し、丘陵の端部、調査区の西側では、周溝がかなり近接あるいは交わって造られ、おおよそ20基前後をひとまとまりとして、いくつかの群を形成している。

地下式横穴墓の竪坑はすべて古墳周溝から掘られるが、周溝検出時には確認できず、溝底付近で認められた。なかでも5号墳に造られた地下式横穴墓は他と比較して規模が大きく、玄室には礫床を有し壮年の女性人骨や須恵器・刀子などの副葬品も検出され、古墳の主体部であった可能性は高い。しかし、検出された地下式横穴墓は、竪坑や玄室などの規模や玄室の軸、副葬品の副葬位置などに違いが認められ、これらは時期差、墳丘の主体部になるもの、あるいは墳丘埋葬者に従属的に造られたものあるいは群による相違など各種の様相が推定されよう。遺物は、須恵器、土師器のほか国指定115号墳からは璧玉製管玉が、20号墳では滑石製白玉が出土している。

馬具を出土した土壌は3基検出され、2基は古墳周溝を切ってつくられていた。また、周溝内から馬具を出土したものが1基みられる。8号墳周溝を切ってつくられた土壌では、轡等の馬具とともに若駒の馬歯3体分が検出され、その出土状況から頭部だけの埋葬の可能性が高く、周溝から馬具が出土した事例についても同様な状況と考えられる。

そのほかの時代では、縄文時代では後期の住居址7軒、土壌3基、弥生時代後期の住居址3軒、平安時代の住居址2軒、掘立建物跡1棟、時期不明の土壌10数基、溝状遺構10数条検出した。縄文土器は、住居址からは三万田系の土器が主体で、包含層や周溝埋土中からも出土している。そのほか船元系の土器も一部みられる。平安時代の住居址は、床面中央に埋篋をもつものと壁にカマドが付されるものがあり明らかに後者の方が新しい。



第4圖 調査区 (1/4,000)

周溝一覽表

遺構番号	調査区	墳丘部			周溝		出土遺物	備考
		平面形	長径(m)	短径(m)	長径(m)	短径(m)		
1号墳	I-a	円	12.8	12.1	16.6	15.9	須惠器・土師器	
2号墳	I-a	円	13.8	13.4	-	-	須惠器・土師器	
3号墳	I-a	円	12.6	13.4	22.6	-	須惠器・土師器	
4号墳	I-a	円	-	9.7	-	13.3	須惠器・土師器	
5号墳	I-a	円	9.2	9.0	14.6	14.2	須惠器・土師器	地下式横穴
6号墳	I-a	円	9.5	9.4	15.1	15.0	須惠器・土師器	
7号墳	I-b	円?	12.0	-	-	-	-	保存
8号墳	I-b	円	11.8	11.5	17.7	17.4	須惠器・土師器	土坑
9号墳	I-b	円?	13.0	-	-	-	-	保存
10号墳	I-b	円?	10.0	-	-	-	-	保存
11号墳	I-b	円?	14.0	13.0	-	-	-	保存
12号墳	I-b	円?	15.0	-	-	-	-	保存
13号墳	I-b	円	-	11.5	-	-	須惠器・土師器	
14号墳	I-b	円	-	-	-	-	-	
15号墳	I-b	円	11.8	11.5	17.7	17.4	須惠器・土師器	土坑
16号墳	I-b	円?	-	-	-	-	-	保存
17号墳	I-b	円?	-	-	-	-	-	保存
18号墳	II	円	11.0	10.8	20.4	14.3	須惠器・土師器	土坑
19号墳	II	円	11.4	-	16.7	16.5	須惠器・土師器	
20号墳	II	円	10.3	10.3	16.3	14.4	須惠器・土師器	地下式横穴
21号墳	II	円	8.0	7.5	11.1	9.9	須惠器・土師器	
22号墳	II	円	11.4	10.8	16.2	15.7	須惠器・土師器	地下式横穴
23号墳	II	円	12.5	11.5	15.5	15.2	須惠器・土師器	
24号墳	II	円?	12.5	11.6	15.5	15.2	須惠器・土師器	
25号墳	II	円?	7.9	-	-	-	土師器	
26号墳	II	円	-	9.2	11.7	-	土師器	
27号墳	II	円	8.3	8.2	-	10.3	土師器・須惠器	
28号墳	II	円	5.3	-	7.4	-	土師器・須惠器	
29号墳	II	円?	12.4	-	-	-	-	
30号墳	IV-b	円	-	-	-	-	-	
31号墳	III-a	円	10.3	9.9	13.1	13.1	須惠器・土師器	
32号墳	III-a	円	9.4	9.3	13.2	12.6	須惠器・土師器	
33号墳	III-a	円	12.7	11.0	17.7	15.1	須惠器・土師器	地下式横穴
34号墳	III-a	円	8.9	8.8	12.7	12.3	須惠器・土師器・馬具	
35号墳	III-a	円	9.6	9.5	13.9	13.8	須惠器・土師器	
36号墳	III-b	円?	11.2	-	-	-	-	

地下式横穴一覽表

遺構番号	調査区	竖坑形	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	羨道	玄室形	玄室長(cm)	玄室幅(cm)	備考
5号墳地下式	I区	長方形	192	164	135	平入り	不整形	108	177	屍床あり
20号墳地下式	II区	半円形	69	150	46	平入り	長槽形	64	182	
22号墳地下式	II区	長方形	98	174	45	平入り	台形	58	220	
33号墳地下式	III区	長方形	164	158	72	平入り	長槽形	54	186	

第2節 I区の調査(第5図)

概要

I区は、工事区の南西隅にあたり、検出遺構には縄文時代の土坑3基、弥生時代の住居址2軒、古墳周溝17基、石棺1基、地下式横穴墓1基、土壇2基、時期不明の溝状遺構8条があり、分布状況からa~d区に分けて調査を行った。

古墳の規模は、検出面での墳丘の規模はほぼ10~13mに収まり、周溝まで含めると15~20mの大きさになる。古墳造営には意識的に「高所」を選地しており、その結果として、標高72~73mの微高地部分にかなりの密集度で検出されている。北端に位置する1号墳は、古墳のまとまりからすればII区の19号~29号墳および国指定101号~113号墳の計24基の集団に含まれると考えられる。そして、2号墳より南のグループは国指定も含め23基から構成される。そのほか、5号墳周溝に地下式横穴墓の堅坑が掘られ、玄室は家形をなし、床面には礎床が設けられており壮年女性人骨1体が検出された。また、8号墳および15号墳では馬を埋葬したと想定される土坑が周溝を切って検出され、轡等の馬具が出土した。また、8号墳の北西約3.2mには石棺が造られるが、時期的には古墳よりやや遅れる。なお、b・d区の5~15号墳および石棺等については、協議の結果、保存することになり、一部調査後、埋め戻した。

縄文時代の遺構と遺物(第6図)

I-c区西側で3基の土壇が検出されている。3基とも長軸を東西方面にもち平面規模は北側が大きく、大・中・小と南にむけて小規模となる。遺物は縄文後期の土器片と石皿1点・石鍾16点が出土している。石皿・石鍾は、ともに砂岩製である。

SC1

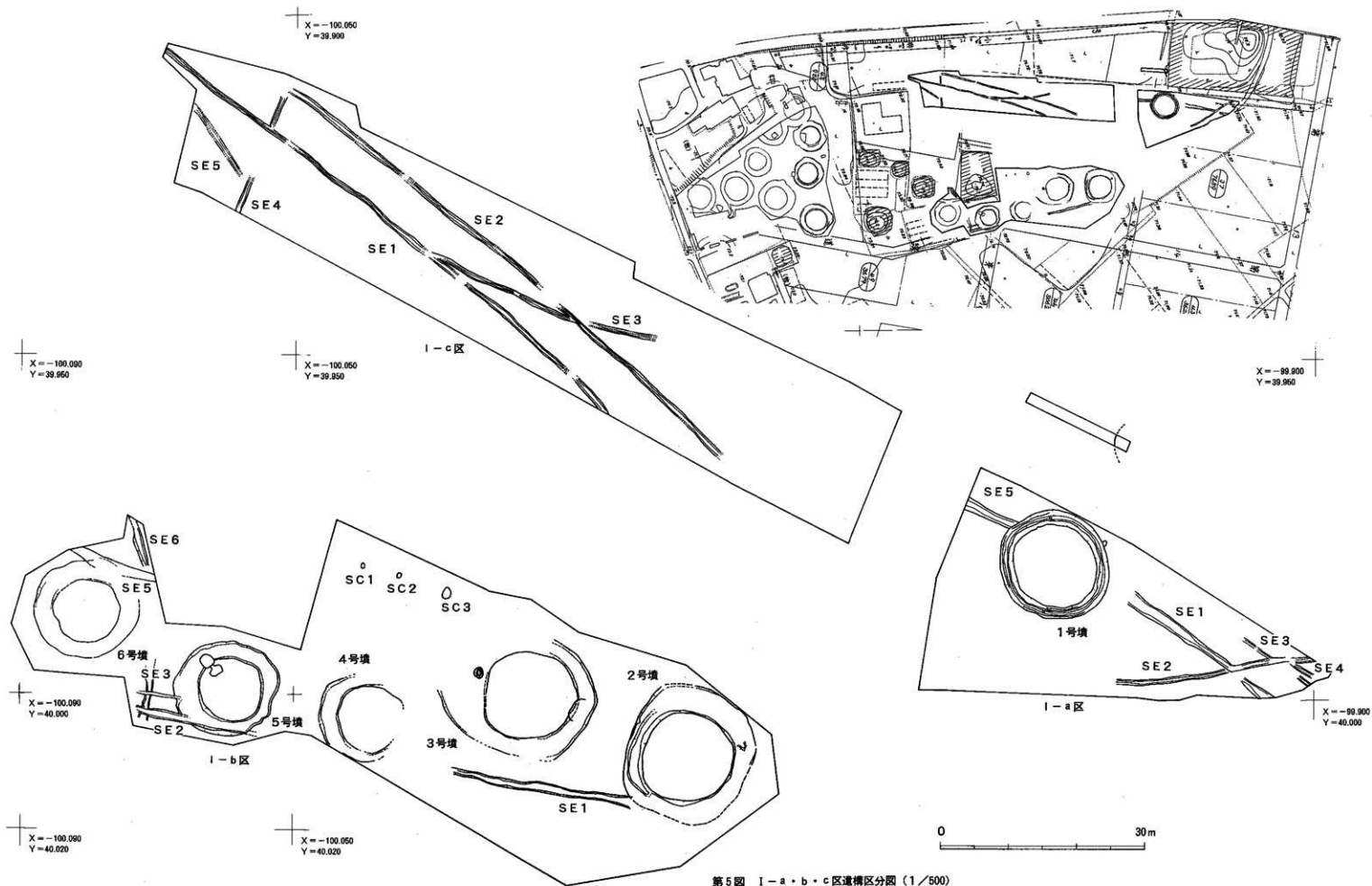
SC1は調査区の西側、4号墳の西約15mに位置する。検出面は、アカホヤが削平を受けておりその下層の褐色土であった。平面形は、長楕円形を呈し検出面で長軸1.18m、短軸0.78m、深さ1.1mを計り、中央部に稜をもつ。埋土は黒褐色土にアカホヤ粒が混入する。遺物は、縄文後期の土器片が1点埋土中から出土している。

SC2

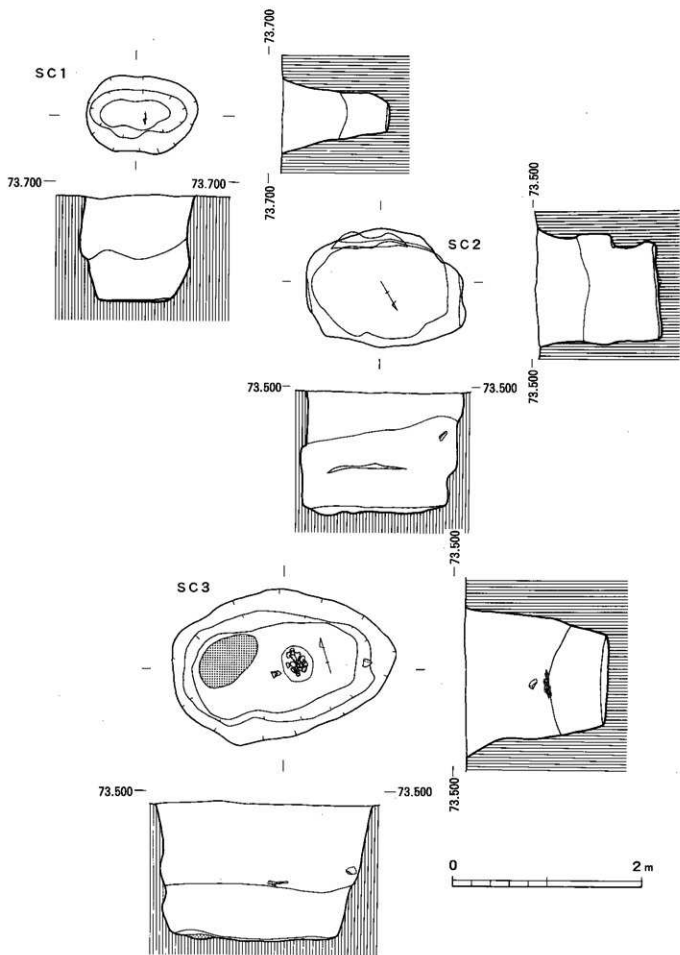
SC2は、SC1の北約7mに位置し平面形は不整な長方形を呈する。長軸1.7m、短軸1.26m、深さ1.28mを計り、遺物は縄文土器の小片と最大長7.5cmを計り砂岩製の石鍾が1点検出されている。埋土は、黒褐色土を中心とし、アカホヤブロックを混入している。

SC3

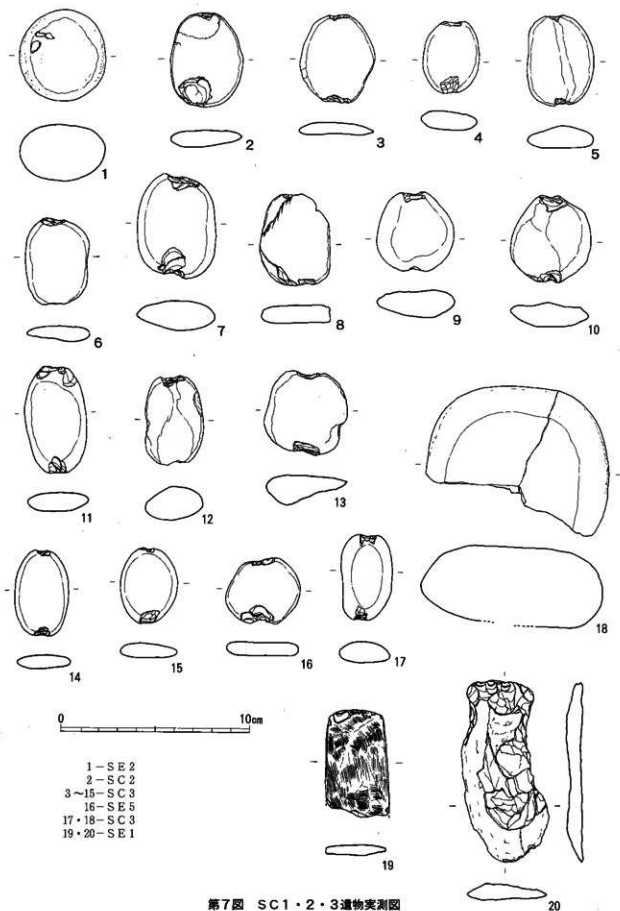
SC3は、3基の土坑の中で最も大きく長軸2.3m、短軸1.6m、深さ1.5mを計り、平面形は長楕円形を呈する。土坑の床面から約60cm上に石鍾が15点余り固まって検出され、石皿1点が埋土中から出土している。また、西側の床面直上に炭の堆積がみられた。石鍾はすべて切れ目石鍾で、石皿は残存する最大長11.6cm、最大幅14.5cm、最大厚6.3cm、重量1.1kgを計る。



第5图 I-a·b·c区建筑区分图 (1/500)



第6圖 SC1・2・3実測図 (1/40)



第7图 SC1·2·3遺物実測図

古墳時代の遺構と遺物

1号墳 (第8図)

I-a区の北端に位置し、国指定104号墳の東側に位置する。墳丘は調査区の内側でも高所に位置し、比較的削平をうけていない。周溝はSE5に南側を切られている。古墳の検出面での墳丘径は約12.1~12.8m、周溝の幅は約2mのはほぼ正円形である。周溝の残存状態は良く、断面は逆台形をなし、深さ1mを計る。西側から南側にかけては、さらに一段深く掘り込まれる。埋土は、アカホヤを含む茶褐色土を主体とし下層は粘質土である。遺物は、北側に多く集中する。

須恵器は坏身・平瓶・高坏・甕・提瓶などがみられる。1は、口径12.5cm・器高3.9cmを計り受け部がやや斜め方向にはね上がる。2は、口径12.2cm・器高3.9cmで口縁端部は丸く仕上げる。平瓶の3は、胴部がやや肩が張り上面はやや平坦で自然軸が付着する。ボタン状突起を有し、口径は5.9cm、器高は、13.4cmで胴部最大幅は16.2cmを計る。高坏4・5・6は焼け歪みが見られ、胎土が粗い。4・5は口径11cm・11.4cm器高11cm・10.2cmで坏底部から体部にかけて器壁に凹凸が多い。甕8は、球形の胴部に外反する口縁部を持つ。体部の内外面にタタキ痕が見られ、口径15.7cmである。提瓶9は、外面に平行カキ目を施し肩部に退化した把手が残る。

土師器は、坏10があり口径13.4cm、底径8.6cm、器高3.3cmを計る。

2号墳

1号墳の南東約40mに位置し、南東側をSE1がきる。大部分を削平されており周溝の痕跡も比較的明瞭に確認できるのは南側部分のみである。古墳の検出面での墳丘径は約13.4~13.8m、周溝の幅は3~4mである。断面は浅い碗形をなし、深さは約40cmを計る。埋土は、黒色土でアカホヤの粒子を含む。遺物は、周溝が広くなっている北側に集中し、須恵器が200点余り出土したがすべて破片で完全に復元できるものはない。

須恵器には、坏蓋・坏身・壺・提瓶・甕・甌がみられる。坏蓋11~14は、天井部と体部の境は線を失っている。口径は、11.9~14.6cm、器高3.5~4.3cm。口縁部には端部に段を有するもの(15・17)とそうでないものがみられる。坏身は口径10.6~13.1cmと幅が認められる。18は、体部1/2までヘラケズリが施される。18~21は、狭い底部から体部が直線的に開き内傾する短いちあがり有する。短頸壺37は口縁部が上方に短く延びる。提瓶42・43は、外面にカキメが施される。甌は、36・39・40があり、底部は丸底気味で36は口縁部は上方で外方向に大きく屈曲して延びる。

土師器には、坏蓋・坏身・甕・高坏がある。甕49は、胴部は不明であるが、口頸部は短く外反し、口縁端部は丸く仕上げる。

3号墳

2号墳の南約8mに位置し、2号墳と同様周溝部分の残存率が低い。検出面での推定墳丘径は、約13m、周溝幅は2.7~4.1mである。周溝の深さは、約10cm程度と残りがきわめて悪く、遺物の出土も土師器・須恵器片がまばらにしか出土しなかった。南側の周溝内で時期不明の長軸1.6m、短軸1.2mを計る土坑が検出された。須恵器は、坏身・提瓶が、土師器は、甕・坏が出土している。

4号墳

地下式横穴墓をもつ5号墳から北に7m、3号墳から南に4mに位置する。北側部分が削平されており周溝が不明瞭である。検出面での推定墳丘径は9m、周溝幅は南側で2.8mを計る。断面は浅い皿状で、深さ20cmである。遺物はまばらにしか出土しなかった。須恵器は坏蓋・甕がみられる。坏蓋62は、天井部と体部の境に稜をもち63は、稜を失っている。

5号墳 (第9図)

I-b区2の南、国指定129号墳の東に位置し、SE2に東側を切られ、周溝内に地下式横穴墓の竪坑が掘られる。古墳の検出面での墳丘径は約9.0~9.2m、周溝の幅は1.8~3.8mと一定ではない。断面は浅い碗形をなし、深さは約30cmを測る。埋土は黒色土でアカホヤの粒子を含む。遺物は周溝が広がっている南側周辺に集中し、100点ほど出土したがすべて破片で完形に復元できるものはなかった。なお、地下式横穴墓竪坑上部には遺物は検出されていない。

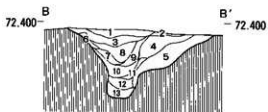
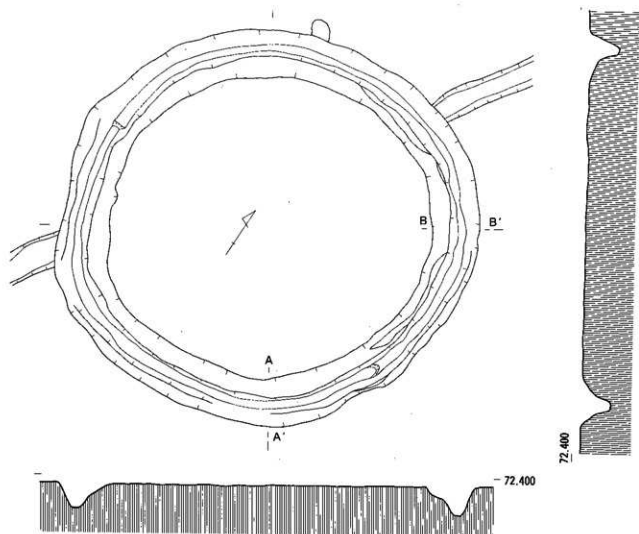
須恵器には坏蓋・坏身・高坏・罎・甕がみられる。坏蓋65~67は天井部と体部の境に稜を失っている。口径12.7~14.5cm、器高3.45~3.85cm。坏身68は、体部1/2までヘラケズリが施される。口径12.3cm、器高4.1cm。高坏68は長脚2段の二方透かしである。73はやや肩が張り2条の沈線を巡らし、沈線間に刺突文を施している。甕75・76は口縁部が外反し、内端部をつまみだしている。外面に1条の小さな突帯がつく。土師器は甕70がある。69・71・72はヘラ切り底の坏の底部で出土位置からもSE2出土のものと考えられる。

5号墳地下式横穴墓 (第10図)

墳丘基部に接して、周溝内に地下式横穴墓の竪坑が掘られる。竪坑は周溝検出時点では確認できず、周溝底面をだす作業中に確認された。竪坑部はやや南に歪んだ長方形を呈し、長軸方向の長辺(西側)1.9m、短辺(東側)1.7m、短軸方向の羨門側1.4m、周溝側約1.2m、検出面から床面までの深さは約1.35mを測る。竪坑の周溝側の壁面はテラスを設けて二段掘りされている。また、長軸方向の西側壁面には玄室内同様のU字形鋤先の掘削痕幅約12cm、深さ5~10cmが認められた。竪坑の埋土は茶褐色土や黒褐色土さらにシラスなど一定の層はなさず大きなブロックとして堆積しており、埋葬後一気に埋め戻したと推定される。竪坑から遺物は出土していない。羨門は板閉塞と考えられ、羨門部床面幅0.65m、高さ0.42~0.52mで羨道部中央で一度低くなり、玄門部に向かい再び高くなっている。羨道の長さ約0.50m。玄室は平入りで、不整形を呈す。短軸方向の左壁約1.0m、右壁0.82m、長軸方向の奥壁約1.55m、玄門側1.77m。天井部は寄棟の屋根形をなし、高さは約0.86mを測る。壁面全体にU字形鋤先の掘削痕がみられる。奥壁付近の床面には長さ1.7m、幅0.62mに10cm前後の川原石を敷き礎床を作り、礎床の周端部には長さ30~40cmの大きめの石を置き石椁様に囲っている。人骨は壮年女性で身長約140cmと小柄である。頭部を左壁に向け、頭部付近で耳環1点、胸部付近で刀子1点が出土した。須恵器は、礎床外の頭部側に4点、胸部付近に1点副葬され、すべて何等かのものを入れるために「坏身」として使用されている。

須恵器は、実際は坏身(80~82)3点、坏蓋(78)1点、有蓋高坏の蓋(77)1点となる。

坏身は立ち上がりが比較的短く、底部は平底気味になる。80は赤焼けの須恵器。坏蓋78は、天井部と体部の境が不明瞭で、体部に朱が付着していた。77は天井部と体部の境に稜を有するが、L形端部は丸く仕上げられる。刀子83は全長15.1cm、把木のため関および茎は不明である。耳環84は環体幅約0.4cm、環外径約1.9cmを測る。鉄芯のみが遺存していた。



- 1 耕作土
- 2 赤褐色砂質土
- 3 腐植
- 4 赤褐色砂質土(中砂粒多し)
- 5 アカサギをばらに混入する赤褐色砂質土
- 6 暗褐色砂質土
- 7 アカサギを少量混入する黒色砂質土
- 8 アカサギをほとんど混入する褐色砂質土

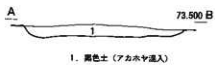
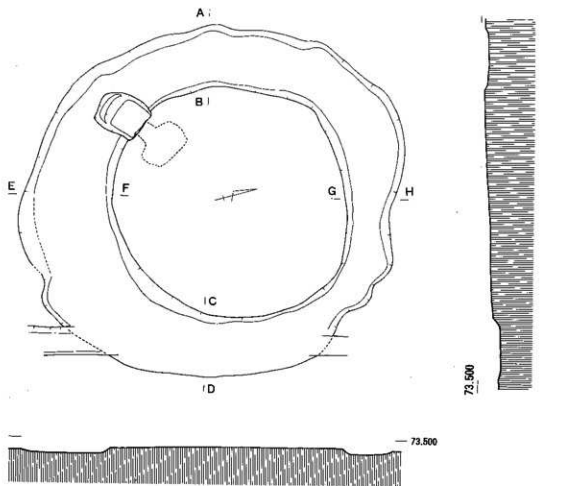
- 9 アカサギを多量混入する黒褐色砂質土
- 10 腐植砂質土
- 11 アカサギを多量混入する黒色砂質土
- 12 アカサギを少量混入する褐色砂質土
- 13 暗褐色砂質土
- 14 暗褐色砂質土
- 15 腐植砂質土(混入する暗褐色土)
- 16 暗褐色砂質土

- 1 耕作土
- 2 アカサギを少量混入する褐色砂質土
- 3 アカサギを少量混入する暗褐色砂質土
- 4 アカサギを多量混入する褐色砂質土
- 5 暗褐色砂質土
- 6 暗褐色砂質土
- 7 腐植砂質土(混入暗褐色土)

- 8 アカサギを少量混入する暗褐色砂質土
- 9 アカサギを少量混入する暗褐色砂質土
- 10 アカサギと黒色土を混入する暗褐色砂質土(混入暗褐色土)
- 11 アカサギと暗褐色土を混入する暗褐色砂質土
- 12 暗褐色砂質土(混入暗褐色土)
- 13 暗褐色砂質土

0 2 m

第8図 1号墳周溝(1/150)・土層断面(1/80)



1. 黒色土 (アカホヤ流入)

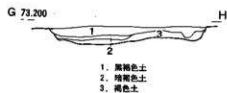


1. 黒色土 (アカホヤ流入)
 2. 褐色土 (アカホヤブロック少量流入)
 3. 黒褐色土 (アカホヤ少量流入)
 4. 黒褐色土 (アカホヤを全体に含む)
 5. 暗褐色土

SE 1 埋土



1. 黒色土
 2. 褐色土

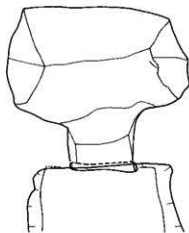
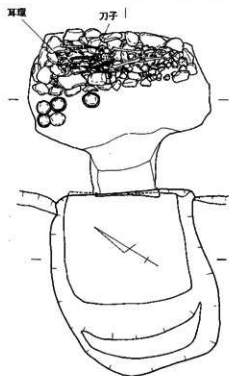
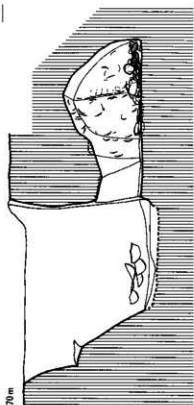
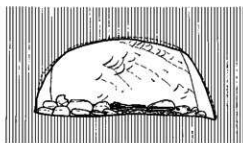


1. 黒褐色土
 2. 暗褐色土
 3. 褐色土

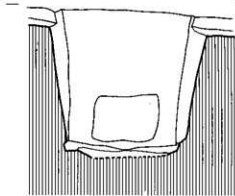


第9図 5号墳実測図 (1/150, 1/60)

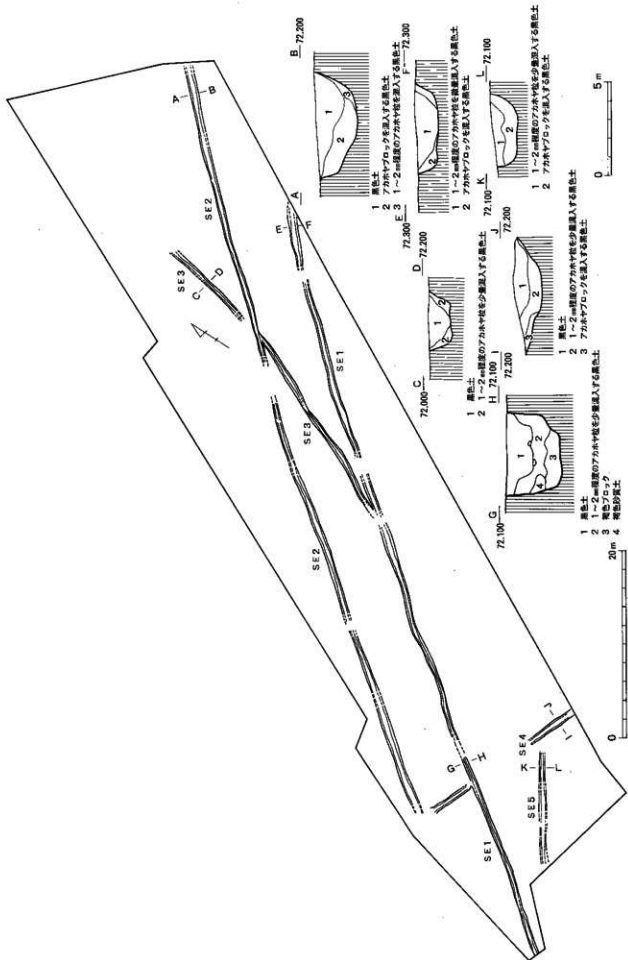
73.720m



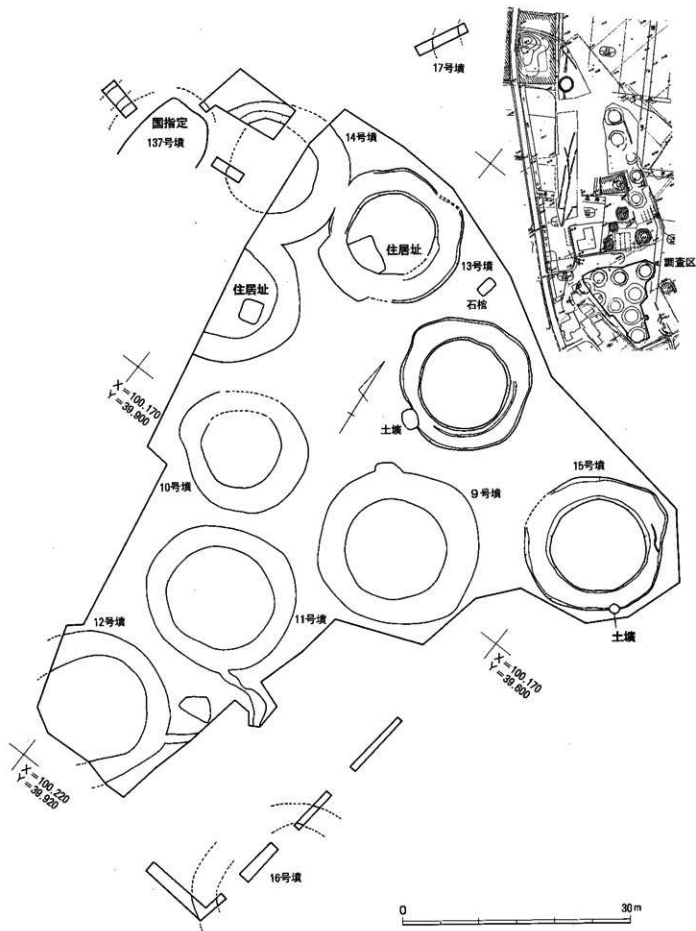
73.370m



第10图 5号填地下式横穴墓遺構実測図(1/40)



第11図 1区溝状遺構分布図 (1/400)



第12图 I-d区 遺構分布图 (1/500)

6号墳

5号墳の南西約9m、国指定129号墳の南に位置する。幅約2.1mのSE5に西側をきられる。古墳の検出面での墳丘径は約9.4~9.5m、周溝の幅は2.5~3mである。断面は、U字形を呈し、深さ40cmを計る。周溝は硬化面をもつ溝状遺構(SE2)と切りあう。埋土は、黒色土でアカホヤ粒子を含む。須恵器には、坏身・壺・壺・提瓶がみられる。壺86は内口縁が外反し、口径14cmを計る。

I-d区(第12図)

検出遺構は、トレンチ調査での確認遺構を含めると弥生後期の住居址2軒、周溝1基、土壇3基、石棺1基であるが、当区検出の遺構はすべて現状保存となったため、調査継続中であった8号墳・13号墳・14号墳・15号墳、土壇2基、石棺1基の一部を調査し、それ以外は未調査で埋め戻しを行った。7・9・10・11号墳については遺構検出段階で出土した遺物について図示し、16号墳、17号墳についてはトレンチで所在を確認しただけで終了した。なお、平成5年、埋め戻し後、土地が陥没し地下式横穴墓が発見され、新富町教育委員会によって調査されている。しかし、検出地点が明確でなくおよそ10号墳周辺と推定される。

7号墳

調査区の西端に位置し、1/2程度は調査区外に広がっている。墳丘の推定径約12m、周溝の幅は約2.8~3.8mを測る。周溝の北側が14号墳周溝と接している。遺物には須恵器壺や耳環が出土している。耳環は破損が激しいが環外径約1.8cmを測る。

8号墳(第13図)

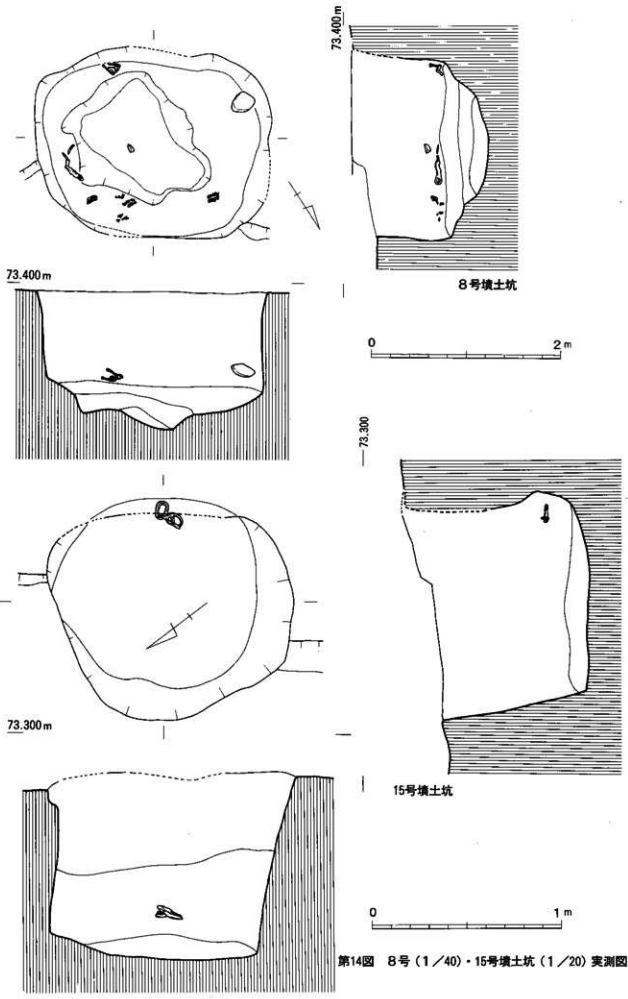
調査区の北側中央に位置し、周溝を切って土壇が作られる。古墳は検出面での墳丘径は約11.5~11.8m、周溝の幅は2.8~3.6mと不整な円形を呈し、東側は裾部から幅約1m、深さ約60cm、断面が逆台形状をなして一段深く掘られる。埋土は上層がきめ細かな黒色土で下層はアカホヤブロックを含む暗褐色土。遺物は周溝の北側と西側に集中し、東側はまばらで少ない。

須恵器には坏蓋・坏身・高坏・罍・壺がみられる。坏蓋は天井部と体部の境は稜があるもの(109・110)と失っているもの(106)がある。106は口縁部内面に段がみられる。107は有蓋高坏の蓋で天井部と体部の境は稜を失っている。坏身は口径10.8~13.3cmと幅が認められる。104は体部1/2までヘラケズリが施される。96は破片であるため穿孔部分は確認できないが罍と考えられる。土師器には壺・壺・高坏がある。壺122は口縁部が短く開き、123は球形をなし、底部は平底となる。高坏は坏部は不明で、脚部は外方に内湾気味に開くもの(126)や緩やかに開くもの(129)などがある。

土壇

周溝南側の縁辺部を切って作られる。長軸2.48m、短軸1.8m、深さ1.26mで床面中央部は不定形に0.20m程度さらに深くなっている。埋土は第1層から第6層までが黒褐色土系で、第7層から第12層までが暗褐色土系で褐色土の硬質ブロックやアカホヤが混入するなど上下で相違が認められ、馬の複数埋葬の状況から追葬の可能性も想定される。馬具、馬歯ともに床面から30cmほど浮いた状態で、馬歯は北側隅で1体分、北東側で馬具とともに2体分検出されいずれも成馬で、前者は右を下にした埋葬されていたらしい。また後者は近接して出土したため当初1体分と考えられたが分析の結果、2体分であることが判明し、左を下に埋葬されていたということである。なお、南側に轡が出土していることからすれば、ここにも馬が埋葬されていた可能性もある。

出土遺物は馬具関係だけである。



第14图 8号 (1/40) · 15号填土坑 (1/20) 实测图

187・199は8号墳SC出土の馬具で兵庫鎮である。おそらく、鏝に伴うと考える。200～202は環状鍍板付轡で、環の長径は8～9cmの楕円形である。ハミと引手の部分が195、196は鉸具で、馬蹄形の金具に196は針金をつけている。断面は隅丸方形を呈し、全長は195が8cm、196が9.4cmである。197・198は、轡の引手の部分で197は端部を屈曲させるタイプである。長さは、197が12.4cm、198が現存長15.3cmである。188～194は飾金具である。189は、鉄板に繊維状の物質が付着している。鋳が2箇所うたれている。190は表面に木質部が残っており、錆着化が著しい。

2箇所鋳がうたれている。188は、鉄板に半分ほど木質部が残っており、繊維状の物質が付着している。鉄板は2枚ほど重なって錆着している。

9号墳

8号墳の南約4m位置する、当区最大の周溝で、検出面での墳丘径は約13m、周溝の幅は3.5～5mと不整な円形を呈し、北側の周溝が一部突出していることから土壌等との切り合いと想定される。

須恵器には坏蓋・坏身・高坏・壺・甕・提瓶がみられる。坏蓋139～142は天井部と体部の墳は稜がなくなるが一部その痕跡を残すもの(139・142)がある。口縁部には端部に段を有するもの(141・142)とそうでないものがみられる。高坏137は長脚の三方透かしの脚部で脚端部は丸く仕上げている。坏身は口径をだせるものがないが、立ち上がりが短く斜方向にのびる。提瓶136は頸部から胴部上半部で外面にカキ目が施される。

10号墳

9号墳の西約5m位置する。検出面での墳丘径は約10m、周溝の幅は1.8～3.8mと不整な円形を呈す。平成5年に調査区内の一部が陥没し地下式横穴墓が発見された。新宮町教育委員会によって調査された後、埋め戻されたため正確な位置をおさえることができていない。おおまかには10号墳周溝内に堅坑が掘られていた可能性が高い。

須恵器には坏身・甕が、土師器は高坏の脚部が出土している。

11号墳

9号墳の南約3m位置する。検出面での墳丘は長径約14m、短径約13mとやや楕円形をなし、周溝の幅は約3mを測る。周溝の南側から幅1m前後の溝状遺構が蛇行してのびているが、出土遺物もみられず時期については不明。未掘。

須恵器には坏蓋・坏身・甕が出土している。

12号墳

調査区の南端に位置し、1/3程度は調査区外に広がる。墳丘の推定径約15m、周溝の幅は約2～4mを測る。周溝の北側から11号墳同様幅1m前後の溝状遺構が蛇行してのびているが、出土遺物もみられず時期については不明。未掘。

13号墳

8号墳の北西約3mに位置し14号墳と接している。また、弥生時代後期の住居址を切り、周溝外側に突出した黒色の凹凸はいくつかの遺構との切りあいを示している。古墳の検出面での墳丘径は約11.5m、周溝の幅は先に述べたように不整円をなし3～3.8mを測る。断面は東側は浅い楕円形をなし、深さは約20cm。遺物は遺構の遺存状況が良好ではなく少ない。

須恵器には坏蓋・坏身・甕がみられる。坏蓋147～151は天井部と体部の境は稜を失っている。口縁部の仕上げは鋭い。口径13.8cm、器高4.2cm。坏身148・149は口縁部が斜に短く立ち上がる。甕152は口縁部が外反し、わずかに内端部をつまみだしている。外面の突帯はみられない。土師器は甕・高坏・碗が出土しているが様相がはっきりしない。154は平安期の高台付坏の底部で、流れ込みと考えられる。

14号墳

7号墳、13号墳、国指定137号墳と接するが、前後関係は不明である。墳丘の規模は推定で12m程度と考えられる。また、トレンチで確認した西側では8号墳同様裾部側では断面が逆台形状に幅0.95m、検出面からの深さ0.85mと二段掘りされている。

15号墳 (第13図)

調査区の北東隅に位置し、周溝を切って土壌が作られる。古墳は検出面での墳丘径は約11.5～11.8m、周溝の幅は2.2～3.6mと不整な円形を呈す。周溝は縁約30～50cmの深さで墳丘裾部にむかって緩やかに上がっているため内側の周溝下端は不明瞭である。埋土は上層がきめ細かな黒色土で下層は暗褐色土。遺物は周溝の北側やや西よりと南西側に特に集中して出土した。

須恵器には坏蓋・坏身・高坏・罍・壺・提瓶がある。坏蓋160～165は天井部と体部の境は稜が失くなり、口縁端部も丸く仕上げられる。163・165は口縁部内面にわずかに段を残す。口径13.6～14.4cm。坏身166・167は、口径13.7・12.85cm、器高3.85・4.2cm。口縁端部は丸く仕上げる。高坏168は長脚2段の三方透かして、口縁部は外方に延び、体部下半に2条の沈線を巡らし、沈線間に刺突文を施している。脚端部は上下につまみだされる。171は丸底気味で口縁部は上方で外方に大きく屈曲して延びる。

壺169・170は短頸壺で口縁部が上方に短く延びる。170には胴部外面にカキ目が施される。提瓶172は口縁部が丸く仕上げられ、外面にヘラ記号が付される。

土師器は甕・壺・高坏・坏蓋がある。壺は頸部に稜をもたず外反するもの(173・174)頸部から直立し口縁端部が外反するもの(175)がある。底部は丸底気味の平底。そのほかに頸部に幅広の突帯を有するもの(185)も出土している。高坏は脚部が細長く裾部が緩やかに外反するものと思われる。坏蓋184は天井部と体部の境は稜が明確で屈曲して稜をなす。

土壌 (第14図)

周溝南東側に、埋土の状況から周溝が約20cmほど埋まった時点で設けられている。長軸1.2m、短軸1.12m、深さ0.95mを測る。平面形は不整な円形を呈し、東側は断面が袋状をなしその部分に甕が出土している。馬体が埋葬されていた可能性もあるが骨および歯等は検出できなかった。

甕1点が床面から約23cmの高さから出土した。

203～205は15号墳SC出土の馬具で、環状鍔板付轡である。鉄環の径は長軸で8.6cm、の楕円形である。鉄環の断面は隅丸の長方形である。204・205は引手で端部を屈曲させるタイプで現存長12.2cm(204)である。断面は204が、いびつな方形、205は中が空洞になった、ロの字型を呈している。

石棺 (第15図)

8号墳の北約3mに位置する。掘り方は平面隅丸長方形で、長さ約2.9m、幅は北側で1.62m、南側で1.6m、深さは約0.16m、石棺部は一段深く掘り込まれていると考えられ、深さ推定で約30cm。埋土は掘り方が黒色土やアカホヤブロック、硬質土ブロックを含み固くしめる。石棺内部はきめ細かい黒色土。石棺は耕作によって一部破壊されているが、推定で長さ2.17m、北小口幅約1.6m、南小口幅約1.4m、深さは25cm程度か。床面には10cm内外の川原石を敷き詰められ、中央よりやや北寄り部分が凹み浅い皿状を呈す。その四周には長さ30~60cmの大きさの石を置き側壁としている。北小口中央部には須恵器坏蓋が副葬され、北小口の側壁も大きな1枚石が配されていることなどから北に頭位をとると思われ、石棺の主軸はN-13-Eをとる。須恵器79は坏蓋で体部がやや内湾気味に開き、口縁部内側に短いかえりを有する。

その他の遺構として、7号墳周溝内側および13号墳に切られた竪穴住居址がある。前者は長軸約2.8m、短軸約2.4m、平面形が長方形をなす。後者は1辺約5mの方形の住居址で、両者とも出土遺物から弥生後期の住居址と考えられる。また、11号墳と12号墳の間に黒色土を埋土とする不定形の土壌が検出されたが未調査で時期不明である。

歴史時代の遺構と遺物 (第5・11図)

I-a区

1号墳北側に5条の溝状遺構が検出された。SE1は調査区北側から南に延び長さ24m、幅約1.5mを計り、SE2の手前で消滅し、SE2に切られて1号墳まで延びる。断面は、浅い皿状を呈し深さ約10cmを計る。埋土は、黒色土でアカホヤ粒を混入している。

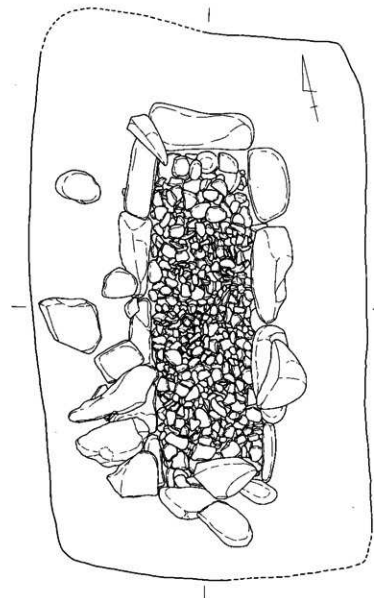
SE2は、SE1に直交し、長さ30m、幅70cmを計る。SE3は、SE1の4.5m西側を平行してはしり、幅58cmを計る。SE4は、SE3の西側に平行するように検出され、北側部分が消失している。SE5は1号墳の南側を切っており、底面のレベル差はほとんど無くSE1とつながる可能性がある。溝状遺構をつくる段階では墳丘は存在していたと考えられるため、墳丘に規制されたと考えられる。

I-b区

SE1は、調査区の中央部から2号墳の手前で消失している。現存長は27mで幅約40cm断面は浅い皿状を呈し深さ15cmを計る。埋土は暗褐色土でアカホヤ粒を混入している。

SE3は5号墳周溝の東側を切り、アカホヤ面まで掘り込まれ床面全体に浅い皿状の硬化面をもつ。SE3は、周溝北側で消失しており、掘り込み面や、硬化面は確認できず、2号墳の近くで再び現れる。SE2は、幅約1m、断面は浅い皿状を呈し深さ10cmを計る。床面に幅20~40cmの硬化面がみられ、SE2の西側は、硬化面のみが確認されたただけで、掘り込み面は確認されなかった。SE3の硬化面の下にSE2の硬化面が検出されている。遺物は検出されなかった。

SE5は6号墳周溝の西側を切り調査区外へ延びている。削平が著しく、西側部分で深さ26cmを計る。SE6は、北は、6号墳の手前で消失し、南側は、調査区外へ延びている。残存状態で幅40cm、深さ6cmを計り、床面に硬化面がみられる。



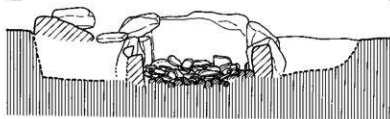
73,500 m



73,500 m

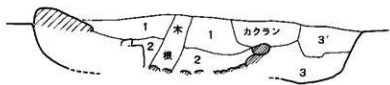


73,500 m

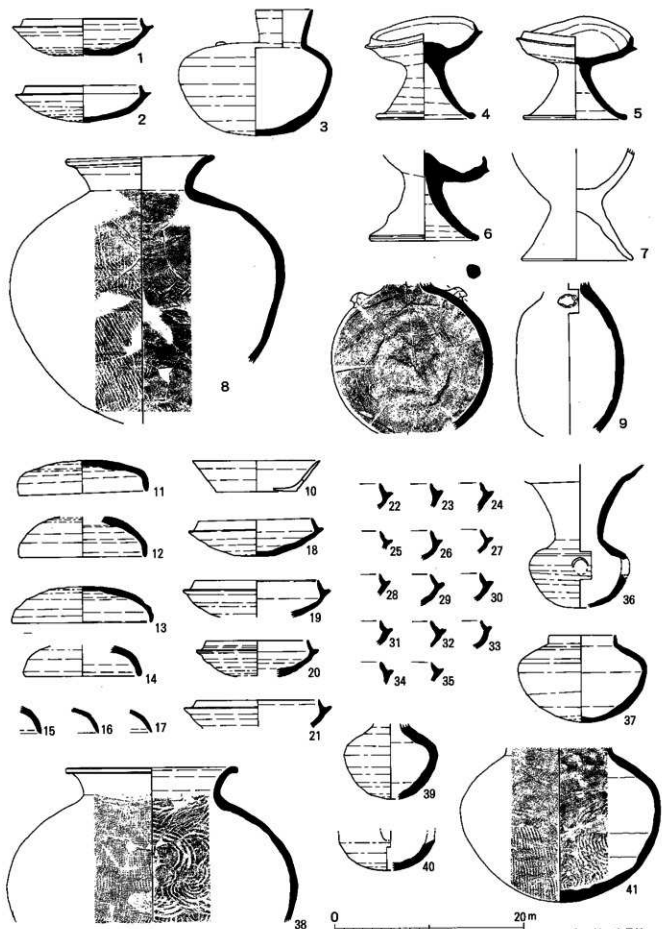


- 第1層 黒色土 アカホヤ種を食み、香の弱か。
- 第2層 黒色土 第1層よりしるる。
- 第3層 黒色土 アカホヤブロック・褐色土硬質土ブロックを食み、かたくなる。
- 第3'層 黒褐色土 中や軟質

73,500 m

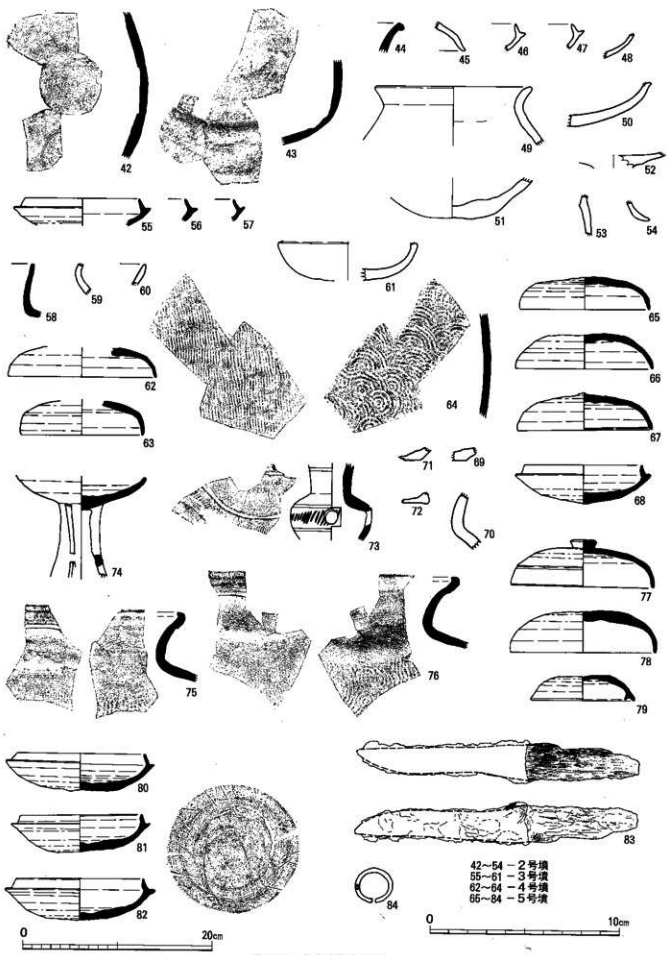


第15図 石棺遺構実測図 (1/20)



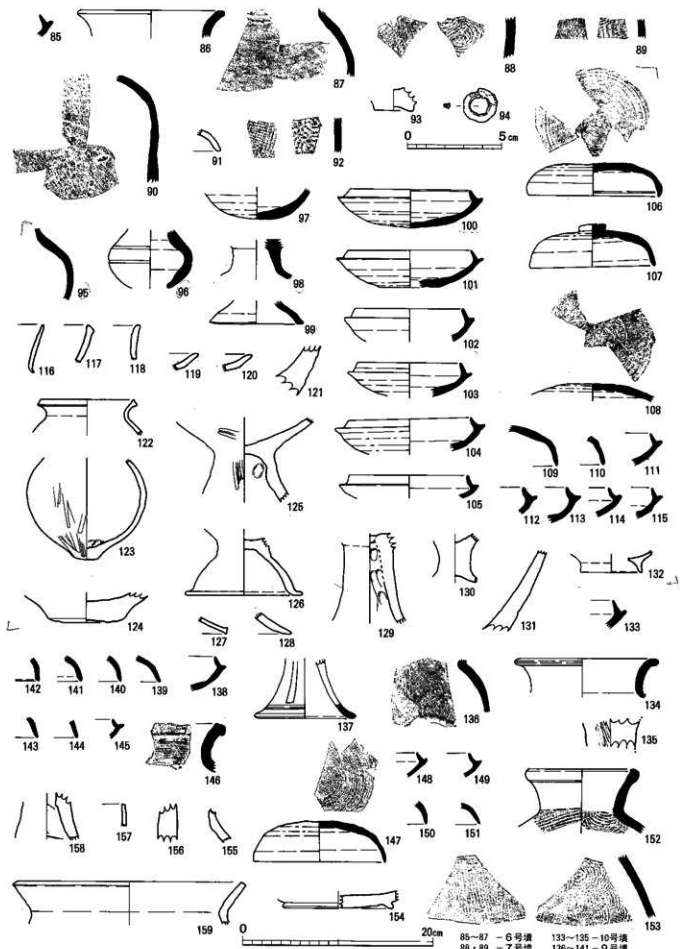
第16图 出土遗物实测图

1~41-1号坑



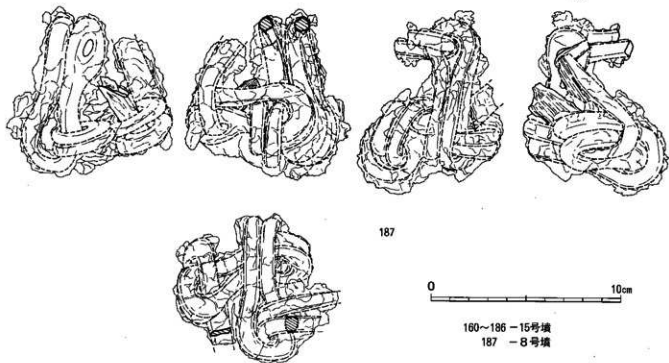
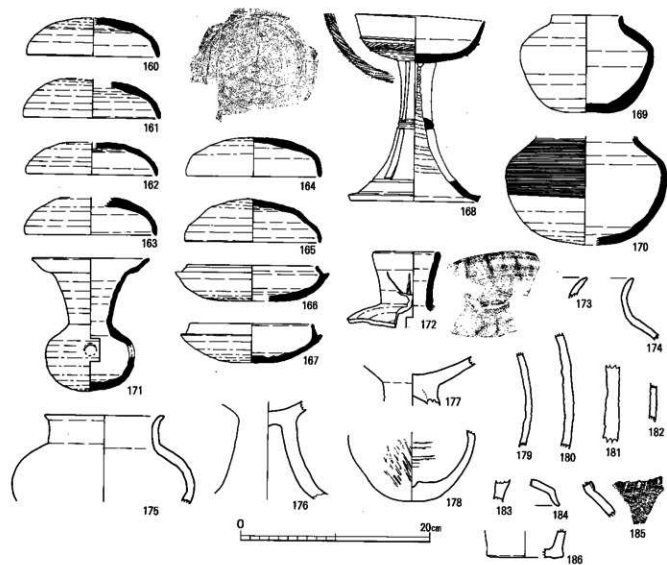
42~54 - 2号墳
 55~61 - 3号墳
 62~64 - 4号墳
 65~84 - 5号墳

第17図 出土遺物実測図

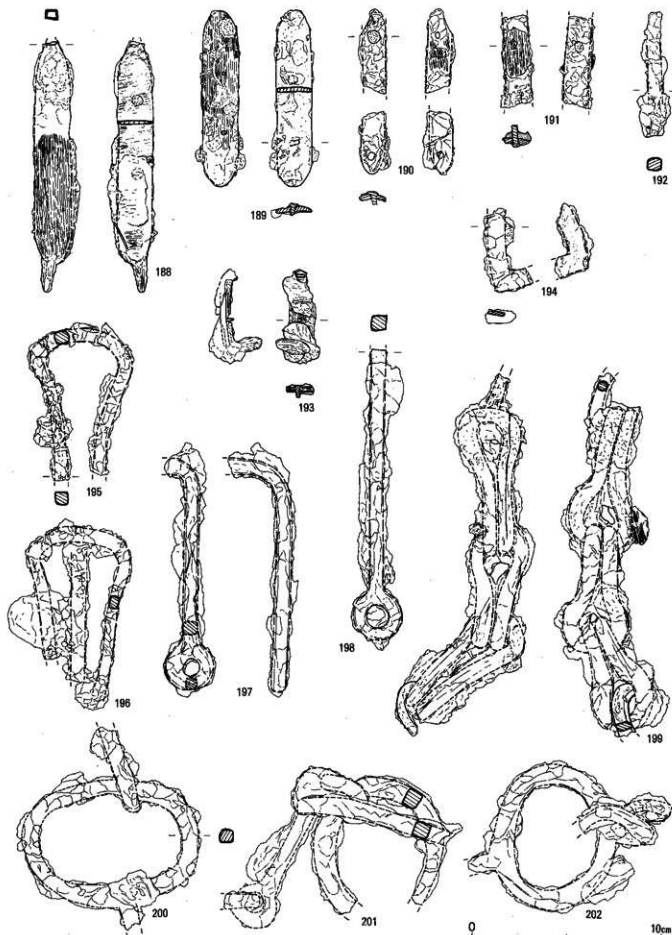


第18图 出土物实测图

85~87 - 6号坑	133~135 - 10号坑
88~89 - 7号坑	136~141 - 9号坑
90~91 - 6号坑	142 - 7号坑
92~94 - 7号坑	143~146 - 11号坑
95~132 - 8号坑	147~159 - 13号坑

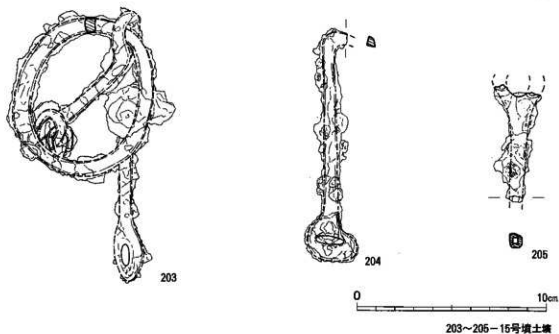


第19图 出土遺物実測図



第20图 出土遗物实测图

188~202-8号横土城



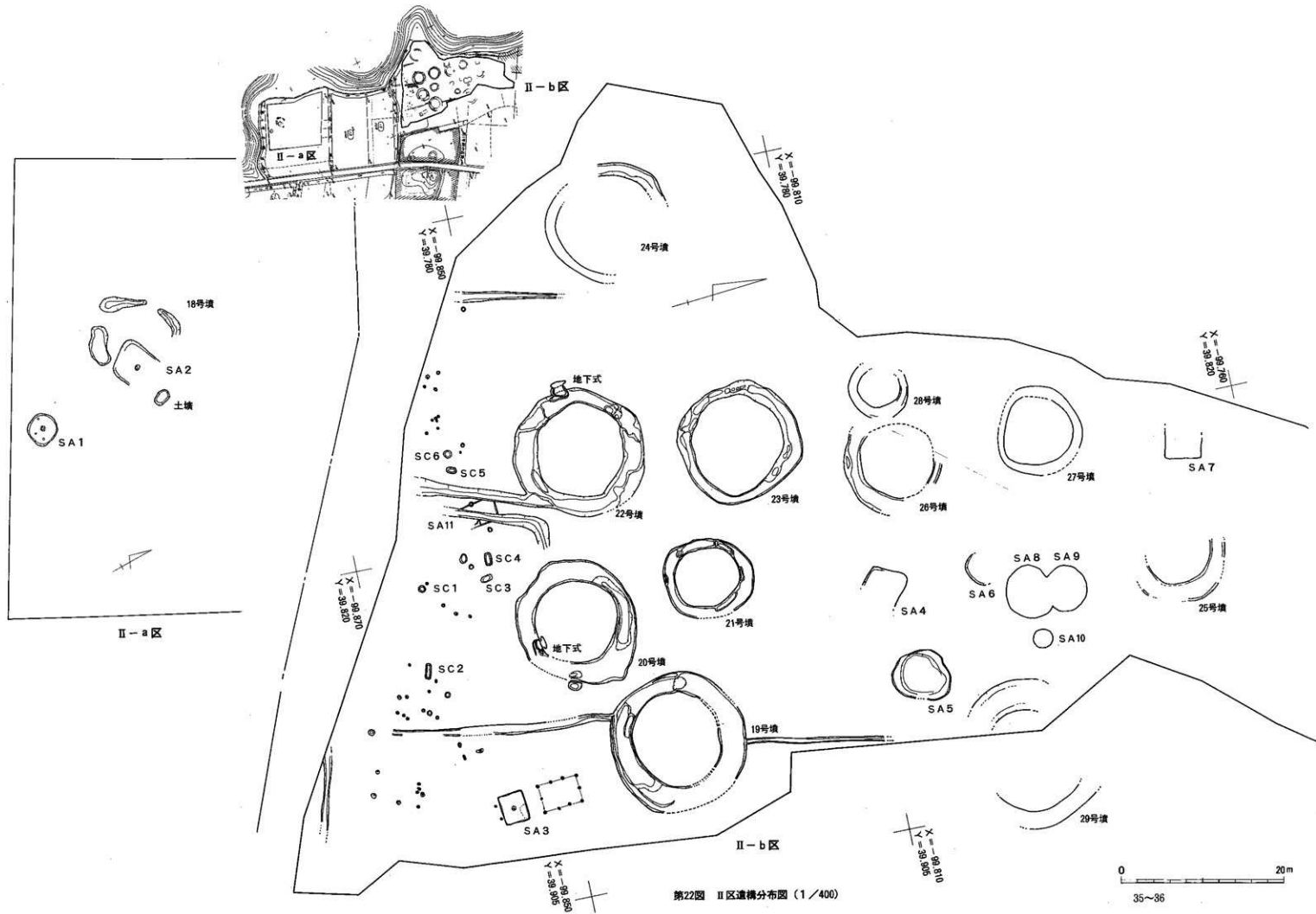
第21図 出土遺物実測図

I-c区

I区の西側の調査区で縦横に溝状遺構が5条検出された。調査区はアカホヤ面まで削平を受けており、溝状遺構は消失している部分もみられる。SE1、SE2は平行して走り調査区の北東から南西に延びている。SE3はほぼ南北方向に走りSE1、SE2に切られる。SE4は、東西方向に走りSE1に切られる。SE5は、SE1の南約5mに位置し北東から南東方向に延びる。SE1は検出面での長さ86m幅約0.6~1mで断面がU字形を呈し深さ0.55mを計る。埋土が、アカホヤ粒を含む黒色土であるSE2は、現存長84m、幅約0.7mで断面形は浅い皿状で深さは0.35mを計る。埋土はアカホヤブロックを混入する黒色土。SE3は長さ36m、幅約0.5m、断面形は逆台形を呈し深さ0.23mを計る。埋土はアカホヤ粒を混入する黒色土である。SE4の東側部分はとぎれてSE1の東側で現れる。検出面での長さは6.7m、幅0.6mを計り断面計は浅い皿状を呈し深さは0.3mである。SE5は検出面での長さ12m、幅0.6m、断面はU字形で深さ0.2mを計る。埋土は黒色土にアカホヤブロックを混入する。遺物は、はっきりとした形では検出されておらず、溝状遺構は調査区外へ延びており北側については1号墳南側の溝状遺構に続く可能性が考えられる。

第3節 II区の調査(第22図)

II区は、工事区の西隅、標高約71m丘陵縁辺部にあたるが、調査区全体がすでにアカホヤ層まで削平されており遺構の残存状況は良好ではなかった。調査区は南端のa区と古墳の密集するb区に分かれる。a区は縄文時代後期の住居址2軒、18号墳、馬具を出土する土壌1基が検出され、b区では、縄文時代後期の住居址5軒、弥生時代の住居址1軒、古墳周溝1基、地下式横穴墓2基、平安時代住居址2軒、掘立建物跡1棟、



第22图 II区遺構分布图 (1/400)

土壌5基、時期不明の溝状遺構5条からなる。a・b区の間は工事区外、b区北側では、トレンチおよび工事立ち会いで遺構の確認を行ったが、明瞭な遺構・遺物は発見できなかった。

b区の場合、古墳の群としては1区1号墳を東端とし、国指定も含め24基からなる。検出面での墳丘の規模は29号墳(径12.4m)を最大とし、最小は28号墳(径5.2m)である。20号墳と22号墳では周溝に地下式横穴墓の堅坑が掘られ、22号墳の場合、玄室が周溝から外方向に延びている。また、土壌や柱穴群は調査区の南端に集中し、そのうちSC1では火葬骨を入れた炭骨器が検出されている。

縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の住居址は7軒検出された。3号住居址と11号住居址は平安時代の住居址である。遺物は、古墳時代周溝からも縄文時代後期を中心とした遺物が出土しているが、ここでは住居址出土の遺物について図示した。

1号住居址(SA1)(遺構:第23図 遺物:第38図85~97)

2号住居址の南西に位置する。平面形は円形を呈し、支柱穴は2本と考えられ、床面中央に不定形の土壌がつくられる。径3.58m、深さ約10cmを測る。

85は外方に長く延びる薄手の口縁部で、内外面ともヘラミガキが施される。胎土には鉱物粒を含む。86は頸部がなめらかにのびる形態で、外面に沈線文が施されるが、沈線間に磨消縄文はみられない。外面はヘラミガキ、内面はていねいなナデ調整。87は外面に沈線文と刺突文組合わせた文様が施され、器面調整はナデである。88は磨研土器の底部である。89は磨石で両面に使用痕がみられる。砂岩製。90は敲石で先端部に敲打痕が観察される。砂岩製である。91は偏平な花崗岩製の円礫を利用した磨石で、長軸方向の側面も使用した痕跡が認められる。92は偏平な円礫を利用した磨石で、さらに側面の一部に使用によって激しく摩擦した状況が観察できる。尾鈴酸性岩製である。

2号住居址(SA2)(遺構:第23図 遺物:第24図1~22)

18号墳と重複して検出されたが、アカホヤ層がすでに削平されていることや東側が攪乱されるなど遺構の残存状況は良好でなかった。平面形は不定形の方形をなすと思われ、短軸約4.8m、長軸が推定で5.2m前後と考えられる。深さは約5cm。柱穴については不明だが、住居中央に長径約0.8m、短径約0.6mの楕円形の掘り込みをもつ。

遺物は、1は横方向に連続して押圧されるが工具は不明。さらに縦方向に突帯につきその両側に刺突文が施される。2は外面に刺突文、内面は摩擦し不明。3は口縁部外面に粘土紐が貼り付けられる。内面は貝殻条痕文か。4は頸部は稜を有さず口縁部が短く外傾する形態で、波状口縁。口縁部内面はやや深い横ナデが施され、口縁部は内側に粘土を貼り付け拡張している。粗製で砂粒を含む。外面にスス付着。6は頸部内面に明確な稜を有するが、くびれおよび胴の張りは弱い。口縁部は内湾しながら短くくび、内面に浅い沈線を有す。波状口縁で波頂部に刻みが施される。内外面ともナデのあと粗いヘラミガキ調整。胎土には砂粒を多く含む。7は深鉢の胴部片で外面は貝殻条痕文でススが付着し、内面は粗いナデ調整。8は外面に浅く弧状に貝殻条痕文が施される。外面にスス付着。胎土は粗く、褐色色を呈す。9は粗製平底の底部で、外方に開く。10~12は深鉢形土器の口縁部で、内面は直線的にのびる部分は面取りされる。13は頸部内面に稜をもち、口縁部は外方に延びる。胎土は10~12同様砂粒を多く含む。14は弥生中期の甕あるいは壺の胴部で小さな三角突帯が付される。外面はハケ調整。15は石鉢で砂岩製、長軸方向を打ち欠き、縦方向に使用している。重

さ147.9g。16は磨製石斧の先端部で基部は欠損している。背面は剥離痕が残り、腹面は丁寧に磨かれている。流紋岩製。17は磨製石斧の基部で先端部は欠損している。砂岩製。18は偏平な尾鈴酸性岩で、背面と腹面の両側を磨り面として使用し、さらに側面にわずかな使用痕が認められる。19は偏平な尾鈴酸性岩で、背面と腹面の両側を磨り面として使用し、さらに側面に使用され、その部分が極端に摩耗しており、断面の形状が算盤玉を呈する。20～22は、砂岩製で、台石あるいは石皿と考えられる。背面と腹面の両面に磨り痕がみられるが、20は凹石としても、21・22にはスジ状の痕跡が認められ、多機能わたって使用されたと思われる。

5号住居址（SA5）（遺構：第23図 遺物：第24、25図 23～25、39・40）

4号住居址の東約3.6mに位置するが一部攪乱を受けている。平面形は楕円形の不定形をなし、住居の周囲は床面から約8cmほど高くベッド状を呈す。埋土は黒褐色土で砂粒を多く含み、固くしまる。長径約6m、短径約4.9m、深さ約0.15mを測る。遺物のほとんどは一段低い床面から出土した。

23・24は口縁部が外方に長く延びる形態で、23は口縁部内面に浅い横ナデが施される。内外面ともナデ調整。24はナデの後粗いミガキが施される。波状口縁と思われる。外面にスス付着。25は波状口縁と推定される。外面にススが付着する。胎土に砂粒は少ない。26は頸部から短く延びる口縁部で口縁部内面に浅い横ナデが施される。口縁部は横ナデ、頸部以下は粗いナデとなる。胎土に金雲母が少量含まれる。27・28は口縁部が内湾気味に延びる。端部は細くなるがわずかに面取りされている。内外面ともナデ調整。27は外面にススが付着する。29は口縁部が肥厚し、波状口縁を呈す。外面は粗いヘラミガキ、内面はナデ調整。胎土には鉱物粒を含む。30はやや薄手で、頸部内面の稜が明確で、丸く膨らむ胴部がつくと考えられる。口縁部は内湾気味に延び、端部で強く内湾し、波状口縁となる。外面はヘラミガキ、内面も摩耗して不明だがヘラミガキと考えられる。31は30と同様の形態の土器の頸部で、30よりは内面および外面の稜があまく、やや厚手で、胎土も粗い。外面にスス付着。32は波状口縁の波頂部で内外面ともナデ調整。胎土に砂粒を含み、色調はにぶい黄褐色をなす。33は内湾する口縁部で、口縁部に刻み、外面に刺突文がみられる。34は内外面とも条痕文。35は内外面とも条痕文が施され、ミズバレ状の突起が貼り付けられる。34と同一個体と考えられる。39は石錘で砂岩製、重さ121.7g。長軸側が打ち欠かれる。40は流紋岩製の打製石斧である。断面形は蒲葺状をなし、表面は縁辺部に細かな調整が施される。背面は石核からの剥離後、側方からの大きな剥離が数回行われているにすぎない。

6号住居址（SA6）（遺物：第25図 36～38、41）

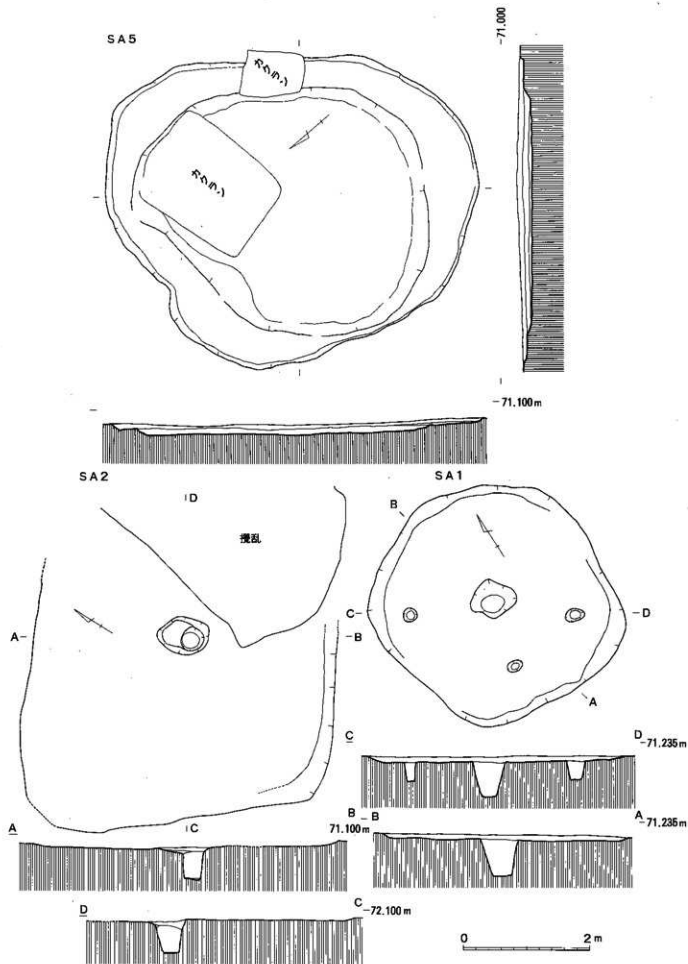
26号墳の北東約10mに位置するが、平面形は円形と推定されるが、北側約2/3は攪乱によって削平されている。推定径約4.2mと考えられ、深さ約7cm。

36は外反しながら長く延びる口縁部である。外面は粗いナデ調整。37は磨石。38は円盤状を呈し、表面に磨痕があり、縁辺部にも敲石状の使用痕が認められる。41は石錘で砂岩製、重さ88.3g。長軸側が打ち欠かれる。

8号・9号住居址（SA8・9）（遺物：第25～27図 42～78）

6号住居址の北東側に近接し、27号墳の南約7m、25号墳の東約11mに位置する。遺構の残存状況が悪く、床面の痕跡のみを確認した。平面形は円形で切り合っているが前後関係は不明である。推定径は、8号が約4.2m、9号が約6.2mである。

42・44は頸部がくびれず、上方にのびる深鉢形土器である。外面はナデ、内面は口縁部がナデ、頸部以下が貝殻条痕が施される。外面にスス付着。44はわずかに波状を呈し、口縁部内面に横ナデによる浅い凹み



第23図 SA1・2・5遺構実測図 (1/80)

がみられる。43はやや頸部がくびれる形態で口縁部はやや内湾気味に延び、波状口縁を呈す。外面は指オサエ、内面は貝殻条痕となる。外面にススが付着する。45は口縁部が面取りされ、44と同様な形態と考えられる。46は外面が燃糸文、内面が粗いナデ調整。胎土には砂粒を多く含む。47は頸部内面に線をもち口縁部が短く外方に延びる。口縁部は平坦で、内外面ともナデ調整が施される。48は内湾しながら延びる口縁部で、端部は丸く仕上げられる。内外面ともナデ調整。49は頸部内面の線は明瞭で、口縁部は内湾気味に延び、波状口縁を呈す。口縁部内面に凹線状の沈線が施され、内外面ともヘラミガキ。他の土器よりは薄手で、精製土器に近い。50は頸部内面の線は明瞭で、胴部は丸く膨らむ。頸部から口縁部にかけて厚手となり、外傾して延びる。内外面とも横ナデのあと粗雑なヘラミガキが施された粗製土器である。胎土には角閃石や輝石などの鉱物粒は含まれず、砂粒を多く含む。51・52は50と同様な形態および胎土と考えられ、口縁部は面取りされる。口縁部内面は、沈線の名残か、横ナデ調整により上方につまみ出された形態となっている。53～57は粗製の深鉢形土器で、胴部があまり張らず頸部内面にも線をもたない。56・57の口縁部内面は外湾せず平坦に延びている。調整は内外面とも粗いナデであるが、55だけはやや薄手で鉱物粒を含み粗いヘラミガキ、色調も褐色をなす。58は皿状の形態をなす土器の口縁部で大きく外方に開く。内外面とも粗いナデ調整。胎土には砂粒を含み、ぶい褐色を呈す。59は深鉢形土器の胴部で外面が貝殻条痕文、内面は非常に粗いナデ調整。60は薄手で他の土器とは焼成、色調が異なる。外面は燃糸文、内面がナデ。61は、51と同様な焼成・胎土の土器の頸部から口縁部にかけての破片を転用した製品で、長軸方向にスジ状の痕跡がみられることから甕と考えられる。長軸6.1cm、短軸4.5cm。

62・63はやや扁平な石材を利用し、背面と腹面の両側を磨り面として使用し、さらに端部・側面までも使用痕がみられる。62が砂岩製、63は尾鈴酸性岩製である。64・68・69は磨石である。62は扁平で小型の尾鈴酸性岩製。68・69は前面に磨痕がみられる。65は球状の石材を利用し、背面と腹面の両側を磨り面とし、さらに端部・側面も極端に摩耗している。66は敲石で縁辺部を使用している。67は扁平な河原石で、背面と腹面の両側を磨り面として使用し、さらに側面までも使用痕がみられる。また、短軸方向に打ち欠きの痕跡があり甕としても利用していた可能性も考えられる。70～72は石錘で砂岩製、長軸方向を打ち欠き、縦方向に使用している。73・74は合石あるいは石皿として使用されていたと考えられ、表・裏面に使用痕が観察できる。75は両面に磨痕が認められ、さらに片方の端部が背、腹面から剝離が行われ、敲打痕がみられる。砂岩製。76は腹面に自然面を残した打製石斧で、刃部には刃こぼれがみられる。砂岩製である。77・78は薄手の砂岩を利用した石錘で長軸方向を打ち欠き使用している。

10号住居址 (SA10)

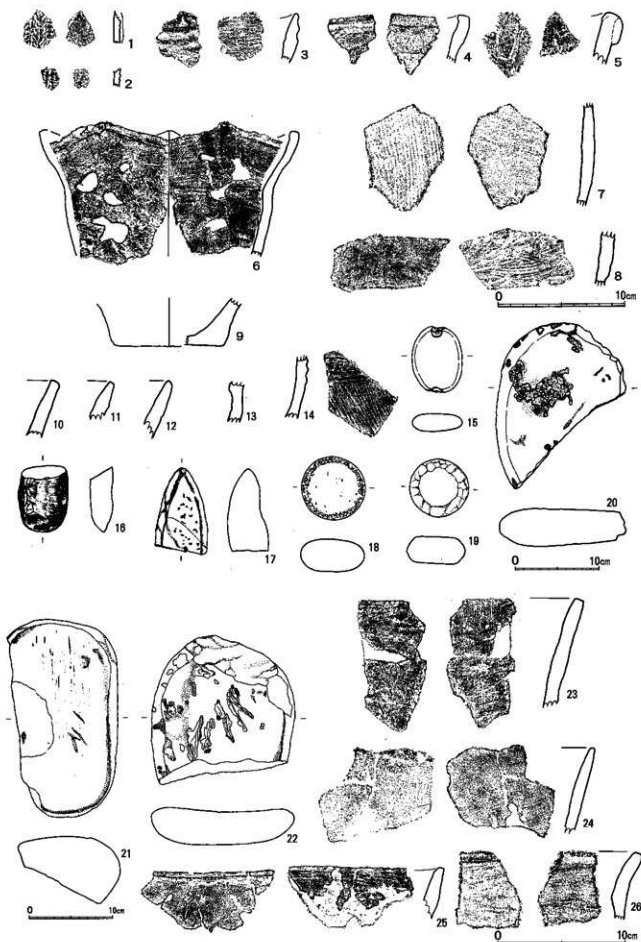
8号・9号住居址の東約1.6mに位置する。平面形は円形をなし、推定径約2.1mを測る。

弥生時代の遺構と遺物

7号住居址 (SA7) (遺物: 第27図 79～84)

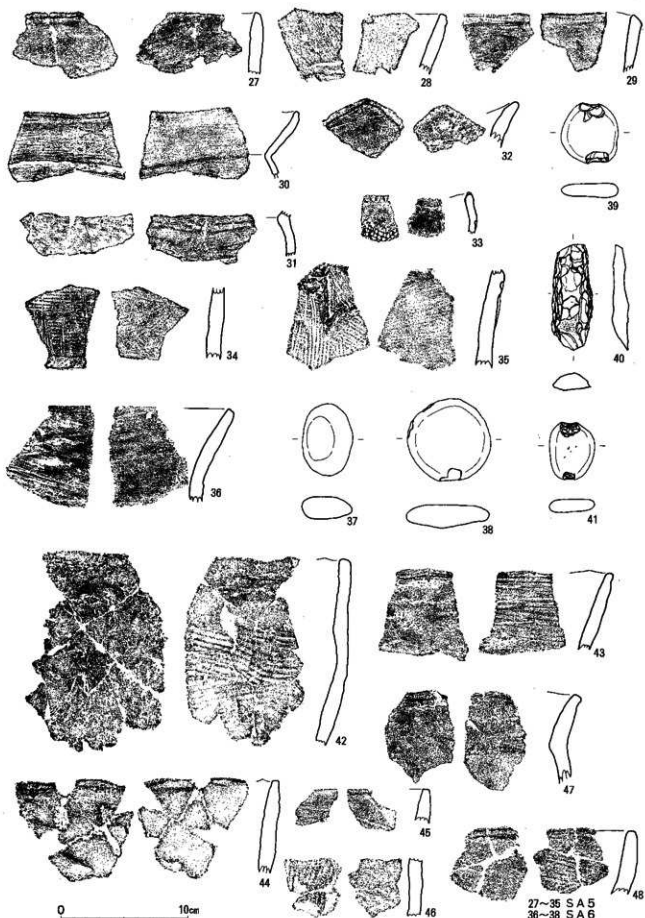
25号墳の北約10m、調査区の北端に位置する。遺構の残存状況が悪く、床面の痕跡の一部を確認した。平面形は長方形と考えられ、長軸 $3.9m + \alpha$ 、短軸約3.6m。

79・80は甕の口縁部で、頸部から外反して延びる。内外面ともナデ調整。80は外面にススが付着する。82は甕の胴部片で外面にはタタキが施されている。内面はナデ調整。83は甕の胴部下半部で外面はヘラミガキ、内面はナデ調整が施される。81は甕の口縁部で口縁部内面に粘土の剥がれた痕跡がみられ、複合口縁を呈していたと考えられる。内外面ともナデ調整。84は高坏の脚部で厚手で柱状に延びる。



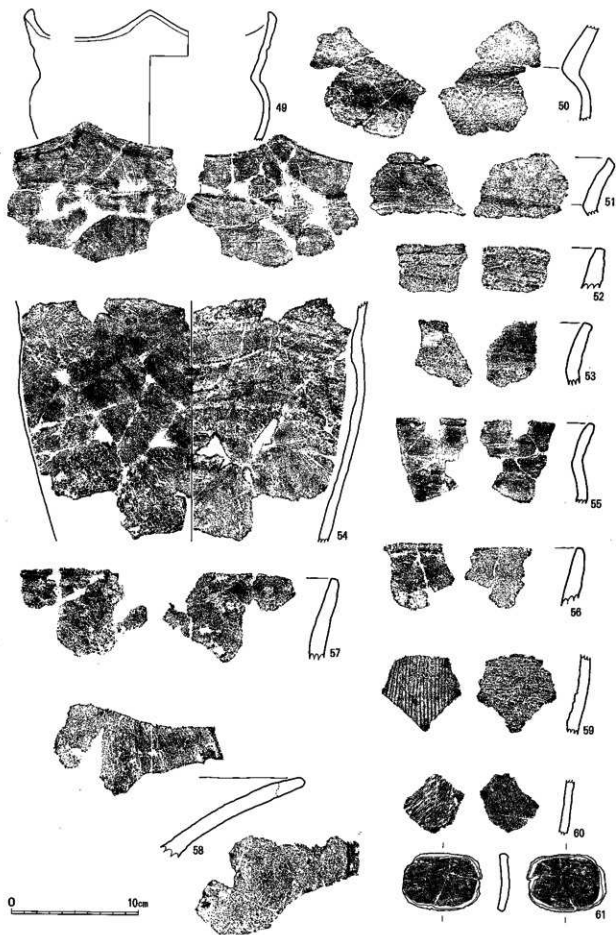
第24図 出土遺物実測図 SA2・SA5

1~22-SA2
23~26-SA5

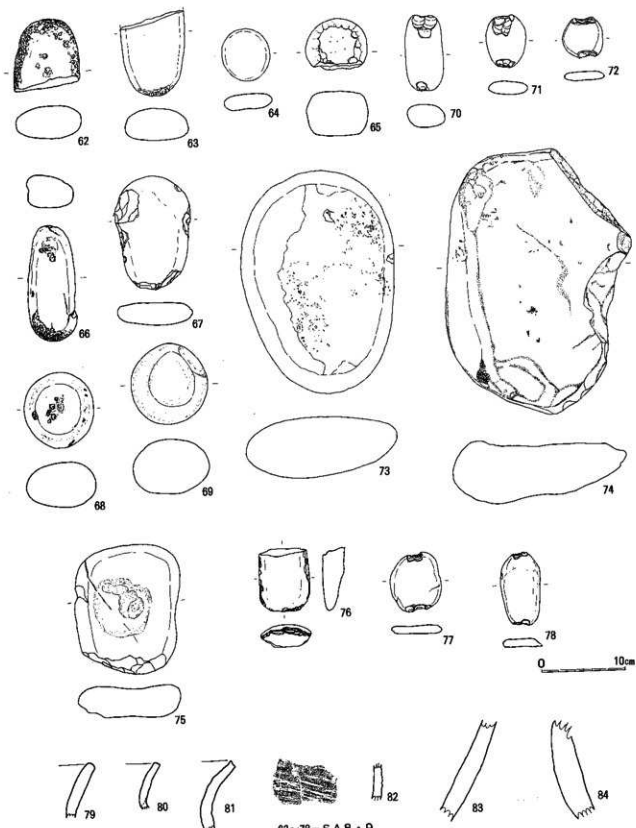


第26图 出土遺物実測図 SA5・6・8

27~35 SA5
 36~38 SA6
 39・40 SA5
 41 SA6
 42~48 SAB



第26図 出土遺物実測図



62~78 - SA B · 9
 79~84 - SA T

第27图 出土遺物実測図

0 10cm

古墳時代の遺構と遺物

18号周溝 (第28図)

Ⅱ区の南側に位置し、標高約70m付近に位置する。周囲に周溝はなく、単独で存在する。周溝は、途中でとぎれる部分があり、推定墳丘径10.8~11.0m、推定周溝径14~20mの間で一定していない。周溝の南西側は攪乱坑等があり、周溝のプランがはっきりとしない。墳丘の形態も南西側が確認できないが、円形と考えられる。周溝の断面は、北側と南側では、割と急な掘りこみをもち、西側では、ややならかな断面を呈する。周溝の深さは約0.5m~0.6mで、アカホヤ粒の混入した暗褐色土が堆積している。

遺物は少なく、わずかに土師器片と須恵器片が出土している。

18号墳土坑 (第29図)

18号周溝の東側で確認される。長軸2.02m、短軸1.46m、深さ0.7mを測る。北側にテラス状の平坦面をもち、西から東にかけて緩がめぐる。床面はほぼ平坦で、北側にビット状の掘りこみがある。埋土はアカホヤ粒を含んだ暗褐色土や黒褐色土が堆積している。

遺物は、馬具の一部が出土しており、土坑の南西側の中位部分から出土しており、馬具の一部である。2・3は革金具で、方形金具の一辺は約3cm前後の正方形である。厚さは約2mm、4個の紙がうたれており、2は金銅製であったと思われる、両面に金箔が一部残存している。裏面には革と考えられる物質が付着している。3も2と同じで金箔の一部が残存している。1・4・9は飾金具である。1はわずかに金箔が残存している。穿孔が1箇所見られるが、紙が打たれていた部分と考えられる。4は、木質部分が残っており、紙が2箇所に打たれている。9は、2箇所に紙がうたれている。5~8は、木質の部分がのこっており、木質の回りは錆着化が著しい。7は、木質の部分に、紙がうたれている。

19号墳

調査区の東端、当遺跡唯一の獨立柱建物の北側に位置し南北を溝状遺構1・2に切られる。東側は、削平されており周溝は明確でない。検出面での墳丘径は、11.4m、周溝幅は約2.5m、深さは、60cmを計る。断面はU字形をなし、南側は、一段深く掘りこんでいる。埋土の、上層はアカホヤ粒を含む黒色土が主で下層は黒褐色土を中心とする。遺物は、周溝の西側に集中し須恵器壺・壺片が多く出土している。

須恵器は、坏蓋・坏身・提瓶・壺・甕がみられる。坏蓋210・211は、天井部と体部の境に稜がある。208は、口径13.1cm、器高4.2cmを計る。坏身209は、口径11.7cm、器高3.6cmで、底面にへう記号がみられる。提瓶212は、外面にカキメが施され、213は口径7.8cm。壺214は、口縁外端部が肥厚シタタキによる成形を施し外面には自然釉がみられる。215の甕は、外面に平行タタキ、内面に同心円タタキが施される。

土師器は、甕・壺・坏身・高坏がみられる。甕216は、口頸部は短く反し口縁端部は丸く仕上げる。221の坏身は、内外面に丹塗がみられる。222は、口径12.4cm、底径6.3cm、器高4cmを計る。高坏223~225のは、内外面に丹塗が施され外面はミガキ、内面はナデ調整が施される。223は、口径15.4cm・器高13cm、224は口径15.2cm・器高10.5cm、225は、口径13.9cm・器高9cmを計る。

20号墳 (第30図)

20号墳は、19号墳の南西約2mに位置し南側の周溝内に地下式横穴墓の堅坑が掘られる。古墳の検出面での墳丘径は約10.3m、周溝の幅は1.8~3mの不整な円形をなし、断面は浅い皿状を呈し深さは20cmを計る。

埋土のアカホヤ粒を含む褐色土である。なお、地下式横穴墓羨門部分で、須恵器の坏身が1点出土している。

須恵器には、坏蓋・坏身・甕・壺・提瓶がある。坏蓋は、天井部と体部の境に稜をもつものと、稜を失っている228・229がある。226・227は、口縁部に段をもつ。坏身230～232は、わずかに丸みを帯びた底部から体部が内湾して開き、内傾するたちあがり有し、口径は11.3～12.7cm、器高は4.3～4.6cmを計る。232は、底面にヘラ記号がみられる。甕233は、口径13.6cm。壺234・236は、球形の胴部と緩やかに外反する口縁部をもち、口径はそれぞれ10.8cm・12cmである。提瓶は3個体確認され240は、口径8.3cmを計る。

土師器は、坏蓋・坏身・椀・甕・壺・高坏がみられる。坏蓋は、天井部と体部の境に稜をもつもの243・246・252、もたない244・245・246がある。坏身は、やや内傾し長いたちあがりをもつ247～250・253・258・259・262と短いたちあがりをもつ254～260がある。椀261は口径12.2cm。甕268は、口頸部が長くのび口径26cmを計る。271の高坏は、外面に丹塗が施される。また、周溝北西部から、滑石製の平玉237・238が出土している。

20号墳地下式横穴墓（第32図）

墳丘裾部に接して地下式横穴墓の竪坑が掘られる。竪坑は、周溝検出時点では確認できず、周溝底面を出す作業中に検出された。竪坑は、半円形を呈し、長軸方向の長辺は、1.5m短軸方向は0.6m検出面から床面までの深さは0.46mを計る。竪坑の周溝側の壁面は、テラスを設けて二段掘りされている。竪坑の埋土は、茶褐色土で竪坑西側と羨門の間で須恵器の坏身が1点出土している。埋土の状況からは羨門は板閉塞と考えられ羨道は、0.25mを計る。玄室は平入りで長楕円形を呈する。玄室長は約0.64m、玄室幅は、1.8mを計る。

21号墳

20号墳の北約5mに位置し、古墳の検出面での墳丘径は約7.5～8.0m、周溝の幅1～1.6mと不整な円形を呈し、西側は、裾部から幅約1m、深さ約0.6m、断面が逆台形をなして一段深く掘られる。埋土は、アカホヤ粒を含む黒褐色土。遺物は土師器が少量検出されただけであった。

土師器は、皿・坏身がみられる。皿276は、ヘラ切り底で流れ込みの可能性がある。鉄鏝278・279は、周溝内から検出され、278は鏝身で身幅0.6cm、現存長4.8cmを計り、断面は長方形を呈する。279は、片刃鏝の刃部と考えられ、現存する身部長は、2.3cmで、断面は薄いレンズ状を呈する。

22号墳（第31図）

Ⅱ区-bの南、20号墳の西約5mに位置し、溝状遺構3に南東側を切られ、両側周溝内に地下式横穴墓の竪坑が掘られる。古墳の検出面での墳丘径は約10.8～11.4m周溝の幅は、1.6～3mと一定でない。断面は、浅い皿状を呈し、深さは約40cmを計る。埋土は、黒色土でアカホヤの粒子を含む。遺物は、須恵器を中心に約50点ほど出土した。なお、地下式横穴墓竪坑上部には遺物は検出されていない。

須恵器には、坏蓋・坏身・高台付椀・甕がみられる。坏蓋282は、口縁部に段差を有し、自然軸がみられる。坏身280は、体部1/2までヘラケズリが施され口径13.7cm、器高5.45cmを計る。281の高台付椀は、短い高台の下端全体で接地し、口径12.6cm、底径8.75cm、器高4.1cmを計る。時期的に9世紀にあたり周囲からの流れ込みの可能性がある。283の甕は、口径が胴部最大径より大きく、口径外側に2条の沈線をもち、櫛描き波状文がみられる。284の壺は、底径8.6cmを計る。土師器高坏286は、内外面にナデ調整が施される。

22号墳地下式横穴墓（第32図）

22号墳西側の周溝側に地下式横穴墓の竪坑が掘られる。竪坑は、周溝検出時点では確認できず、周溝底面

を出す作業中に確認された。堅坑は、やや南に歪んだ長方形を呈し、長軸方向の長辺（墳丘側）1.8m、短辺（周溝側）1.5m、短軸方向の北側1.2m、南側0.9m、検出面から床面までの深さは、約0.45mを計る。堅坑の埋土は、茶褐色土でアカホヤ粒を混入する。羨道は約0.3mを計る。玄室は平入りで、長槽円形を呈し、他の3基の地下式横穴墓とは異なり周溝から外方向に延びている。玄室の天井部分は崩落しており、また玄門中央部に幅約70cm・長さ40cm・厚さ30cmの褐色ブロックがみられ、周囲に褐色ブロックは存在しないことからブロックによる閉塞の可能性が高い。遺物は、玄室の中央部左側に刃部長8.2cm、刃部最大幅1.4cm、鹿角製柄4.9cmを計る刀子が出土している。刃部および基部には布状の繊維が付着している。

23号墳

調査区の中央、22号墳の北側約4mに位置し、検出面での墳丘径は11.5～12.5m、周溝の幅は0.9～2.1mと一定でなく北側にテラスがみられる。断面は浅い皿状を呈し深さ約20cmを計り、西側から南側にかけて段差がみられる。周溝の埋土は、アカホヤ粒を混入する暗褐色土である。

須恵器には、环蓋・壺・甕がみられる。环蓋288は、天井部と体部の境に稜をもち口縁端部に段を有し、口径14.2cmを計る。

24号墳

調査区の南西端に位置し、アカホヤ層まで削平され遺構の残存状態は良好ではない。墳丘の推定径は約11.6～12.5m、周溝の幅は、約1.2mの不整な円形を呈する。残存する遺構の深さは10cm程度で、遺物は出土していない。

25号墳

調査区の北側に位置する。西半分は攪乱を受けており東半分が痕跡として確認された。推定墳丘径は約8m、周溝の幅は、約2.5m、深さは40cmを計り、断面はU字形を呈する。

須恵器は、环蓋295があり、天井部と体部との境に稜をもち、口径14.5cm、器高4.35cmを計る。土師器は、坏身・甕・碗がある。甕297～299は、外面に刻目突帯を有する。

26号墳

23号墳の北約5mに位置し西側は、27号墳と接し切り合う。検出面での墳丘径は約9.2m、周溝幅0.7～2.5mの不整な円形である。周溝の断面は、浅い皿状を呈し深さ約20cmを計る。

須恵器は环蓋、土師器は坏身が出土している。环蓋301は、天井部と体部の境に稜を失っており口径13.3cm、器高4cmを計る。坏身304は、やや丸い底部にたちあがりをもつ、外面に磨きが施される。

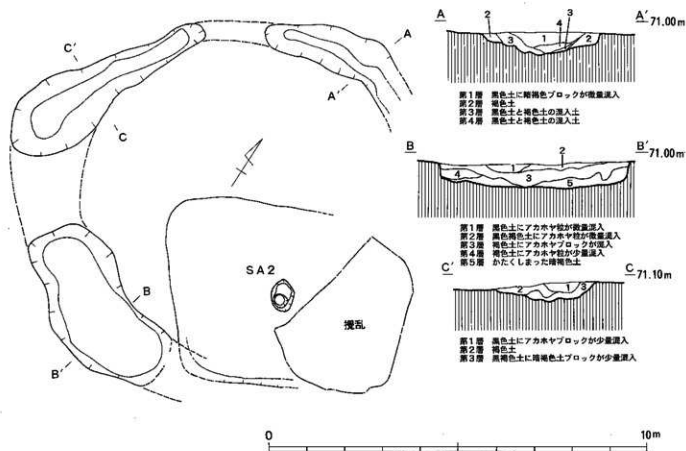
27号墳

26号墳の西側に位置し、調査区最小の墳丘を持つ。検出面での墳丘径は約8.2m周溝幅約1.1m、深さは残存で約15cmを計る。

須恵器は、坏身・高環がみられる。坏身308は、たちあがり長くやや内傾してのび、口縁端部は丸く仕上げ、受け部はほぼ水平にのびる。309は、口縁端部がやや尖り気味で受け部は斜上方にはねあがる。

28号墳

27号墳の北約6.5mに位置し、古墳の検出面での墳丘径は5.3m、周溝幅は0.8～1.3mの不整な円形を呈する。



第28図 18号墳周溝平面・土層図 (1/100)

周溝は残存状態が良好でなく深さ約18cmを計り、遺物はみられなかった。

29号墳

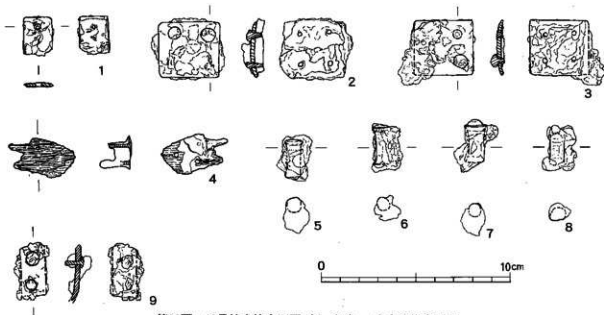
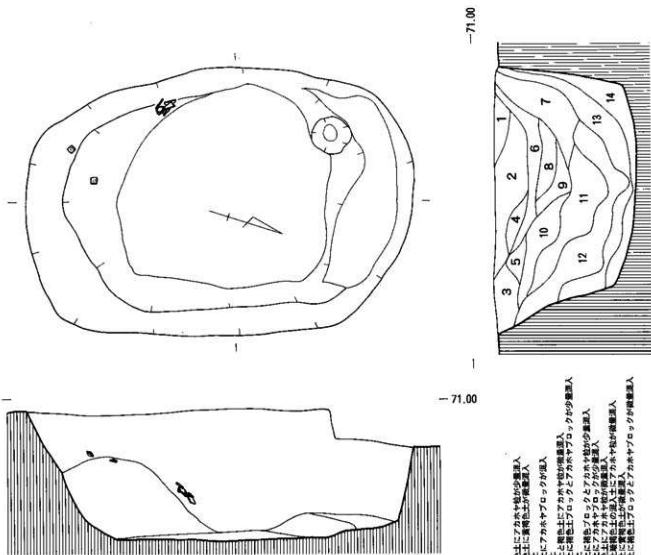
調査区の北東端に位置し、2/3程度は調査区外に広がっている。古墳の検出面での墳丘径は、約12.4m 周溝幅2.2~3.6mの不整な円形を呈し、墳丘規模はⅡ区最大である。周溝の断面は、逆台形で深さは60cmを計る。ほとんどが調査区外のため遺物の出土量は少なかった。

土師器は、口径12.5cmを計る壺312が出土している。

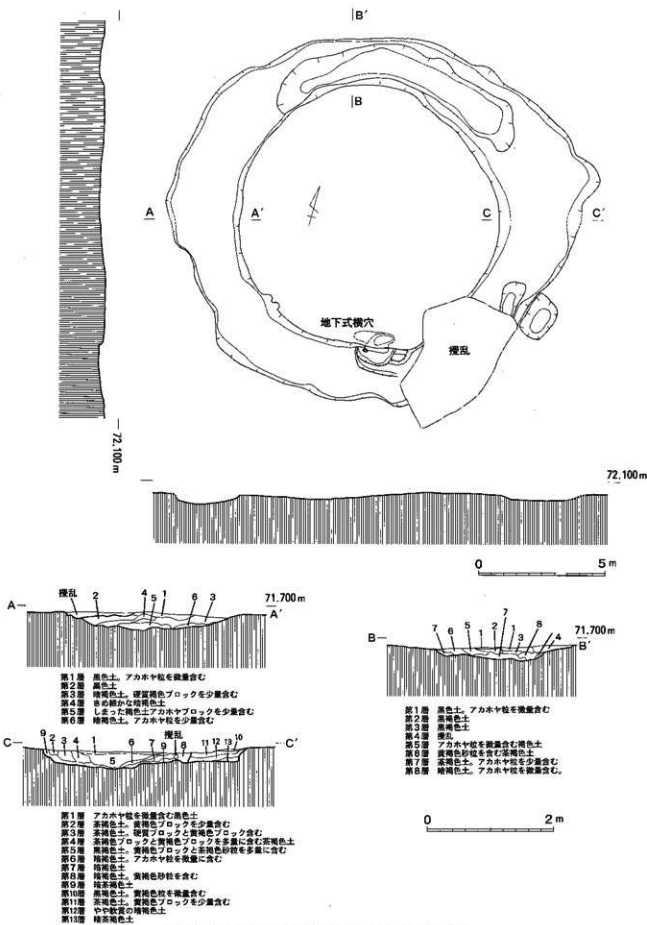
歴史時代の遺構と遺物

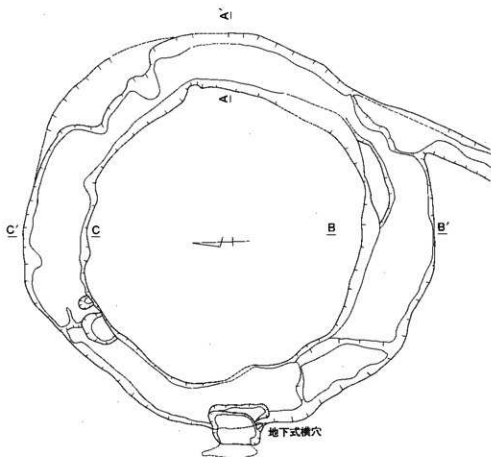
孤立建物跡 (第37図)

3号住居址の北約1.8mに位置する。主軸をN-1-Wとる2間×3間の建物で、3号住居址と同一の主軸を示す。建物の大きさは梁行4.75m、廂行約3.25mで、面積が15.4㎡を測る。柱穴は径約25~40cm、深さ約30cm。遺物は出土していない。

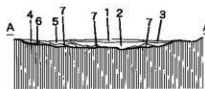


第29図 18号墳土坑実測図(1/20)・出土遺物実測図

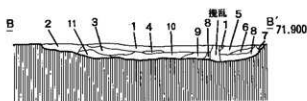




0 10m



- 第1層 きめ細かい茶褐色土。アカホヤ殻を微量含む
- 第2層 黒褐色土。黄褐色ブロックを少量含む
- 第3層 黒色土。黄褐色ブロック・アカホヤ殻を微量含む
- 第4層 黄褐色砂粒と茶褐色のブロックが混入
- 第5層 粗茶褐色土。褐色の硬質ブロックと黄褐色のぶろくを含む
- 第6層 茶褐色土。黄褐色ブロックが少量混入
- 第7層 茶褐色土。自然層と考えられる硬質ブロックを含む



- 第1層 黒色土。アカホヤ殻を微量含む
- 第2層 黒褐色土。黄褐色ブロックを少量含む
- 第3層 黒褐色土。第2層よりも粒の大きなブロックを含む
- 第4層 黒色土。茶褐色の硬質ブロックと黄褐色ブロックを含む
- 第5層 黒褐色土。アカホヤ殻と黄褐色ブロックを含む
- 第6層 黒褐色土。黄褐色ブロックを多量に含む
- 第7層 黄褐色砂粒ブロック
- 第8層 粗茶褐色土。黄褐色ブロックと茶褐色ブロックを含む
- 第9層 粗茶褐色土。黄褐色ブロックを多量に含む
- 第10層 第9層よりやや明るい暗茶褐色土。黄褐色ブロックと黄褐色ブロックを少量含む
- 第11層 粗茶褐色土。5mm程度の黄褐色ブロックを微量含む



- 第1層 黒褐色土。黄褐色ブロックとアカホヤ殻を微量含む
- 第2層 粗茶褐色土。黄褐色ブロックと茶褐色ブロックを少量含む
- 第3層 茶褐色土。粗茶褐色ブロックを含む
- 第4層 きめ細かい茶褐色土

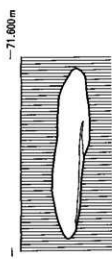
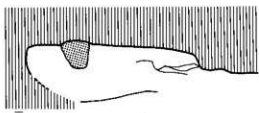
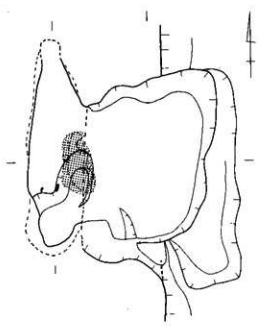
0 2m

第31図 22号横溝溝平面 (1/150)・土層図 (1/60)



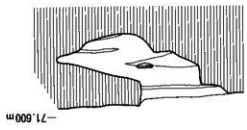
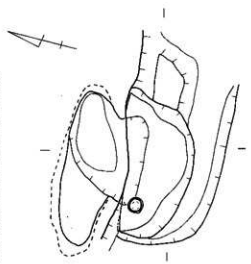
-72,000 m

22号墳

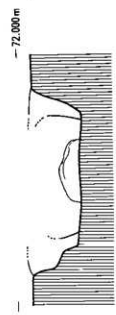


-71,600 m

20号墳



-71,600 m



-72,000 m



第32图 20号・22号墳地下式横穴墓遺構実測図 (1/40)

土坑 (第37図)

すべて調査区の南側に分布し、6基検出された。

1号土坑 (遺物: 第38図 107)

20号墳の南約12mに位置し、平面形は円形を呈し、中央に蔵骨器が据えられる。土坑は、径0.87m、深さ約0.17mを測り、埋土は第1層がアカホヤ粒やブロックを含む暗褐色土でやや固く絞まる。第2層が褐色硬質土となる。107の蔵骨器は、口縁部まであったが重機によって欠損している。口縁部は短く外反すると推定され、肩が張り、胴部最大径となる。胴部に対し器高は低く、底部径は大きい。須恵質で外面胴部上半に自然釉がかかる。内外面とも横ナデだが、粘土の輪積み痕が観察できる。現存高約21cm、底径13.7cm。

2号土坑

1号土坑の東約8mに位置する。平面形は長方形を呈し、長軸約1.94m、短軸約0.89m、深さ約0.19mを測る。遺物は出土していない。

4号土坑

1号土坑の北約9mに位置する。平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸約1.5m、短軸約0.81m、深さ約0.25mを測る。遺物は出土していない。

5号土坑

22号墳の南約7mに位置する。平面形は長方形を呈し、長軸約1.15m、短軸約0.82m、深さ約0.20mを測る。遺物は出土していない。

溝状遺構 (遺物: 第38図 108~113)

1号溝状遺構

調査区南東端、南北に走る溝状遺構で19号墳とぶつかり、そこでなくなっている。幅約1.03m、深さ約0.1m、断面は浅い皿状をなす。埋土は上層がアカホヤ粒を含んだ黒褐色土、下層が褐色土である。

遺物は須恵器が出土している。430は長頸壺の胴部下半部で、外面は丁寧なへら削り、内面は丁寧なナデが施されており、暗赤褐色の自然釉が施されている。底部はやや上げ底の形態をとり、底径は10.6cmである。431は、短頸壺の口縁部から肩部にかけての部位である。推定口径は8.2cm、口縁はやや内側に立ち上がる。外面には黄褐色の自然釉がかかる。432は蓋の一部で、つまみの一部を残して欠損している。433は環蓋の天井部の一部である。外面はへら削り、内面はナデ調整が施されている。434は壺の胴部片で、外面は平行タタキのあと、一部ナデ調整、内面は同心円状の当て具痕がわずかに残る。435は壺の口頸部で、外面には、横方向の沈線を設け、櫛描波状文が施されている。内面は丁寧なナデ調整が施されている。436は壺の口頸部で、外面には横方向の沈線、櫛描波状文が施されている。内面は丁寧なナデ調整が施されている。437は壺の胴部片で、外面は細かい平行タタキが内面は丁寧なナデが施されている。

2号溝状遺構

調査区東端、南北に走る溝状遺構で1号溝状遺構とはほぼ同一の主軸を示し、19号墳とぶつかり、北側は途中で消失している。幅約1m、深さ約0.1m、断面は浅い皿状をなす。埋土は上層がアカホヤ粒を含んだ黒褐色土である。前述したように溝状遺構が掘られたとき、まだ古墳の墳丘が存在していたならば、墳丘をはさんで溝状遺構がつくらたと推定され、1号、2号は主軸や埋土の状況から同時期のものと考えられる。

3号溝状遺構

22号墳の東に位置し、11号住居址を切って20号墳に向かって東に屈曲するが、20号墳の手前で消失している。幅約1.2m、深さ約0.12m、断面は浅い皿状をなす。埋土は上層がアカホヤ粒を含んだ黒褐色土、下層が褐色土である。

遺物としては布痕土器や土師器環がある。108は土師器環の底部でヘラ切り底である。底径約7.6cm。109は布痕土器でかなり硬質である。

4号溝状遺構

3号溝状遺構の西に位置し、平行して走る。11号住居址を切って22号墳と交わったところでなくなる。幅約1.32m、深さ約0.21m、断面は浅い皿状をなす。埋土は上層がアカホヤ粒を含んだ暗褐色土、下層が褐色土となる。

遺物は少なく、110は須恵器環身で古墳周溝からの流れ込みと考えられる。111は土師器環の口縁部で焼成は良好。

5号溝状遺構

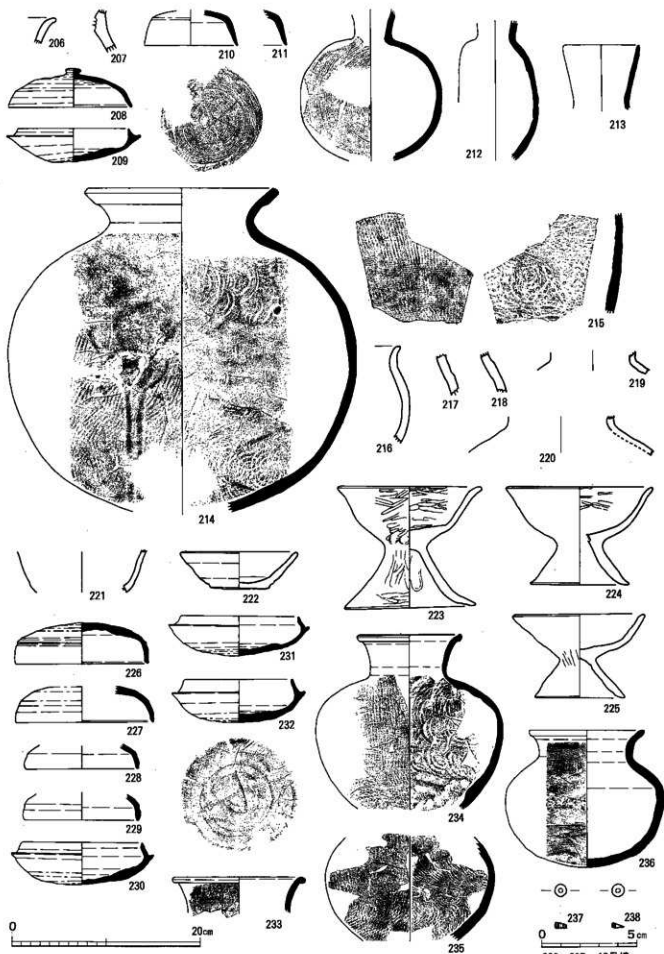
22号墳の西約11mに位置し、現存長12m、24号墳の手前で消失している。幅約0.7m、深さ約0.05m、断面は浅い皿状をなす。埋土は上層がアカホヤ粒を含んだ暗褐色土、下層が褐色土である。112・113は船元系の土器で流れ込みと考えられる。外面は縄文で、突帯が数条貼り付けられ、突帯および突帯間に半截竹管による刺突が施される。

6号溝状遺構

調査区の南東隅に位置し、東西に走る。幅約0.5m、深さ約0.08m、断面は浅い皿状をなす。

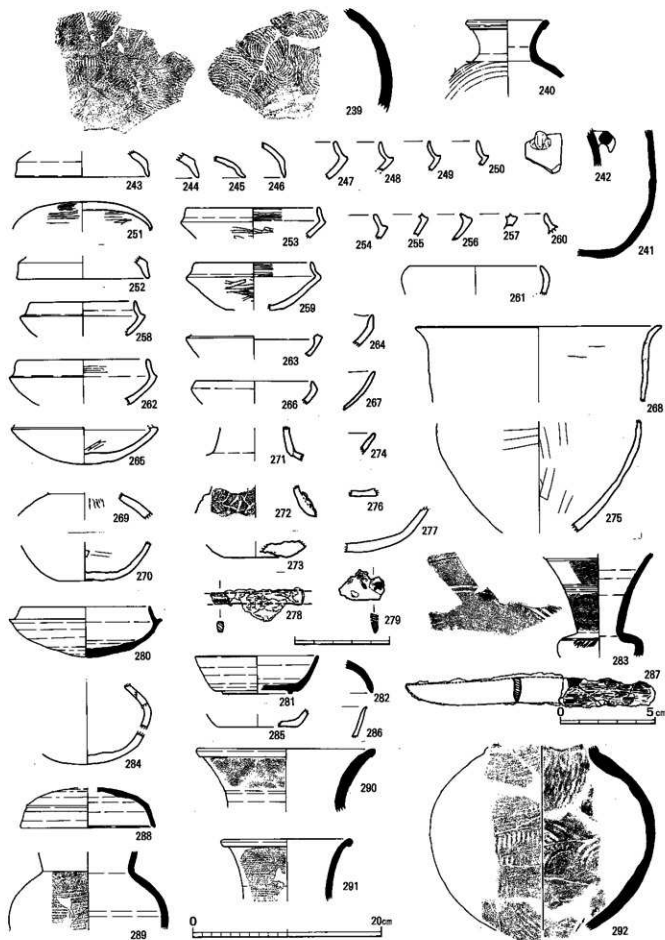
SA3 (遺構：第36図 遺物：第38図 93～97)

調査区南東側、19号墳の南に位置する。長軸3.8m、短軸3.2mの方形プランで北東部にカマドと思われる灰白色粘土が潰れて検出された。そして住居跡のほぼ中央には埋甕が設置される。粘土は、幅1.5m、奥行0.7mの範囲に広がっている。粘土の奥壁中央には、半円形で焼土が3cmの厚さで堆積していた。遺物は埋甕のある中央付近から多く出土している。検出面から床までは約5～10cmで、アカホヤブロックを多く含む暗褐色土で、貼床を作っている。貼床の厚さは約5cmである。埋甕を含む住居跡中央部には、北側に突出した落ち込みがあり、その中央に埋甕が埋設してある。埋甕を埋設するための掘りこみには、アカホヤ粒の混入した暗褐色土が、甕の内部にはアカホヤ粒や砂粒を含んだ暗褐色土が埋土として確認できた。住居跡内は、アカホヤ粒を含んだ暗褐色土が混入している。遺物は布痕土器片等が出土している。カマドと埋甕を伴う住居跡は検出例が少なく、貴重な事例である。



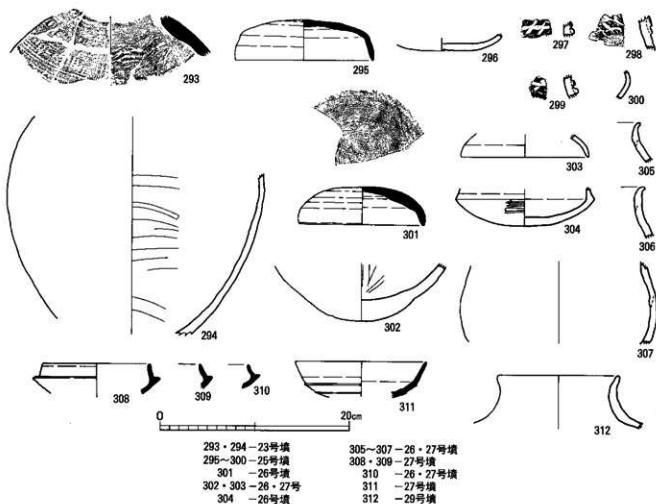
第33图 18~20号出土遗物实测图

206・207-18号坑
208~226-19号坑
226~227-20号



第34图 20~23号出土文物实测图

239~275—20号填
 276~279—21号填
 280~287—22号填
 288~292—23号填

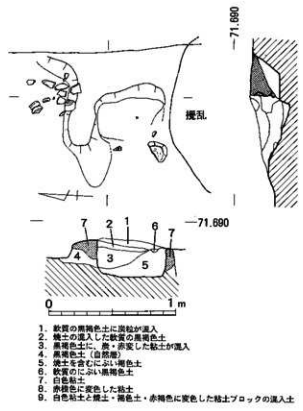
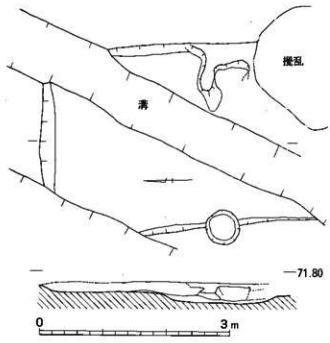
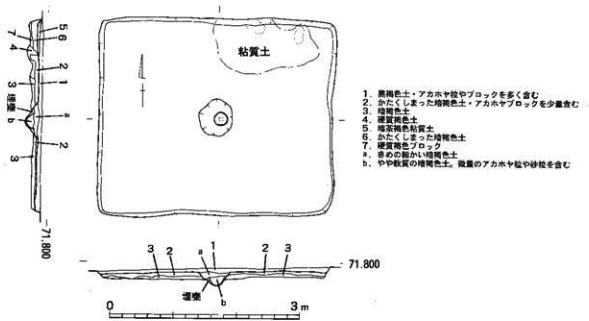


第35図 23～29号出土遺物実測図

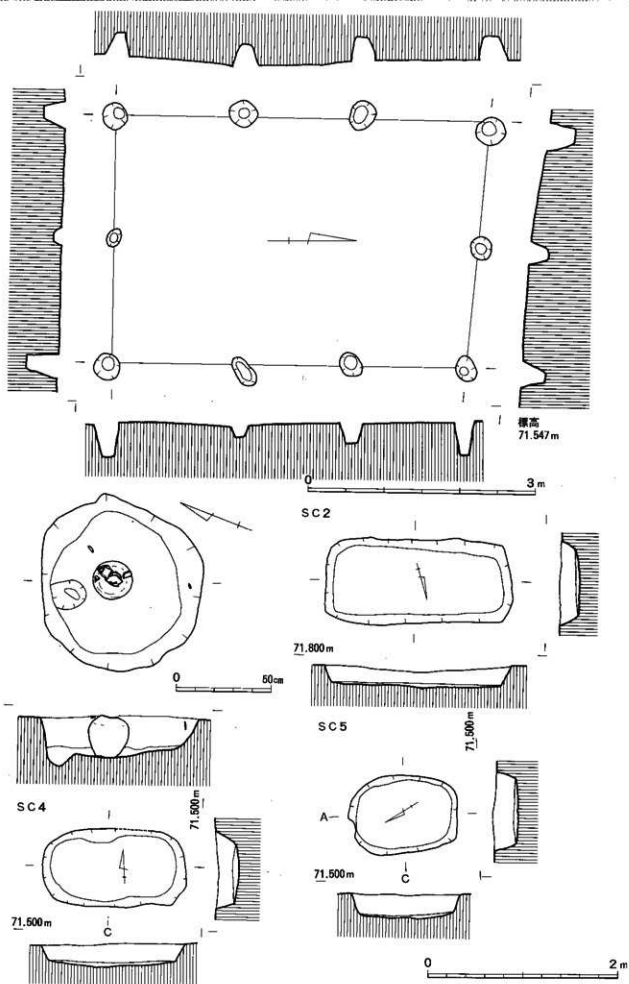
SA11 (遺構：第36区 遺物：第38図 98～106)

調査区の南側、22号墳と20号墳に隣接している。プランは、22号墳・20号墳溝状遺構によって攪乱を受けている。住居跡の平面プランは、南側に攪乱坑があるが、長軸4 + a m、短軸3 mの長方形で、長軸を磁北に向けている。検出面から床面までは、深さ10～15cm、埋土は黒褐色土である。住居跡の東側には、カマドを構築していた灰白色粘土が奥行き1 m、幅1.2 mの範囲で、潰れた状態で検出された。灰白色粘土の上部には、土師器碗、坏、内黒の甕等集中して検出された。粘土の上部には幅30cm、奥行き20cmの範囲で、焼土を検出。カマドは、東壁の中央より、やや南側に偏して構築されている。カマドの構造は、粘土により、両袖を壁面に付設している。燃焼部の幅は約45cm、奥行きは、40cmを測る。

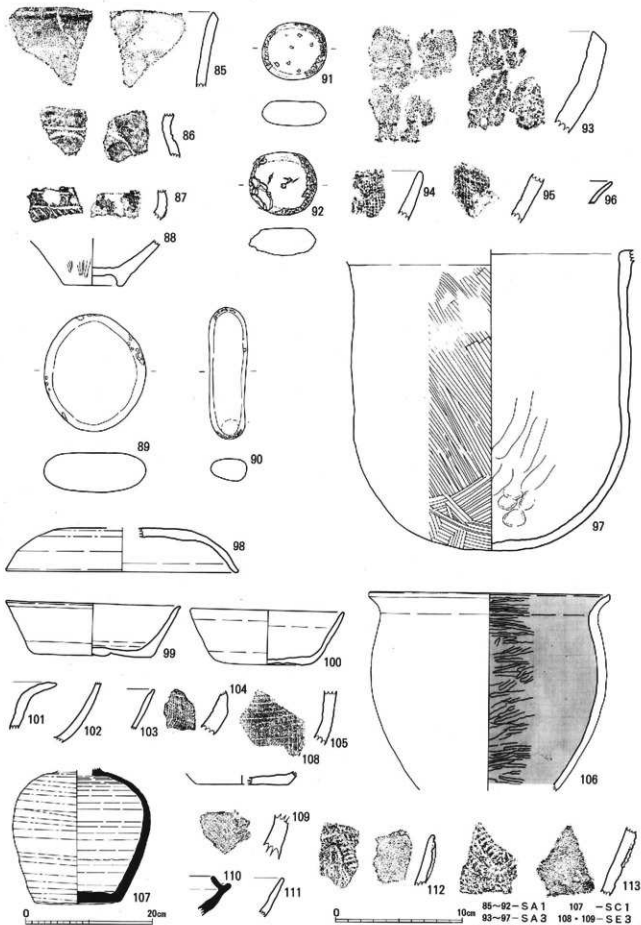
遺物は前記したように、灰白色粘土の上部から検出されており、器種も複数である。98は坏の蓋で、口径18.4cm、器高3.5cm、99は土師器の坏で、口径13.8cm、器高4.2cmで、底部にはヘラによる切り離し痕がある。100も土師器の坏で、口径12.2cm、器高4.4cm底部にはヘラによる切り離し痕がある。101は甕の口縁部で102は甕の胴部片である。103は、坏の口縁で、ナデ調整が施されている。104・105は布痕土器の口縁部と、胴部である。106は内面が黒褐色を呈した内黒土器である。



第36図 SA3・11実測図 (1/80, 1/30)

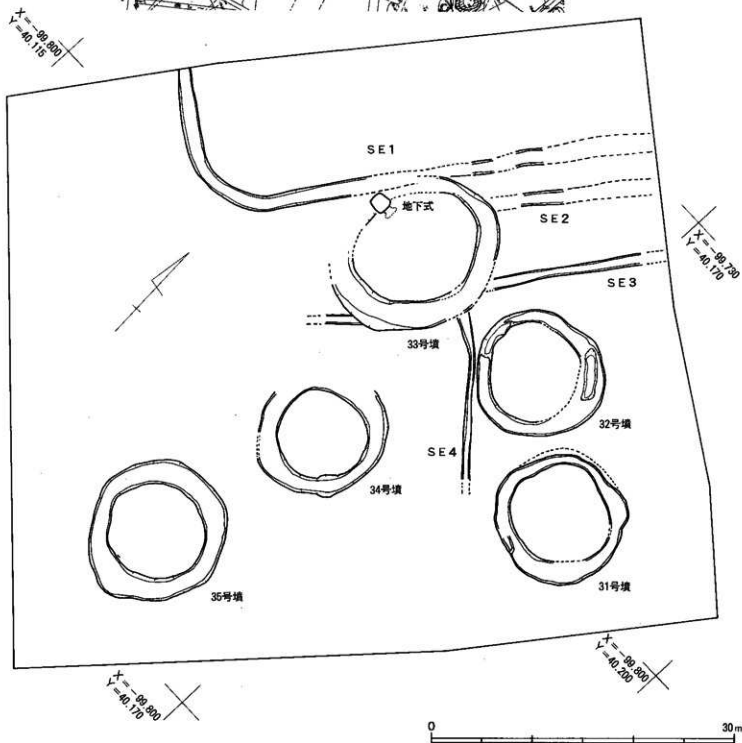
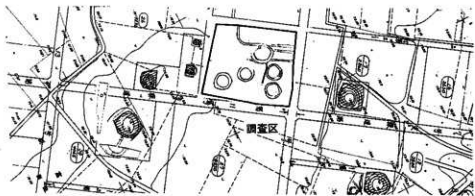


第37図 掘立柱建物 (1/50) および土坑実測図 (1/20, 1/40)



第38图 SA1・11出土遺物実測図

85~92 - SA1
 93~97 - SA3
 98~106 - SA11
 107 - SC1
 108・109 - SE3
 110 - SE4
 111 - SE7
 112・113 - SE5



第39图 III-a区遺構分布图 (1/375)

第4節 Ⅲ区の調査(第39・42図)

Ⅲ区は国指定122号・123号墳と114号墳の間の調査区(a区)と国指定120号墳の東および南側の調査区(b区)に分かれる。a区は120号墳周辺の標高約74mから北に向けて下る緩斜面にあたり標高約73mを測るが、すでにアカホヤ層は削平されていたことから実際はもう少し標高が高く、120号墳周辺から114号墳にかけて標高73~74mの微高地が延びていたと推定される。検出遺構には5基の周溝と溝状遺構4条があるが、前述のようにアカホヤ層まで削平されており、遺存状況はあまり良くない。古墳は、検出面での墳丘の規模は約10m前後で、周溝まで含めると15m程度の大きさになる。また、33号墳周溝に地下式横穴墓の竪坑が掘られ、玄室は墳丘方向に延びている。なお、114号墳周辺のトレンチ調査で墓石を確認している。b区は、120号墳東側に墳丘径約9.6mの36号墳が近接する。南に周溝は検出されず、土壌2基が見られる。36号墳については協議の結果、保存区域を拡大し、現状のまま埋め戻すこととなった。

Ⅲ-a区

この調査区では、周溝5基、溝状遺構4条、33号墳の周溝に地下式横穴墓1基が検出された。周溝はいずれも円形を基調としており、13~17mの規模で構築されている。

31号墳

調査区の南側、北西側の32号墳と隣接している。墳丘の形態は、いびつな円形を呈し、墳丘径は約9.9~10.3m、周溝径は約13.1m。周溝北側にやや突出した部分をもつが、幅は1.2mから2.1mで一定ではない。周溝の深さは、検出面で約20~50cm、埋土はアカホヤ混じりの黒色土である。南側の周溝の床面で、一部テラス状の段差がある。

遺物は、須恵器と土師器が出土している。須恵器は、313と314の甕がある。313は推定口径18.4cm、外面には平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕がある。土師器は、坏身と壺が出土している。

32号墳

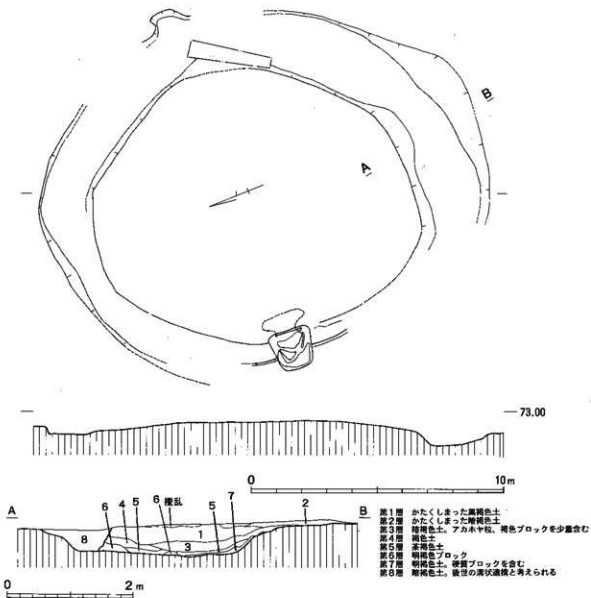
前記した31号墳と隣接しており、墳丘の形態は、不正の円形を呈している。墳丘径は、約9.3~9.4m、周溝径は13m前後である。周溝は幅約1.2~2.4m、深さ約30~40cmでコの字状の断面で、埋土は黒褐色土・暗褐色土にアカホヤ粒・ブロックが混入している。床面には一部、段状に落ち込んだ部分がある。

遺物は、須恵器と土師器が出土している。須恵器は甕の口縁破片が出土している。土師器は、坏身が出土している。

33号墳(第40図)

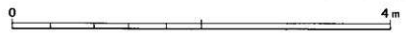
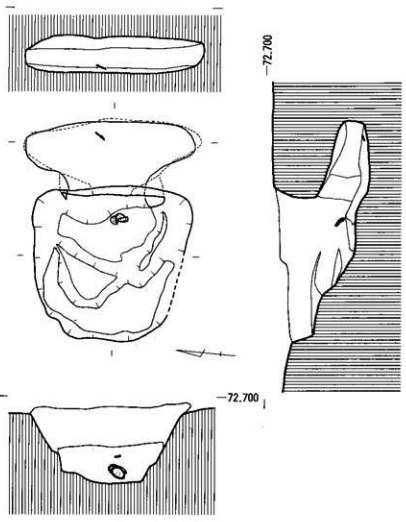
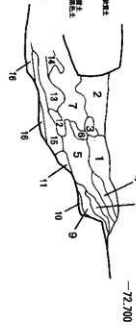
調査区北側に位置し、墳丘は北側にのびる楕円形プランである。墳丘西側には地下式横穴墓が構築されている。墳丘径は長軸で約11~12.7m、短軸で11m。周溝径は長軸で17.7m、短軸で15.1mの規模である。周溝は幅1.5m~3.5m、深さ約0.5mで一定ではない。

遺物は須恵器と土師器が出土している。須恵器は坏蓋・坏身・ハソウ・短頸壺・甕・提瓶がある。323はつまみの付いた坏蓋で、口径9.65cm、器高3.95cm。口縁端部はやや外反し、内面には明瞭な段が見られる。324は、口縁端部がやや外反している。坏身である。口径12.9cm、器高4.1cm。325は口頸部の長大化したハソウで、口径13.6cm、器高15cm。329は325に比べて頸部が大きく、短い。外面には横溝波状文が施されている。胴部上半部にはカキ目調整がある。326は甕の肩部から口縁で、口径13cm、327は甕の胴部下半部でい



第40図 33号墳周溝平面 (1/150)・土層図 (1/60)

1. 墓室
 2. 墓道
 3. 墓室
 4. 墓室
 5. 墓室
 6. 墓室
 7. 墓室
 8. 墓室
 9. 墓室
 10. 墓室
 11. 墓室
 12. 墓室
 13. 墓室
 14. 墓室
 15. 墓室
 16. 墓室
 17. 墓室
 18. 墓室



第41图 33号墳地下式横穴墓実測図 (1/40)

れも、外面に平行タキ、内面は丁寧なナデ調整がおこなわれている。330～332は甕の胴部片で外面に格子目状のタキが施されている。土師器は、坏身・壺・鉢が出土している。坏身の口径は、12～15cm前後で器高が4～5cmとなっている。

33号墳地下式横穴墓（第41図）

西側の周溝内に位置し、玄室は墳丘に向かって構築されている。堅坑は台形状の平面プランをもち、長軸方向に向かって長辺1.6m、短辺1.2m、長軸1.6m、深さ0.3～0.8m。周溝側にテラスを持ち、段状になって玄室の方に落ちていく。玄室は、長楕円の平面プランを呈し、長軸約1.8m、奥行50cm、高さ40cmとなっている。

遺物は堅坑中に須恵器が、玄室から刀子が出土している。350は坏身で口径11.6cm、器高3.5cm。349は胴部片で、外面は平行タキが施してある。353は全長13.7cm、刃部最大幅1.4cm、身部幅0.5cm、繊維質の付着物が見られる。

34号墳

調査区のほぼ中央に位置する。墳丘の形態は、北西側にやや膨らんだ円形プランである。墳丘径は約8.8～8.9m、周溝径は約12.3～12.7mを測る。周溝は深さ約0.3m～0.5mで、幅は1.5m～2.5mで一定していない。周溝内の埋土は、黒褐色土と暗褐色土である。墳丘の南東側には、一部掘りこみが見られ、焼土が堆積していた。そして、下層から馬具が出土している。

遺物は、周溝の南東側から西側にかけて出土している。須恵器・土師器・馬具が出土している。須恵器は、坏蓋・坏身・壺・短頸壺・甕・平瓶がある。354・356・358は坏蓋で、354は推定口径15.2cm、天井部と体部の境に稜をもち、口縁端部内面に段が見られる。356は推定口径16.2cm、口縁端部内面に段をもち、天井部と体部の境には稜がつく。358は、推定口径13.2cm、器高3.8cmでヘラ記号が見られる。360の甕は、推定口径20.4cm、外面は自然が付着して調整がはっきりとしないが、内面は同心円状の当て具痕があることより、タキ調整が施してあると考える。369の平瓶は、口径13cm、外面は格子目状タキに一部カキ目調整が内面は同心円状の当て具痕が残っている。359は直口甕で、口径9.4cm、内外面ともナデ調整が施してある。362は短頸壺で口径9.65cm、外面は格子目タキで灰黄色の自然が付着している。内面はナデ調整が施してある。土師器は、坏身、壺が出土している。365は口径11.25cmの壺で、370は推定口径9.1cm。427～429は馬具である。いずれも轡の一部で、427・428は環状鏡板付轡で環は楕円形に近く、427直の径は約6.5cm、428は径8cm引手と轡は鏡板を介して別々に連結する。429は引手の一部で、端部は屈曲させていると考えられる。

35号墳

調査区の西側にあり、墳丘形態は不正の円形を呈する。規模は墳丘径が9.5～9.6m、周溝径が13.8～13.9mである。周溝は、削平がひどく、プランをつかめない部分もあるが、南側が膨らみ、幅1.8～3m、深さ約0.2m～0.3mを測る。周溝の埋土は、アカホヤ粒を含んだ黒褐色土や暗褐色土が混入している。

遺物は、須恵器と土師器が出土している。須恵器は坏蓋・坏身・長頸壺・高坏・平瓶が出土している。376は口径15.3cm、器高3.9cmで口縁端部内面に段をもつ。379は口径15.2cm、器高4cmで口縁端部はやや内湾ぎみになり、内面には段をもつ。386は口径14.8cm、器高3.5cmで、口縁端部内面には段をもつ。388は口径14.5cm、器高4.2cmで体部から口縁部の境で屈曲ぎみに内面に稜をもつ。375は推定口径15.4cm、口縁端部内面に段をもつ。377は口径11.15cm、器高4.05cmで受部、口縁端部とも丸くおさめている。378は口径13.4cm、器高4.9cm口縁端部は平坦ぎみになる。387は口径13.6cmで受部、口縁端部とも丸く仕上げている。389は口径13.4cm、

各端部は鋭くおさめている。390は、口径12.6cm、391は口径14cm、器高3.7cmで口縁端部と受部端部は丸くおさめている。底部にやや焼け歪みが見られるが、割と浅いプローションとなる。385の無蓋高環は脚部が短く、三方向一段透かしである。環部外面にへら記号が見られる。380は胴部に斜め方向のキザミが施文しており、文様帯をはさむように段がめぐる。392はやや歪みのある平瓶で外面はカキ目調整を施してある。土師器は、環蓋・環身・壺が出土している。393は口径12.2cmで口縁部と体部の境は、軽く屈曲する形態をとる。

溝状遺構 (第39図)

調査区からは4条の溝状遺構を検出したが、遺物は出土しなかった。SE1は北東から延びて、L字に屈折し北西に走る。幅約1.3m、深さ約10cm。断面は浅い皿状をなす。33号墳を切る。SE2はSE1と平行して北東から南西に向かって走るが、33号墳と交わったところで消失している。幅約1.5m、深さ約5cm。断面は浅い皿状をなす。SE3はSE1・2と平行に走り、33号墳を切って南西部に延びたところで消失している。幅約0.8m、深さ約5cm。SE4はSE1～3と直交して南東から北西に向かってのびるが、33号墳にぶつかったところで消えている。幅約0.5m、深さ約5cm。

Ⅲ-b区 (第42図)

国指定120号墳の南東側に近接して36号墳を、南西側では土塊2基を検出した。検出面は36号墳の東側はアカホヤ層であるが、それ以外はすでにアカホヤ層は削平されその下層の褐色土面での検出となった。

36号墳

古墳は検出面での墳丘径は約11.2m、周溝の幅は2.2～3.6m。周溝は外側が深さ約25cmと最も深く、裾部に向かって次第に浅くなっている。遺物は出土していない。

1号土坑

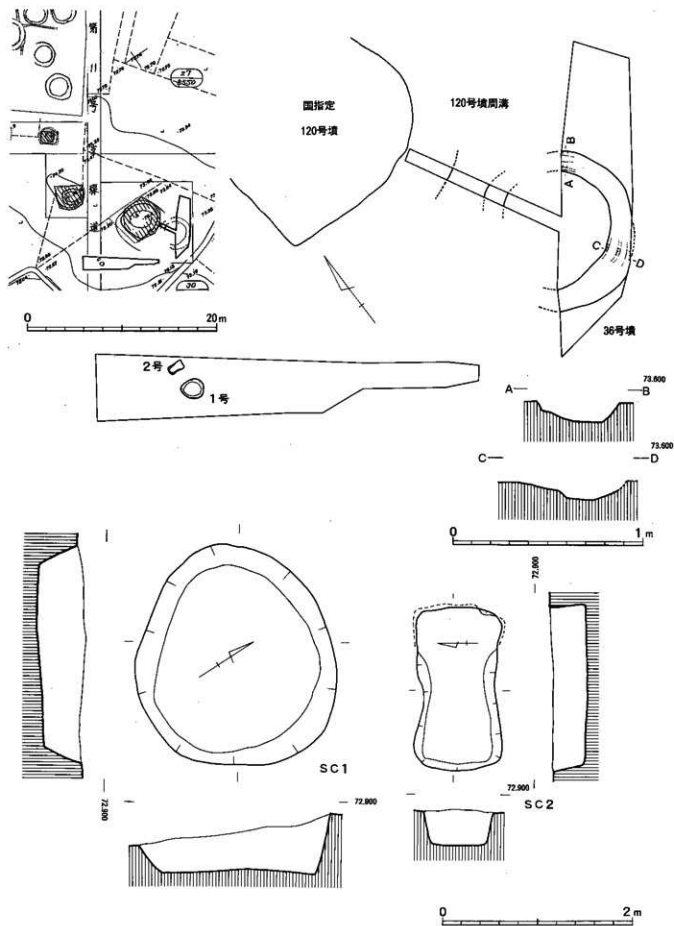
不整な楕円形を呈し、長径2.32m、短径2.12m、深さ0.64m。埋土は暗褐色土で砂粒を多量に含み固くしまる。出土遺物なし。

2号土坑

平面形は長方形を呈するが、長辺の中央部がくびれ、西側はやや袋状となる。長軸1.75m、短軸0.86m、くびれ部で0.75m、深さ0.37mを測る。埋土は黒褐色土で非常に固くしまる。出土遺物なし。

第5節 IV区の調査

IV区より東側についてはトレンチで遺構確認を行ったが非常にその密度が低くなっている。IV区の調査区は国指定115号墳の周辺(a区)と国指定64号墳南(b区)、国指定117号墳東(c区)、国指定116号墳南(d区)の四箇所について調査を行った。a区では、115号墳の周溝の一部と径約4.8mの周溝および溝状遺構を検出した。周溝は一応30号墳としたが径が小さいことや周溝の幅が狭いことなどから古墳とするには疑問も残る。b・c区は、トレンチ調査によって確認された溝状遺構について調査区を拡大していった。b区の溝状遺構は須恵器を多く出土し、古墳時代の遺構の可能性が高いが、用途、役割については不明である。c区の溝状遺構についても、出土遺物がなく途中で滅失していることから言及はできない。d区は、国指定前方後円墳52号の谷を挟んだ対岸にあたるが、工事中に土坑を確認したため周辺を拡張し、調査を行い土坑2基検出し



第42図 Ⅲ-b区 遺構分布図および土坑実測図 (1/100, 1/20, 1/40)

た。

IV-a区(第46区)

国指定115号墳の周溝、30号墳、溝状遺構1条を検出した。

30号墳

115号墳の南約1.5mに位置し、古墳は検出面での墳丘は長径約5m、短径4.3mの楕円形を呈す。周溝の幅は1.1m、断面は逆台形で埋土は上層がアカホヤ粒を含む褐色土、下層が暗褐色土および黒褐色土となる。周溝南東側に長さ約6mにわたり30号墳周溝に平行に溝が巡っている。幅約1.1m、深さ約0.17mを測る。30号墳に伴うかどうかは不明。出土遺物は10点程度と少ない。

須恵器壺蓋402は天井部と体部の墳は稜が失くなり、口縁部も丸く仕上げられる。土師器壺蓋403は短頸壺で口縁部は短く外反する。

国指定115号墳

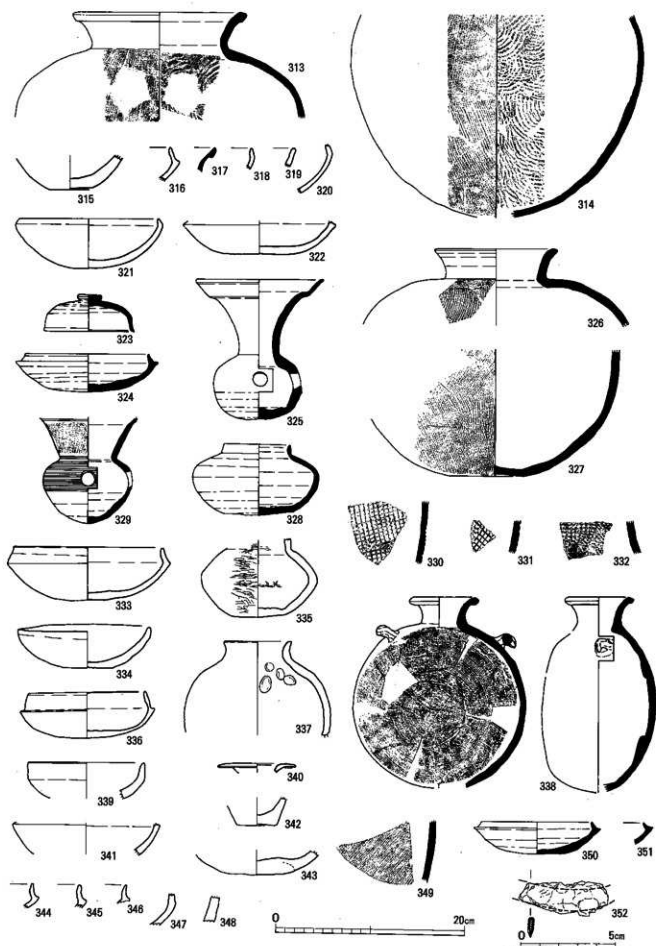
検出された周溝から径を推定すると約30mとなる。周溝は深さ約0.54mで、検出面からなだらかに底面に下っている。埋土は暗褐色土や黒褐色土で下層にいくにしたがい褐色土ブロックが増えてくる。遺物はほとんど床面から浮いた状況で出土し、東側周溝では全体にまばらに分布し、西側周溝では北隅に集中してみられ、管玉2点も検出された。

遺物は須恵器と管玉が出土している。404は壺蓋で推定口径14.4cm、体部と天井部の境には段をもつ。口縁部には明瞭な段をもつ。405は壺蓋の天井部で、天井部外面はへら削りを内面は丁寧なナデが施されている。体部と天井部の境には段がある。406～408は口縁部で、いずれも口縁部内面に稜をもつ。407・408は口縁部が直立ぎみに立ち上がる。409は壺蓋の天井部である、外面はへら削りが、内面はナデ調整が施されている。410は環身の口縁部片で、たちあがり部は直線的になり、端部がやや外反する。端部内面は稜をもち、断面は丸くおさめている。受部端部の断面は、やや鋭くおさめている。411～413は口縁部が欠損しており、他の環身と同様、内面に段をもつかは定かではない。413は受部が下方に向かってのびている。414は推定口径11.5cm、立上がり高1.7cm、受け部径14cmで、たちあがり部は直線的にのび、端部内面に稜をもつ。受部・端部の断面は丸くおさめている。415は環身で414の時期と比べると、法量は大きい。底部が欠損しており器高はわからないが、わりと浅めの器形である。416は甕の口縁部片である。推定口径23cm、外面はカキ目調整が内面は丁寧なナデ調整が施されている。418は甕の口縁部片で、頸部外面にはカキ目調整が内面には丁寧なナデ調整が施してある。419も甕の口縁部片で、外面にはカキ目調整が、内面にはナデ調整が施されている。420の甕は外面にカキ目調整が、内面には同心円状の当て具痕が施されている。当て具痕は肩部から胴部・底部付近にかけて残っている。421は甕の胴部片で、外面は平行タタキが、内面は丁寧なナデ調整が施されている。423は外面に平行タタキ、内面に丁寧なナデ調整を施した甕の胴部片である。424は甕の胴部片で外面には平行タタキが内面は同心円状の当て具痕が残っている。425・426は115号墳周溝から出土した管玉で、碧玉製で片面より穿孔している。長さは425が2.8cm、426は2.4cmである。

IV-b区(第47区)

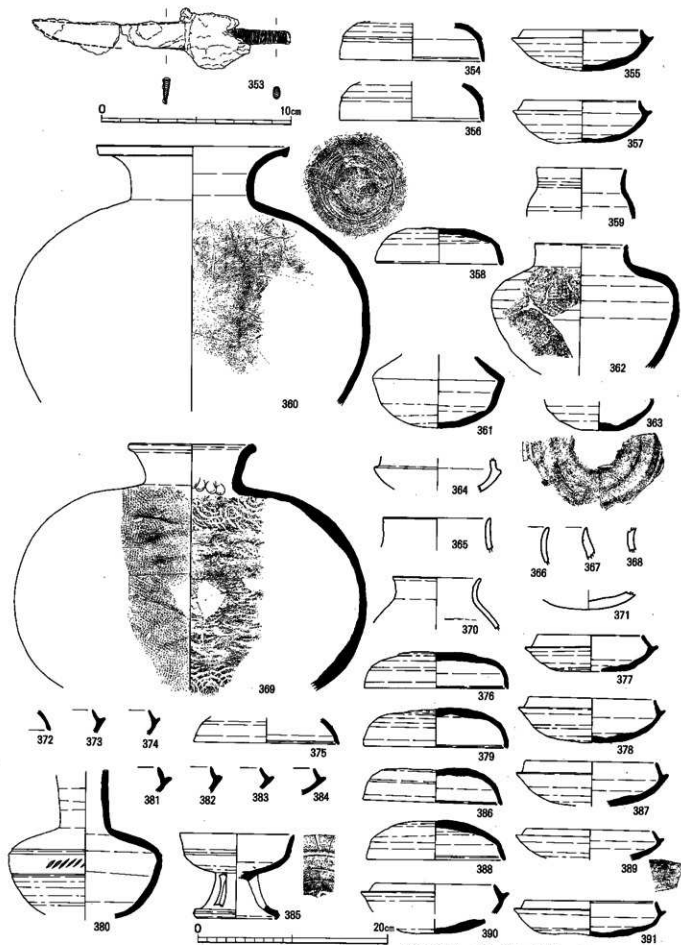
トレンチ調査で、溝状遺構を確認したため、調査区を拡大し、3状の溝状遺構を検出した。遺構の検出は、アカホヤ層がすでに削平されていたため、その下層の褐色土で行った。

溝状遺構は東西に延びる溝と南北に延びる溝があり、前者が後者を切っている。SE1は、東西方向に

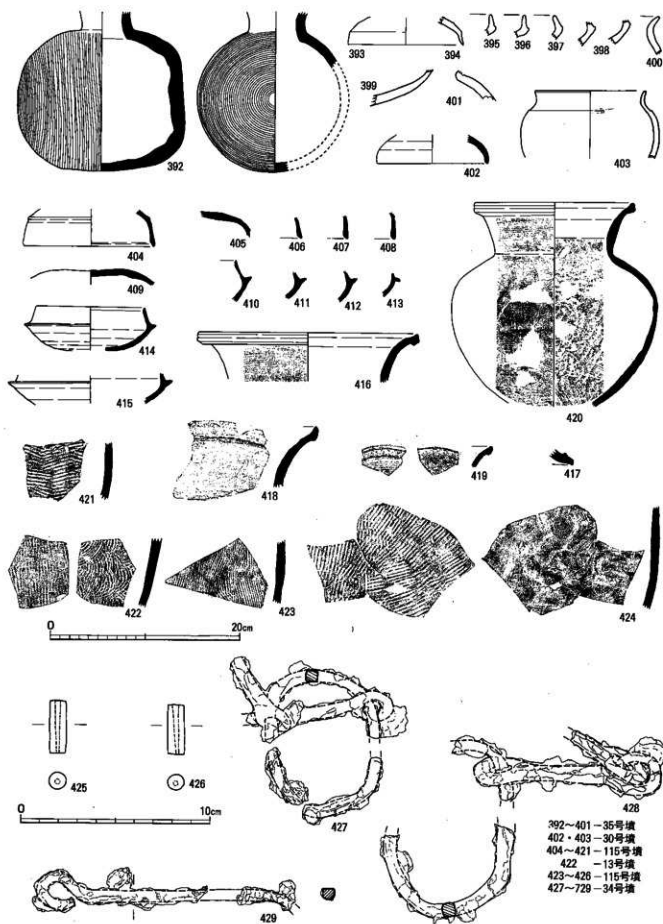


第43图 出土遗物实测图

313~316 - 31号坑
 317~322 - 32号坑
 323~352 - 33号坑



第44图 出土文物实测图
353-33号坑 354~371-34号坑 372~391-35号坑



第45图 出土文物实测图

392~401—35号坑
 402·403—30号坑
 404~421—115号坑
 422—13号坑
 423~426—115号坑
 427~729—34号坑

約55m、幅約1m、深さ約0.15mを測り、両端とも途中で消失している。SE3と交差する部分に焼土が約6cmの厚みで堆積している。SE2は東西方向に約10m、幅約0.8m～1.2mで途中で消失している。SE3は南北方向に約18.5m、幅約0.8mから1.2m、深さ約0.15～0.25m。

遺物は須恵器と埴輪片が出土している。438～453・458がSE1出土の遺物。438は、甕の胴部片で、外面は平行タタキが、内面は丁寧なナデが施されている。439は甕の頸部片で、外面は横方向の沈線そしてカキ目調整が施されている。内面は丁寧なナデ調整が施されている。440は甕の胴部片で、外面は平行タタキが、内面は丁寧なナデが施されている。441は甕の胴部片で、外面はナデ調整、内面は同心円状の当て具痕が残る。442は甕の胴部片で格子目状のタタキの上をナデ調整が施してある。内面は丁寧なナデが施してある。443は甕の胴部片で、外面はカキ目調整のあと、平行タタキが施され、内面は同心円状の当て具痕が施されている。444は甕の胴部片で外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕が施されている。445も甕の胴部片で、外面は平行タタキを重ねており、内面は丁寧なナデが施されている。446は甕の胴部片で外面にはへら記号が認められる。調整は平行タタキである。447は环蓋の口縁部片で、端部内面には明瞭な段をもち、やや外方に開く。448は环蓋の天井部で、外面はへら削り、内面はナデ調整が施されている。天井部はやや平坦ぎみになると考えられ、体部に向かって直線的にのびる。449は坏身の口縁部片である。たちあがり部は内傾し、端部内面には稜はもたず、丸くおさめている。451は蓋で、欠損した天井部にはツマミをもつと考えられる。推定口径は8.2cm、残存器高は2.1cmである。口縁端部内面には、明瞭な段をもち、外方に向かって開く。452は环蓋の口縁部片で、体部と天井部の境には段をもち、口縁端部内面には、段をもつ。453は坏身の口縁部で、内傾するたちあがり部は外反ぎみに立ち上がり、口縁部と受け部の端部はやや鋭くおさめている。458は坏身の口縁部片で、体部と天井部の境には段をもつ。口縁端部内面には稜をもつ。454～457・459はSE2出土である。454は甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕を施したあと低速にナデ調整を行っている。455は甕の胴部片で外面は平行タタキ、内面は丁寧なナデ調整が施されている。456は口縁部片である。457は、环蓋の口縁部片である。体部と天井部の境に段をもち、口縁端部内面には、稜がめぐる。459は甕の胴部片である。外面は平行タタキを内面には同心円状の当て具痕がわずかに残る。460～472はSE3出土である。460は甕の胴部片で外面は格子目状のタタキが、内面は丁寧なナデが施されている。461は甕の口頸部片である。口縁端部は平坦で外面に、一条の突起、二条の沈線を施した間に櫛描波状文を施文している。462も甕の頸部片で外面には2本の沈線と、カキ目調整が施されている。内面は丁寧なナデ調整が施され、一部へら記号が見られる。463は甕の胴部片で平行タタキの上をナデ調整している。464は、甕の胴部片で外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕が残る。465も甕の胴部片で、外面は格子目状のタタキ、内面は同心円状の当て具痕が施されている。466も甕の胴部片で、外面は平行タタキで内面には同心円状の当て具痕がわずかに残る。467は外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕が残る。468は外面に平行タタキ、内面は丁寧なナデを施してある。469も甕の胴部片で、外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕が施されている。470も甕の胴部片で、外面は格子目状のタタキで、内面は丁寧なナデが施されている。471は甕の肩部で、外面は平行タタキが内面は丁寧なナデが施されている。472は甕の肩部で内外面とも丁寧なナデが施されている。473と472は埴輪片である。透かし孔があり、外面はナデとハケ目調整が施してある。内面はナデ調整である。461・462は甕の頸部片である。外面は、櫛描波状文が施されている。内面はナデ調整が施されている。

IV-c区

トレンチ調査で溝状遺構を確認したため、調査区を拡大し、溝状遺構を2条検出した。遺構の検出はアカホヤ層がすでに削平されていたためその下層の褐色土で行った。

溝状遺構は東西の延びる溝と南北に延びる溝があり、前者が後者を切っている。東西の溝は長さ約55m、幅約1m、深さ約0.15mを測る。両端とも途中で消失している。南北の溝は長さ約8m、幅約0.8m、深さ約0.10mを測る。出土遺物はない。

IV-d区 (第50区)

土壌2基を検出したが、すでにアカホヤ層まで削平されており遺構の残存状況はあまりよろこばなかった。(第50区)

1号土坑

平面形は長方形をなすが南西側は削平をうけている。長軸約1.78m、短軸約1.1m、深さ約0.10mを測る。遺物等は出土していない。

2号土坑

埋土は黄褐色粘質土で黒色土や赤褐色土のブロックを含み、炭化物が一部スジ状にみられる。長軸1.4m、短軸1.0mの方形をなす。深さは約30cmで床面には中央で小さな段を形成し、南側が4cm程度低くなり、その部分と一段高い西側部分に20~30cmの河原石が床面に敷かれる。隙間には灰白色の粘土、炭化物、橙色土ブロックが詰まる。遺物等は出土していない。

第6節 V区の調査

V区は、国指定48号墳(弥五郎塚)の南と東側に位置し、全体にアカホヤ層が認められた。何れもトレンチ調査によってアカホヤ上面で確認された溝状遺構および土壌について周辺を拡大して遺構遺物の検出に努めた。なお、当初予想していた周溝や古墳時代の遺構等については検出できなかった。

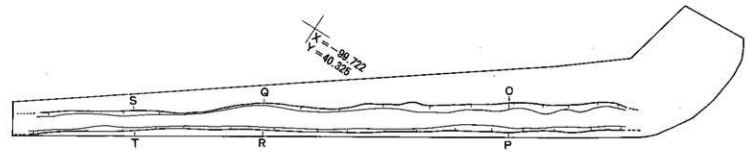
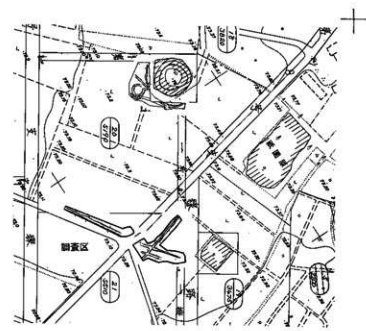
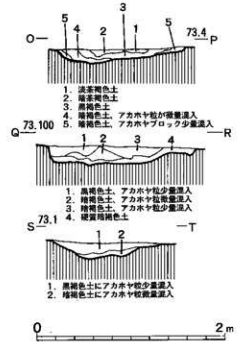
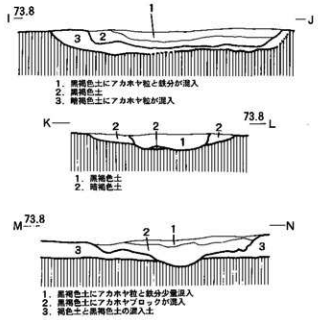
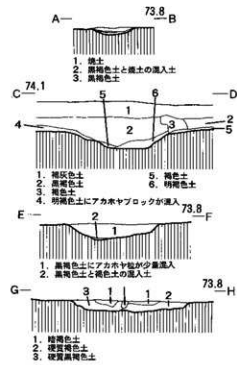
南側(a区)では、アカホヤ層まで約15cmと浅く、南北に延びる溝状遺構とその東に位置する土壌1基を検出したが、出土遺物がなく時期については不明。東側(b区)ではアカホヤ層まで約50~60cmで、L字に曲る溝状遺構を確認したが、それ以外の柱穴等の遺構については認められず、出土遺物も出土していない。なお、溝状遺構のある畑の東側の畑ではすでにアカホヤ層は削平されておりその下の暗褐色土やさらに下層の褐色土が表土下すぐに露出した。

SE1

国指定48号墳(弥五郎塚)の南に位置し、現存長約37m、幅約0.8m、断面は皿状を呈する。主軸は N-40-W。溝の埋土は暗褐色土でアカホヤの粒子を少量含む。出土遺物はない。

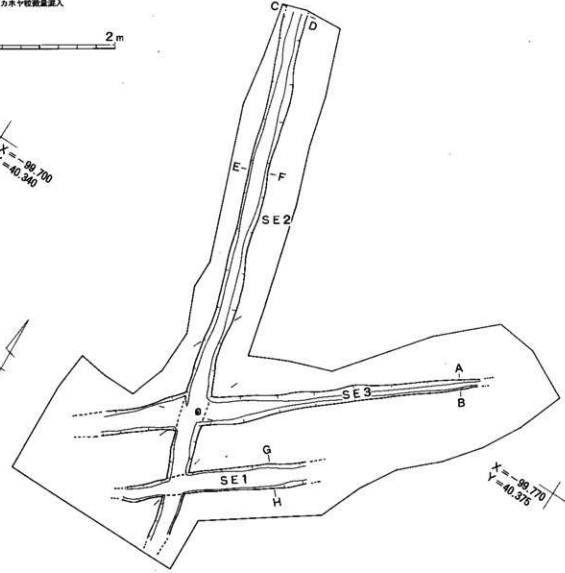
SE2

SE1の西側に隣接するが、現存長は約2.5mと短く、幅約0.4m、断面は皿状を呈する。SE1とは平行しない。



X=-99,722
Y=40,326

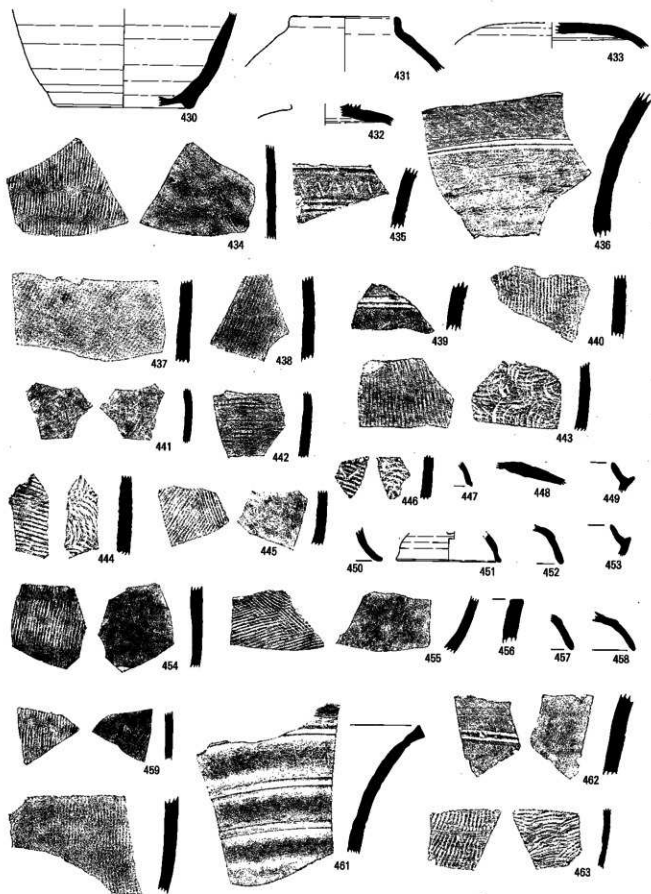
X=-99,722
Y=40,540



X=-99,700
Y=40,340

X=-99,710
Y=40,376

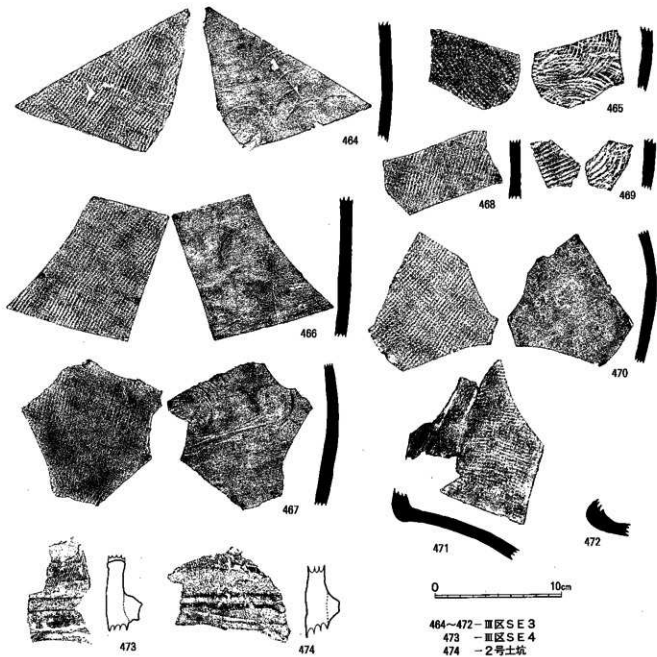
第47図 IV-c区遺構図 (1/200)



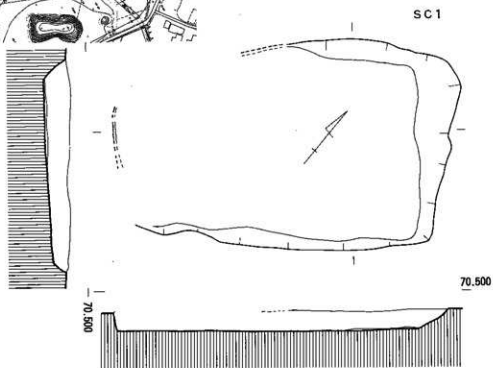
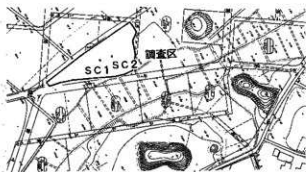
430~437 — II区SE1 460
 438~483, 458 — III区SE1
 464~457, 459 — III区SE2
 460~483 — III区SE3

0 10cm

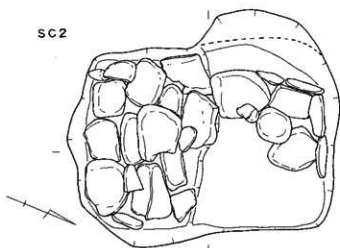
第48图 出土遺物実測図



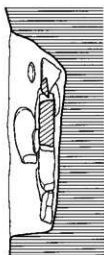
第49图 出土遗物实测图



SC2



70.500



70.500



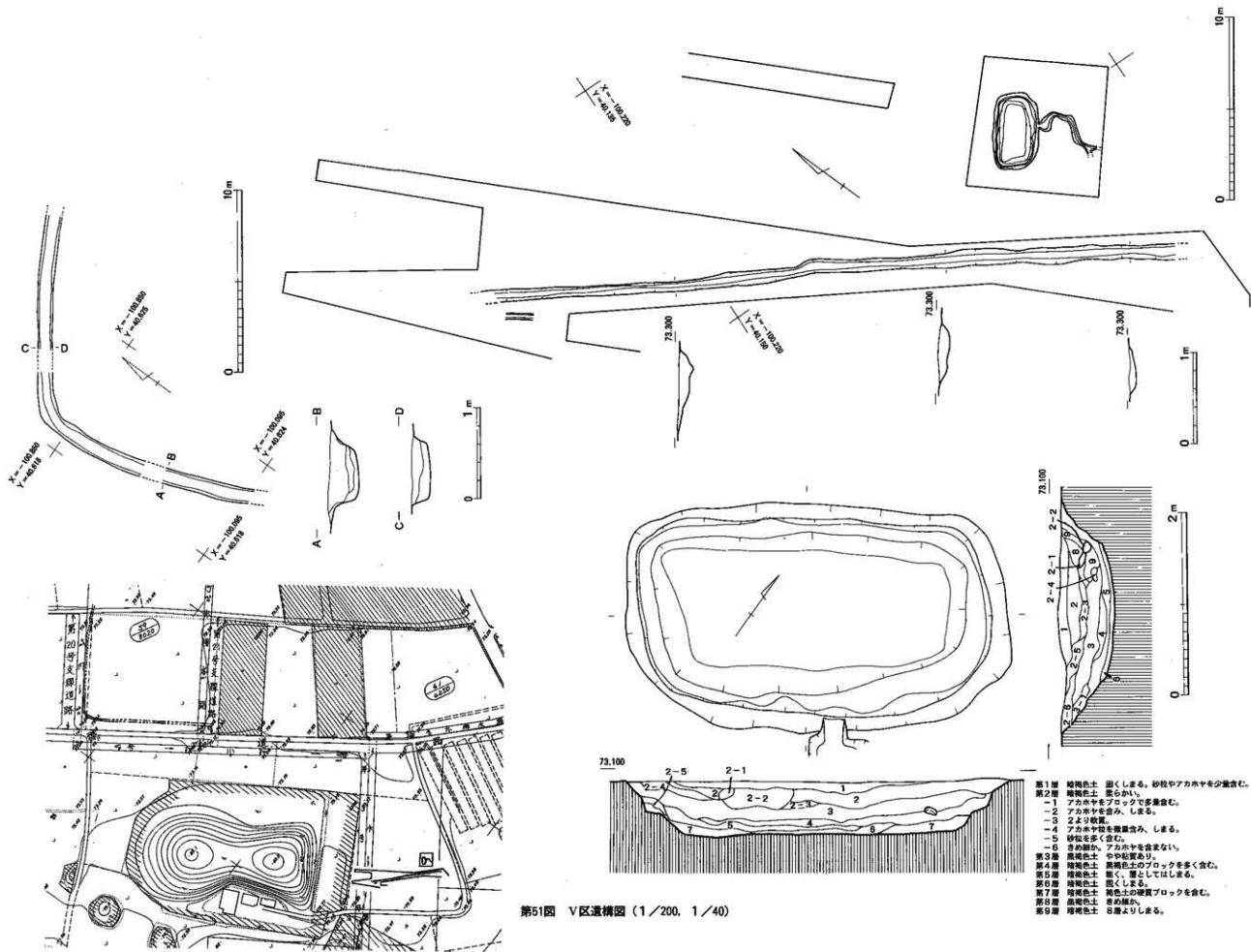
第50图 IV-b区土坑实测图 (1/40, 1/20)

SE3

弥五郎塚の東に検出された。L字状に屈折する溝で、東西方向で約60m、南北方向で約65mまで確認したが、さらにそれぞれの方向に延びている。幅は約0.9m、断面は台形状を呈する。溝の埋土は第1層がきめ細かな暗褐色土でアカホヤの粒子を少量含む、第2層は第1層同様、暗褐色土であるが層としてしまっている、第3層は暗褐色硬質土となる。出土遺物はない。

土坑

SE1の東約4.5mに位置する。平面形は隅丸の長方形に近く、三段に掘られている。大きさは長辺約4.15m、短辺約2.45m、深さ0.65mを測る。南側長辺のほぼ中央に幅約0.30m、深さ約0.07mの細い溝状遺構がつながっている。溝状遺構は蛇行しながら南に延びているが、土壌との切りあいは不明である。土坑の埋土は第1層が固くしめる暗褐色土でアカホヤの粒子を少量含む、第2層は柔らかい暗褐色土で混入物や屑のしまり具合から4つに細分できる。第3層はやや粘質のある黒褐色土、第4層が黒褐色土ブロックを含む暗褐色土、第5層がやや粗い暗褐色土、第6層は固くしめる暗褐色土、第7層はアカホヤや褐色の硬質土ブロックを含む暗褐色土、第8層はきめ細かな黒褐色土、第9層が暗褐色土となる。出土遺物はない。



第四章 まとめ

本遺跡の主体となる遺構は、総計36基を数える周溝と、周溝に関連する地下式横穴墓、土壇である。とくに、周溝から出土した遺物はかなりの割合を占めるが、主体部は削平され、もともとの遺物量には遠く及ばない。周溝内から出土している遺物は、須恵器、土師器、鉄器、馬具、玉類がある。各周溝から出土している遺物では、須恵器の占める割合が、ひじょうに大きい。

須恵器は、坏蓋・坏身・平瓶・提瓶・横瓶・高坏・甕・短頸壺・長頸壺・広口壺・ハソクがあるが、本調査で出土している須恵器は、MT15からTK209あたりの幅が見られる。ここでは須恵器を中心にして、グループ内での古墳群の形成時期と移動等について若干整理を行ってみたい。

調査によって確認された周溝と、既存の古墳群とをあわせて見ると(第1図)、いくつかのグループに分けられる。一つは、新田原古墳群第48号墳(弥吾郎塚)や第52号・第56号墳等の前方後円墳を中心として、調査区の東側に展開するグループ。二つ目は、本調査の第Ⅲ区の31～35号周溝と115号墳と30号周溝等を含む、調査区中央部のグループ。そして、三つ目は、第Ⅰ区の2号～17号周溝のグループ。四つめは、第Ⅰ区の1号周溝と第Ⅱ区の18号周溝～29号周溝を含む、調査区西側に展開するグループである。

一つ目のグループを(48号墳をはじめとする前方後円墳群)A、二つめのグループ(30号周溝～35号周溝・115号墳)をB、三つめのグループ(2号周溝～17号周溝)をC、四つめのグループをDとする。A～Dの中で、調査を行ったのは、B・C・Dである。

各周溝の中で、いちばん古い時期と考えられるのが、第115号墳で、6世紀前半(第Ⅰ期)と考えられる。次に出現するのが、Bグループの20・22号周溝。そして、Cグループの33・34号周溝である。位置関係としては、二つのこれら5つの周溝の中で、B群の20・22号、C群の33号は、いずれも地下式横穴墓を伴い、6世紀中ごろ(第Ⅱ期)と考えられる。それぞれの地下式横穴墓と周溝は、時間的に隔たりがあるが、20号地下式横穴墓はやや遅れて、築造される。22号地下式横穴墓は、出土遺物が刀子のみで時期は確定できない。33号地下式横穴墓は、一段階か二段階遅れて6世紀後半から末に築造される。次にやや、遅れて2号・7号・9号・13号・23号・25号・35号周溝と、いっせいに古墳築造の盛期(第Ⅲ期)に入っていく。次に展開する古墳群は、Bグループでは、30号・32号周溝、Cグループは、3号・5号・4号・8号・11号・15号周溝、Dグループでは、1号・21号・26号・27号周溝と広い範囲で全面展開をする(第Ⅳ期)。ここにきて、いっせいに古墳(円墳)の群集化がピークを迎える。5号地下式横穴墓は、玄室内出土の遺物から6世紀後半の時期が考えられ、TK43あるいは、少し古い段階の時期の坏身・坏蓋が出土している。その後、古墳築造のペースは緩やかになり(V期)、Bグループでは、31号周溝、Cグループでは、6号・10号周溝が、Dグループでは19号周溝等の築造が散見できる。そして、I-b区北側にある石棺遺構が、7世紀前半の時期に比定でき、調査した中では、最も新しい時期(VI期)にあたる。

調査区の周辺地形は、A・B・C・Dグループそれぞれ、小さな谷地形をはさんで立地している。古墳築造の展開は、前記した如く、I期からVI期の六つの時期が想定され、調査した中で最も古い時期としているのは、Bグループの115号墳で、周溝の一部だけの調査であるが、MT15併行期の坏身・坏蓋等が出土している。115号墳周辺は、前方後円墳が隣接しており、谷地形が始まる、谷口の部分に立地している。115号墳から南側には、谷地形によってはさまれた丘陵が、のびている。祇園原支群ではないが、過去に調査された川床遺跡は、115号墳の北側の丘陵上にあり、内部主体に粘土槌をもつ円墳が調査されている。祇園原支群

で初現する可能性があると考えられている大久保塚は、川床遺跡の近くに位置しており、南東の前方後円墳列へと造墓活動が推移していったと考えられる。その流れの中で、115号墳が築造され、南下してBグループの円墳の群集化へとつながっていくと考えられる。Bグループでは33号周溝と34号周溝、Cグループでは墳丘の築造時期と地下式横穴墓築造の時期は、多少のずれはあるが、20号・22号周溝と地下式横穴墓を伴った墳丘が造営されるようになり、以後周辺に円墳群が広がり群集化していく。この動きは、谷をはさんで立地する二つのグループに広がっていくが、このことは第I章で述べているとおりである。墳丘が丘陵の高い所を立地条件として選ばれていくのには、それぞれ分立する三つの集団の存在を意識できる。そして、西側に展開するグループを絞って見ると、第I区の2号墳と1号墳の間で、空白部分が確認できる。一つの丘陵でもまた、異なる造墓集団の存在を意識できる。

以上、本遺跡での墳丘の築造過程を流したが、主体部が削平され、周溝のみの調査と遺物も少ない状況で多くを語るのは困難で、他のさまざまな視点からによる古墳群の形成過程、性格、造墓集団の推移など明らかにしていく問題は多い。そして、新田原古墳群一帯を中心とする、前方後円墳の系譜の解明とともに、一ツ瀬川沿岸の古墳時代の情勢を考える一つの鍵が、隠されているかも知れない。

宮崎県新富町祇園原地区遺跡出土の古墳時代人骨

— 地下式横穴1号墓人骨の所見 —

峰 和治・竹中正巳・小片丘彦
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座)

[はじめに]

ここに報告する人骨は、1992年12月、宮崎県児湯郡新富町の^{宮崎県}祇園原地区遺跡から出土した6世紀後半の壮年女性骨1体である。調査を担当した宮崎県教育委員会によると、祇園原地区遺跡では高塚古墳の周溝17基、地下式横穴墓1基、石棺1基、弥生時代の住居跡2軒などが検出されている。人骨が出土した地下式横穴1号墓は、高塚古墳の周溝内に堅坑が掘られ、平入りの玄室が墳丘方向に位置していた。玄室内には、奥壁側の礫床に仰臥伸展位の人骨1体が遺存しており、須恵器や土師器の杯、鉄製の刀子などが副葬されていた。その骨質は「すかさか」の状態で非常に脆く、随所に破損や骨表面の剥離が生じていた。しかし、部位としてはほぼ全身の骨格が残っており、推計値も含めた人類学的データから、形質の概要を知ることができた。

近年の研究によると、地下式横穴人骨にも地域差の存在が指摘されている(松下;1992)。宮崎平野のなかでも、祇園原地区のように一ツ瀬川以北の地下式横穴人骨については報告例がまだ数少ない。保存状態はあまりよくないが、本例を基礎資料として追加したい。以下、基本的所見の記載を行った後、祇園原人の形質的位置づけについても若干の考察を加えた。

[出土状態]

埋葬姿勢は仰臥伸展位である。頭蓋は右に倒れて顔面が外側方を向いていたが、後頭骨は縫合ではずれてほぼ原位置にとどまっていた。上肢は左右とも真直ぐに下方に下ろして前腕を回内し、脛骨の上に左右それぞれの手を置いていた。下肢も膝を閉じた状態で伸展していた。顔面部と脛骨に朱の痕跡が認められた。

ほぼ全身の骨格が遺存していたものの、保存状態は概して不良である。石灰分が漏出して骨質は脆くなっており、緻密質の薄い部分は指でつまんだだけでつぶれてしまうほどであった。長骨の骨端部は海綿質の塊として形状を保っているだけで、取り上げ時に骨幹から分離して骨粒になってしまう場合がほとんどであった。加えて、骨表面の剥離と炭化物または石灰華様物質の付着によって、正確に計測や観察ができた項目はわずかであった。

[性・年齢]

性別は、寛骨の大坐骨切痕の開き具合と体肢骨諸径の小ささから女性と判定した。年齢は、第3大臼歯の萌出と咬耗度の弱さ、頭蓋縫合に閉鎖が見られないことなどを総合して、壮年と推定した。

[形質]

1) 頭蓋

頭蓋底の大部分と眼窩上縁部、左頬骨付近、および下顎骨左半が欠失している。また、左側頭骨と後頭骨の破片数点も遺存しているが、脳頭蓋への接合はできない。頭蓋は最表層が剥離して、本来の骨表面をとどめているのはわずかの部分であり、正確な計測が行える部位はごく限られている。

3主縫合には、内外板とも閉鎖は見られない。外後頭隆起の突出は弱い。眉間や眉弓の高まり、乳様突起

の大きさ、前頭鼻骨縫合部の陥凹などは破損によって確認できない。脳頭蓋の3主径のうち、唯一計測が可能であった頭蓋最大幅は145mmと大きい。頭蓋最大長は計測できないが、眉間と後頭骨の破損部を日測で補ってみると、170~175mm程度となる。試しにこの値から長幅示数を求めてみると(82.9~85.3)、短頭型であったと推測される。耳ブレジマ高は111mmで絶対値としては小さいが、頭蓋全体の大きさからみればそれほど低くはない。側面からの観察でも、低頭という印象は受けない。顔面部の形態は、上顔部の破損と死後の変形によって計測値として示すことはできない。ただ、高径に対して幅径が明らかに大きく、いわゆる「低・広顔」であったことがうかがえる。外耳道骨腫は形成されていない。

2) 歯列

歯列の状態は次の通りである。これ以外に、歯種不明の歯根片2本がある。

$\begin{array}{c} \text{FC} \quad \text{C} \quad \quad \quad \text{FR} \\ 876 \bullet \bullet \bullet 3 / 1 \end{array}$	$/// 4 \bullet 678$
$8 \bullet 654321$	$1234 / 6 / 8$

(●: 歯槽閉鎖、/ : 歯槽破損、* : 遊離歯
 FC: 歯冠破折、FR: 歯根破折、C: 齶蝕)

咬合様式は缺欠。咬耗は軽度でMartinの1~2度。上顎右第1大臼歯の近心隣接面以外に、齶蝕は見られない。南九州の地下式横穴墓人では、上顎第1小臼歯を対象とした風習的抜歯が2例報告されている(土肥・田中; 1988、竹中・他、1993)。本例の上顎左右小臼歯部の歯槽閉鎖は、一部が破損しているので生前喪失であると断定はできないが、一応抜歯の可能性だけを示しておきたい。

3) 体肢骨

体肢骨は全体に細かく、きゃしゃである。頭蓋同様、体肢骨も骨表面の剥離によって主要径の正確な計測はほとんどできない。あえて骨体の断面形状を知るために、左の上腕骨、大腿骨、脛骨について、剥離面上で計測を行ってみた(表2に示した体肢骨計測値は、実際の径よりやや小さめ出ているものと思われる)。上腕骨体中央と脛骨栄養孔位の断面示数(それぞれ75.0、72.7)は、骨体が扁平でないことを示している。大腿骨体断面示数は109.5だが、これは骨体の捻れの強さが横径の小ささに影響したため、柱状性は見られない。左右寛骨に、妊娠痕のひとつといわれる耳状面前溝は認められない。

4) 推定身長

発掘時の取り上げの際に、主要体肢ほとんどの破損が予想されたので、原形を比較のとどめていた大腿骨の最大長を現場で計測した。その値340mmからピアソンと藤井の式で求めた推定身長はそれぞれ139.0cm、137.2cmである。現場での頭頂一足根部間の実測長は約140cmであったが、いずれにしても低身長であったことは確かである。

5) 形質のまとめ

祇園原人地下式横穴墓1号人骨の形質は、おおよそ次のようにまとめられる。

①女性・壮年である。

- ②頭型は短頭であったと推測される。頭高は低くない。
- ③顔面部は低・広顔であったことがうかがわれる。
- ④体肢骨は全身的にきゃしゃで、140cm程度の低身長であったと推定される。
- ⑤上腕骨や脛骨の扁平性、大腿骨の柱状性は認められない。

[宮崎平野部の地下式横穴墓人]

南九州地域の古墳時代の墓制である地下式横穴墓は、地下に設けられた特殊な埋葬空間という構造的な条件が幸いして、人骨が遺存している例が比較的多い。松下(1990、1994)は、地下式横穴墓出土の男性人骨の研究から、山間部と平野部とでは形質の違いがあることを見だし、この地域の古墳人を3つのタイプに分類した。1)強い低・広顔傾向を示し、低身長で、西北九州弥生人に近い「南九州山間部タイプ」、2)短頭型で、狭・高顔傾向を示し、高身長であり、北部九州弥生人に近い「宮崎平野Ⅰタイプ」、3)狭・高顔で高身長ではあるが、中頭型で眼高や鼻部の高径が低く、周辺地域にこれと類似する例を見いだせない「宮崎平野Ⅱタイプ」である。

松下は、宮崎平野部では短頭性が強く、山間部に向かうにつれてその傾向は薄れると述べている。祇園原人骨は、短頭という点だけでは「宮崎平野Ⅰタイプ」と符合するが、顔面部の低・広顔性や低身長、単数埋葬という点では異なる。祇園原人骨から得られた計測値は極めて限られているので、他集団との数値的な比較はひかえる。宮崎平野部では女性例の報告そのものが少なく、男女での傾向の違いや、男性例で指摘された2つのタイプ分けの検証には、資料不足の感がある。今後の出土数の増加を期待した。

[文献]

- 土肥直美・田中良之、1988：古墳時代の抜歯風習、日本民族・文化の形成Ⅰ、pp.197-215、六興出版。
松下孝幸、1990：南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究。長崎医学会雑誌 65：781-804
松下孝幸、1994：地下式横穴墓の人骨。考古学ジャーナル 380：26-30。
竹中正巳・他、1993：風習的抜歯の疑われる古墳時代若年女性人骨。人類学雑誌 101：483-489

表1 頭蓋計測値 (mm)

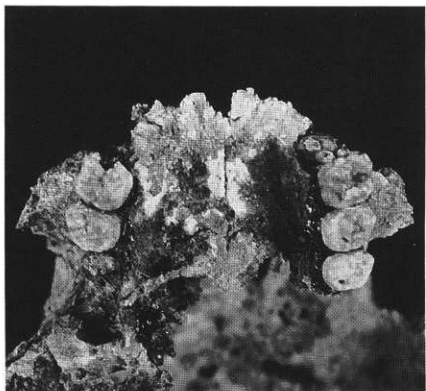
Martin		
No		
8	頭蓋最大幅	145
46	中顔幅	96*
48	上顔高	62*
54	鼻幅	24*
55	鼻高	50*
61	上顎歯槽幅	64
62	口蓋長	42*
63	口蓋幅	43

* : 推測部分も含めた参考値

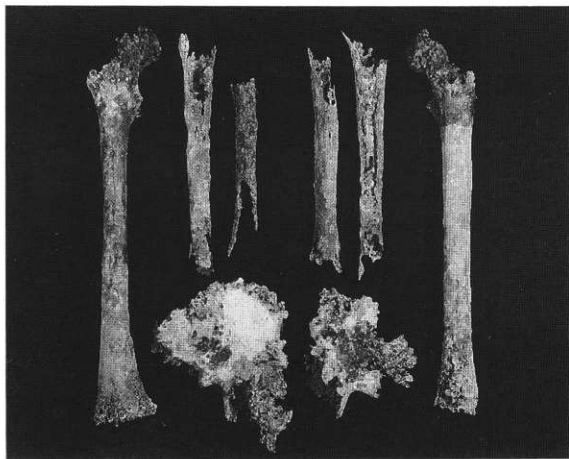
表2 体肢骨計測値 (mm)

Martin		
No		
[上腕骨・左]		
5	中央最大径	20
6	中央最小径	15
7	骨体最小周	51
7a	中央周	57
6/5	骨体中央断面示数	75.0
[大腿骨・左]		
6	骨体中央矢状径	23
7	骨体中央横径	21
8	骨体中央周	63
9	骨体上横径	26
10	骨体上矢状径	20
6/7	骨体中央断面示数	109.5
10/9	上骨体断面示数	76.9
[脛骨・左]		
8a	栄養孔位最大径	22
9a	栄養孔位横径	16
10a	栄養孔位周	60
10b	骨体最小周	51
9a/8a	栄養孔位断面示数	72.7

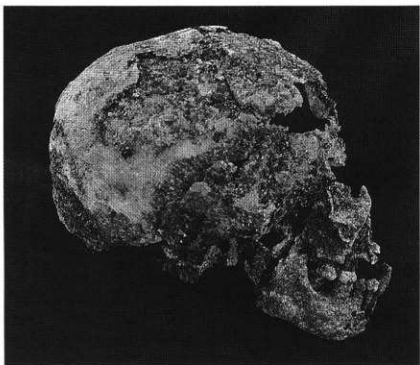
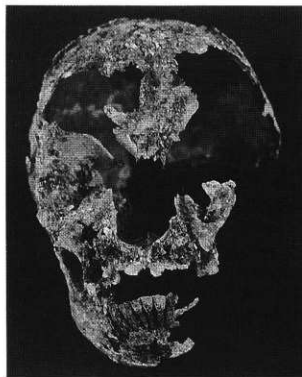
注：計測はすべて剥離面上で行っている。



上顎歯列の状態



主要体肢骨



祇園原地区遺跡地下式横穴1号墓人骨の頭蓋
(上：前面観と上面観、下：右側面観)

新富町祇園原地区遺跡出土の馬歯

西中川駿・日高祥信
(鹿児島大学獣医学科)

[はじめに]

わが国で馬歯、馬骨の出土した遺跡は、筆者らのこれまでの調査で、475ヵ所におよんでおり、九州では73ヵ所を数える。また、時代別では中世が最も多く、平安、古墳の順である。宮崎県内からの馬の遺体の出土例は、六野原1号土壌、久見迫1号土壌、保木下遺跡、林遺跡および笠下遺跡にみられる。しかし、これらの遺跡の出土遺体については、詳細に報告されておらず、久見迫1号の歯(右上顎第三前臼歯)のみが明らかにされている。

今回の調査を依頼された宮崎県新富町の祇園原地区遺跡は、県営圃場整備事業のために、県文化課の谷口氏の指導の下に発掘され、古墳周溝36基等が検出された遺跡であり、馬歯の出土した土壌は、8号墳周溝であり、出土した遺物から6世紀後半の時期と考えられている。また、15、18号墳からは馬具が検出されているが、馬歯は検出されていない。ここでは8号墳周溝から出土した3体の馬歯について調査したので、その概要を報告する。

[出土状況]

馬歯の出土した土壌は、8号墳周溝を横切って作られ、轡など馬具も出土している。

馬歯は土壌の北側の壁に接して1体分(1号馬)、北東に鉄器と共に2体(2号、3号馬)が検出されている。2号と3号馬は近い位置にあり、同一固体のようにみえたが、いずれも左側の臼歯であることから、別々の個体のものである。3体の臼歯の総重量は173.7gである。

[出土馬歯の概要]

馬の歯式は、 $J \frac{3}{3}$ 、 $C \frac{1}{1}$ ($\frac{0}{0}$ 雌) $P \frac{3-4}{3}$ 、 $M \frac{2}{2}$ であらわされ、 $P^2 \sim P^4$: 上顎第二～四前臼歯、 $M^1 \sim M^2$: 上顎第一～三後臼歯、 $P_1 \sim P_4$ および $M_1 \sim M_2$ は下顎の臼歯をあらわす。なお、臼歯各部位の計測と他の遺跡および在来馬の計測値との比較は表1に示した。

以下、各団体の臼歯の概要について記述する。

1) 8号墳1号馬の臼歯(写真1、2参照)

土壌内では歯の位置関係からみて、右側を下にして埋葬されており、左上顎はすでになく、左下顎が右下顎を取り除くと、右側の上、下顎の臼歯が咬み合ってみられ、保存している左下顎臼歯列長($P_1 \sim M_2$)は9.7cmで、右上顎($P^3 \sim M^1$)は8.8cm、右下顎($P_1 \sim M_2$)は10.0cmである。下顎の左臼歯はいずれも完形はなく、また、エナメルヒダのみであり、歯根尖は破損している。ヒダの形状は御崎馬などに似ている。 P_1 のエナメル歯冠長と幅は、25.7×15.3(mm)である。右側の上顎臼歯はすべての歯でエナメルヒダの一部分のみで計測も不可能である。右側の P_1 は歯根はなく、下後維も欠如している。 P_1 は歯尖は欠如し、咬面はエナメルヒダのみがみられ、その形状は御崎馬のものに類似している。 M_1 は下後維、下後附維が欠損し、歯根尖もない。 M_2 は咬合面のエナメルヒダが欠如し、歯根尖もない。これらのエナメルヒダの計測値は表1に示した。なお、各臼歯の歯冠長から臼歯列長を推定し、さらに頭蓋長、下顎全長を推定し、これを基に林田らの方法で体高を推定すると、129.8±3.9cmであり、これは御崎馬とほぼ同じ体高である。

2) 8号墳2号馬の臼歯(写真3、4参照)

左側を下にして埋葬されており、左側の上顎のP'~M'と、下顎のP₂~M₁が検出されているが、いずれも破損が著しく、歯の特徴を把握できないが、成馬のものである。

3) 8号墳3号馬の臼歯(写真5~7参照)

No.2の個体と非常に近い所から出土していたので同一個体と思われたが、同じ左側の臼歯であることから別個体のものと同定した。No.3の馬は左側を下にして埋葬されており、上顎のP'~M'と、下顎のP₂~M₁が検出されている。上顎のP'は写真Iの7に示すように後歯の一部分のみで、P'は咬面はほぼ完形なエナメルヒダを残しており、エナメルヒダ歯冠長は29.2mmである。P'は原歯の欠如した標本で、その歯冠長は27.4mmであり、M'は前歯から後附歯を残し、原歯など欠如した標本で、Mは後附歯から次歯が欠損している。下顎のP'、M'共に小片で、P'、P'の咬合面のエナメルヒダはほぼ完形に近いが、歯根尖はない。エナメルヒダ歯冠長はそれぞれ27.3、26.9(mm)である。これらの計測値から臼歯列長を求めると上顎で168.8cm、下顎で168.9cmであり、頭蓋最大長は51.6cm、下顎全長は40.4cmとなり、林田らの方法で体高を推定すると、132.5±3.9cmとなり、これは現生の御崎馬の上限に当たる大きさである。年齢は7~8歳位と推定される。

[考察]

わが国に馬がいつ頃、どこから移入されたかは、これまで幾多の説があり、未だに明らかにされていない。しかし、古墳時代には、全国各地で馬の遺体が検出され、また、馬具を伴って出土することも希ではない。これまでの筆者らの調査によれば、全国が475ヶ所から馬の遺体が検出されており、時代別では、中世、古墳が多い。一方、縄文遺跡からの出土も先人により報告されているが、C¹⁴およびフッ素による年代測定で、悉く年代が新しくなっており、現在のところ弥生中期以降となっている。

宮崎県内からの馬具の出土例は、50ヶ所を越えているが、馬歯、馬骨の出土例は久見迫1号土壇や六野原1号土壇など5ヶ所を数えるに過ぎない。今回調査した祇園原地区遺跡出土の馬歯は8号墳土壇で3体分が検出されており、いずれも成馬のものであった。同じ土壇内で3体分がみられたこと、また老駱馬でないことから、句葬や儀礼的なことも十分に考えられる。

本遺跡出土の下顎臼歯の計測値を熊本県の上の原古墳や塚原古墳のものと比較すると(表I)、ほぼ同じ大きさであり、また、現生の御崎馬に類似している。ほぼ完形と思われるエナメルヒダの歯冠長から、頭蓋長、下顎長の推定し、さらに林田らの方法で体高を推定すると、1号馬は129.8±3.9cm、3号馬は132.5±3.9cmとなり、これはわが国の中型在来馬である御崎馬とほぼ同じ大きさであり、3号馬は雄と思われる。また、久見迫1号土壇から馬具と共に出土した上顎P'の歯冠長は27.6mmで、体高130.9cmと推定されており、本遺跡出土のものとはほぼ同じ大きさであることは興味深い。

以上のことから、祇園原遺跡を遺した人々は、御崎と同じ中型馬を飼養し、運搬や騎馬に使役していたことがうかがわれ、また、本遺跡の特徴として、同じ土壇に比較的若い3体の馬が埋葬されていることから、句葬や儀礼的なことも十分考えられる。

[まとめ]

宮崎県新富町祇園原地区遺跡出土の馬歯について調査した。

- 1) 共伴した遺物から6世紀後半のもので、8号土壇から3体の臼歯を検出した。総重173.7gである。
- 2) 出土した臼歯は、1号馬が左右の下顎臼歯(P'~M')と右の上顎臼歯(P'~M')で、2号馬は左の上、下顎臼歯(P'~M'、P₂~M₁)である。3号馬は左の上、下顎臼歯(P'~M'、P₂~M₁)である。
- 3) ほぼ完形の各臼歯の計測値から体高を推定すると、1号馬は129.8±3.9cm、3号馬は132.5±3.9cmと推

定され、これらは現生の御崎馬とほぼ同じ大きさであり、7～8歳のと推定される。

- 4) 8号土壌に3体も埋葬され、しかも老齢馬でなく、比較的若い個体であることから、句葬や儀礼的なことも考えられる。

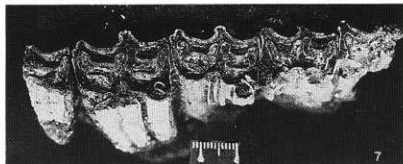
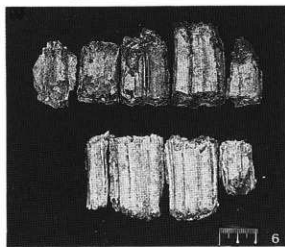
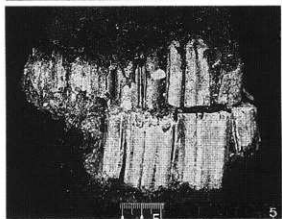
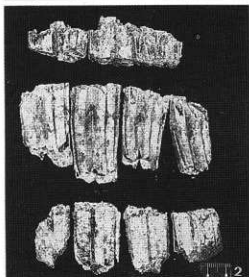
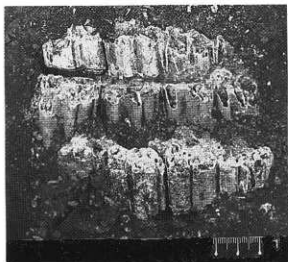
[参考文献]

1. 林田重幸：日本在来馬に関する研究、P 1～180、中央競馬会、東京（1978）
2. 林田重幸：山内忠平：馬における骨長より体高の推定法、鹿大農学術報告、6、148～156（1957）
3. 直良信夫：日本馬の考古学的研究、P 1～201、校倉書房、東京（1984）
4. 西中川駿他：古代遺跡出土からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究、平成2年度文部省科学研究費（一般B）研究成果報告書、P 1～197（1991）
5. 芸田清吾：日本古代家畜史の研究、P 100～189、学術出版会、東京（1969）

表1 下顎臼歯の計測値

NO. 1 E ナ メ ル レ タ	P ₃		P ₄		M ₁		M ₂						
	最大歯高	歯冠長	最大歯高	歯冠長	最大歯高	歯冠長	最大歯高	歯冠長					
祇園原地区運路	L	—	40.30*	26.00*	35.00*	22.60*	—	—					
	R	46.10*	53.30*	26.40	15.50	41.00*	24.70	14.10					
上の原古墳	L	47.00	48.30	26.90	14.40	—	—	—					
	L	74.00*	89.90*	27.70	15.20	68.10*	24.60	13.90					
塚原古墳	L	—	—	27.00	15.00	52.00*	24.00	12.00					
トカク馬 雄(N=6)	—	31.18±14.70	25.89±0.96	14.83±1.56	37.50±10.74	23.25±1.45	13.79±1.84	34.55±15.31	23.86±2.90	13.98±1.38	38.69±16.64	24.41±2.08	12.33±1.46
	—	36.02±22.09	26.16±1.55	13.34±1.11	45.05±20.36	24.49±1.73	13.38±1.50	42.49±22.88	24.65±2.42	13.67±0.99	46.43±22.73	24.77±2.07	12.37±1.02
御崎馬 雄(N=9)	—	44.82±20.94	26.59±1.88	14.80±0.37	55.96±24.77	25.58±1.94	14.26±1.06	46.71±20.27	23.98±2.08	14.21±2.28	51.99±22.13	25.35±2.07	14.39±3.69
	—	32.15±20.89	25.77±1.09	15.46±2.60	36.87±23.15	24.22±2.84	14.63±1.18	33.21±21.16	23.09±1.91	14.36±2.04	37.66±21.34	24.10±1.96	13.88±2.51
サラブレッド 雄(N=8)	—	59.23±15.64	29.34±1.18	16.14±1.38	64.28±18.09	28.76±0.83	14.84±1.64	57.85±17.62	25.55±6.37	14.53±0.83	66.21±19.29	29.22±2.33	13.56±1.61
	—	75.66±3.17	28.46±1.56	13.83±0.99	72.96±8.82	27.19±1.53	12.26±0.71	81.66±10.33	30.59±2.23	13.19±1.48	87.66±5.54	31.08±0.72	12.95±0.42

L: 左側 R: 右側 * : 不整形歯



祇園原古墳出土の管玉の産地分析

薬科哲男

(京都大学原子炉実験所)

[はじめに]

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたかということ調査するのではなく、何ヶ所かある碧玉の原産地のうち、どこか原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。翡翠などは糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行なった蛍光X線分析で行う元素比法²⁾が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行なった研究では、蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行なった例³⁾が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。

- (1) 石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。
- (2) 玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えられ考えられる。従って、玉類の産地分析で明らかになる碧玉製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない。お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析でしか得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った遺物は児湯郡新富町新田に位置する、祇園原115号墳の南周溝から出土した6世紀の管玉2個の分析結果が得られたので報告する。

[非破壊での産地分析の方法と手段]

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけないといけない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行って見なければわからない。原産地同士が指紋をもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している⁴⁾非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。碧玉、ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

[碧玉原石の蛍光X線分析]

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県、花仙山産原石を図1に示す。

猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図1で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のもの比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原産産地を判定する指標として用いる。

[碧玉の原産地と原石の分析結果]

分析した碧玉の原石の原産地を図2に示す。佐渡猿八原産地は、(1)新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良いものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であつたらしく採石跡が何ヶ所も見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがグリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間のは31個、2.5~2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶色系と緑色系の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は(2)島根県八束郡下湯町下造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間のは10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、(3)兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑色系に茶色系が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644~2.600は23個、2.599~2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、(4)石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、(5)富山県魚沼郡細入村割山定産岩地区のグリーンタフの岩塊に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した8個は2.25~2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、(6)愛知県土岐市地域で、赤色、

黄色、緑色などが混じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。この原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地、(7)北海道紋別郡西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地、(8)兵庫県水上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り表1に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば、花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒に行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉製の玉の原材料で原産地は不明の遺物が出土している。同質の材料で作られた可能性がある玉類は北陸、近畿、中国地方に分布しているらしい。この分布範囲を明らかにし、原石産地を探索すると言う目的で女代南遺物群として原石群と同じように使用する。

この他、鳥取県の福部村多鯨池、鳥取市防己尾岬などの自然露头からの原石を4個分析した。比重は2.6以上より元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。

[祇園原古墳出土の管玉と国内産碧玉原料との比較]

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。

遺物の原料産地の同定をするために、(1)蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2)また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原料であると推測する方法も応用した。

[蛍光X線法による産地分析]

これら遺物の蛍光X線分析の結果(図3、4)および比重(表2)から原材料の岩石を緻密で比重が2.5以上あること、蛍光X線分析でRb、Sr、Y、Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に碧玉に分類した。これら遺物の元素組成比および比重の結果を碧玉原石群(表1)の結果と比較してみる。遺物の比重が2.3以上ある遺物は細入原産地の原石でないことが分かる。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT²検定⁴⁾により同定を行い結果を表3に示した。統計処理ができるだけの原石の分析数が容易されていない産地では、元素組成からこれら産地の原石でないかと推定された。蛍光X線分析の結果の中で管玉-1は花仙山群に10%の確率で帰属され、管玉-2は花仙山群への帰属確率が信頼限界と決めている0.1%と一致し、低い、他の原石群に帰属される確率は桁違いに低く調査した原石群の中では花仙山群に最も高く帰属された。花仙山産で作られたと結論するには以下に述べる電子スピン共鳴(ESR)法による結果も花仙山群に一致すればより確実な結果となる。

[ESR法による産地分析]

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、X-バンド スペクトロメーターで行う。試料は完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。図5-1のESRのスペクトルは、幅広

く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、 g 値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、 g 値が2付近の幅広い信号(II)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(III)で構成されている。図5-1では、信号(II)より信号(III)の信号の高さが高く、図5-2、-3の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。

今回分析した玉類の中で信号(II)が信号(III)より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号(III)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図6-1に花仙山、猿八、玉谷、土岐を図6-2に興部、石戸、八代谷-4、女代(B)遺物群、八代谷および図6-3に富良野市空知川の空知(A)、(B)および北海道今町花石の各原石の代表的な信号(III)のスペクトルを示す。今回分析した遺物のESR信号(III)の結果を図7に示す。各原石の信号(III)と比較すると管玉-1、-2は花仙山産原石の信号(III)のESRスペクトルに一致する。ESR分析から見ると分析した遺物の原石産地がそれぞれ似た信号を示す原石の産地の可能性が大きいかを示唆しているが、さらに正確な原産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地特定された場合のみ、その原産地の原石で作られた玉であると決定する(表3)。

[結 果]

分析した管玉は、花仙山産原石の組成に蛍光X線分析、ESR信号共に似ていることから管玉-1、-2の原産地を花仙山産地と同定した。今回得られた結果が花仙山産原石が南西方向に最も遠距離伝播した例で、玉の伝播に伴って原産地付近の情報、文化が伝播したとすると、本遺跡と原産地地方が相互に影響しあって文化の発展があったとしても、また、権力の象徴としての玉であれば、同じ管玉を支配していた集団との関係を推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

[参考文献]

- 1) 茅原一也(1964) \$長者が原産地のヒスイ(翡翠)について(概報)！長者ヶ原 \$ 新潟県糸魚川市教育委員会 : 63073
- 2) 薬科哲男 \$ 東村武信(1987) \$ ヒスイの産地分析！富山市考古資料館紀要 6:1018
- 3) 薬科哲男 \$ 東村武信(1990) \$ 奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析！福原考古学研究所紀要『考古学論叢』、14:950109
- 4) Tetsuo Warashina(1992) \$ Allocation of Jasper Archaeological Implements by Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 5) 薬科哲男 \$ 東村武信(1983) \$ 石器原材の産地分析！考古学と自然科学、16:59089
- 6) 番場猛夫(1967) \$ 北海道日高産軟玉ヒスイ！調査研究報告会講演要旨録 N o. 18:11015
- 7) 河野義礼(1939) \$ 本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質！岩石礦物鉱床学雑誌22:1950201
- 8) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法！考古学と自然科学、9:77-90

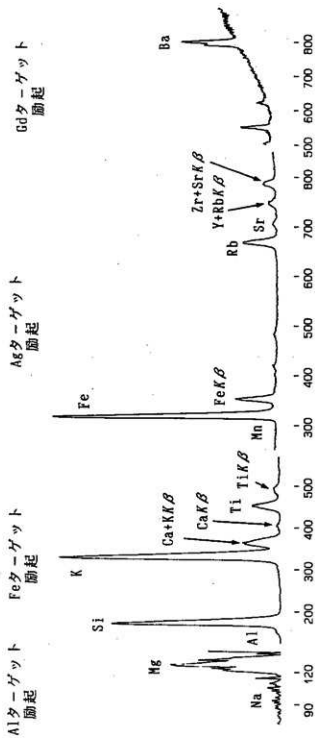


図1 花柳山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

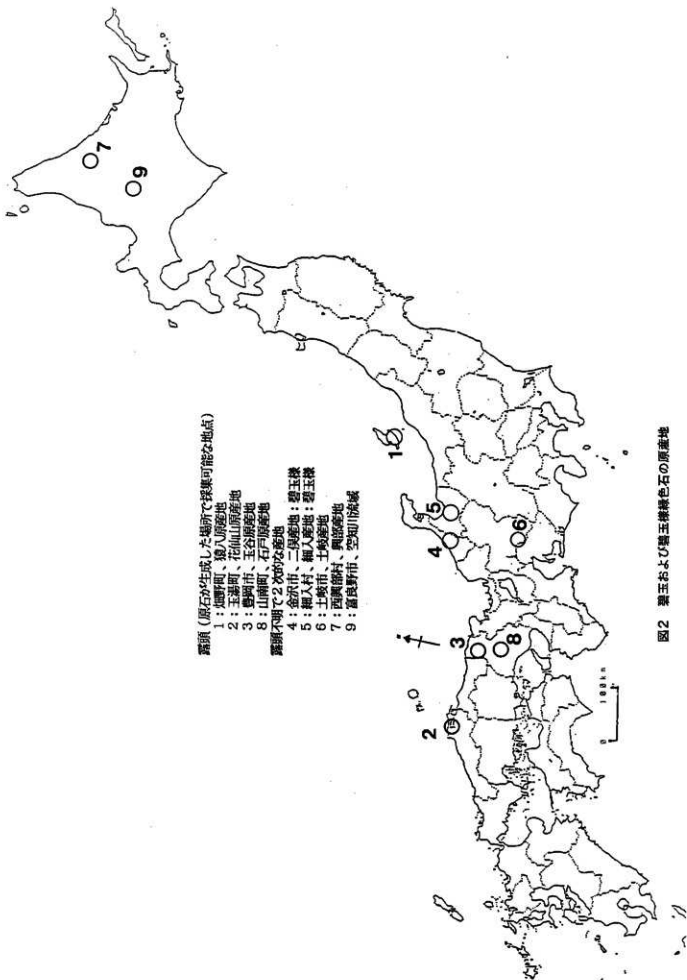


図2 翡翠玉および碧玉緑色石の原産地

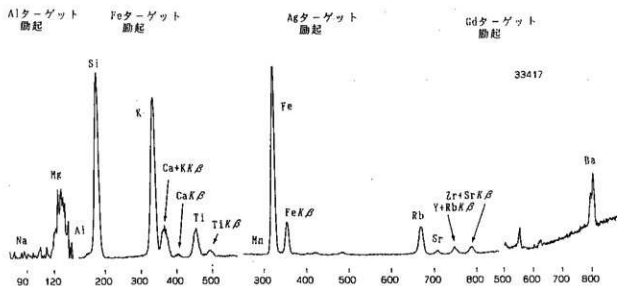


図4 管玉-2 試料番号33417番の蛍光X線スペクトル

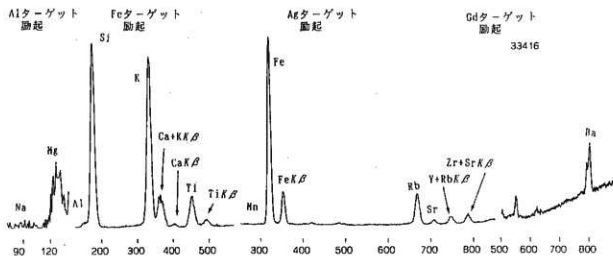


図3 管玉-1 試料番号33416番の蛍光X線スペクトル

図5 隴玉原石のESRスペクトル
(花仙山、五谷、猿八、土岐)

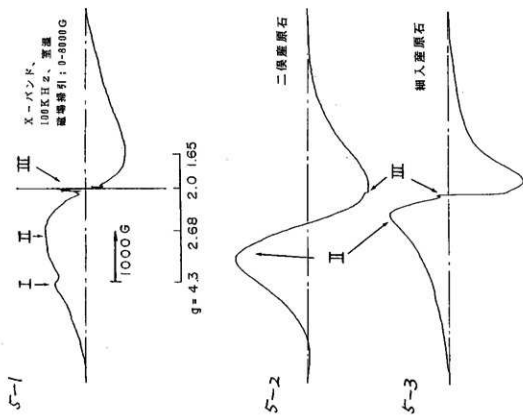


図6 (1)隴玉原石の番号IIIのESRスペクトル

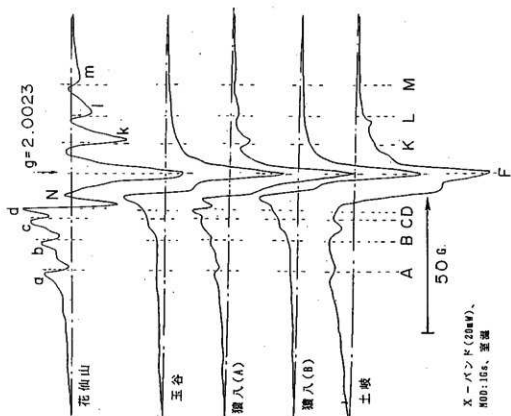
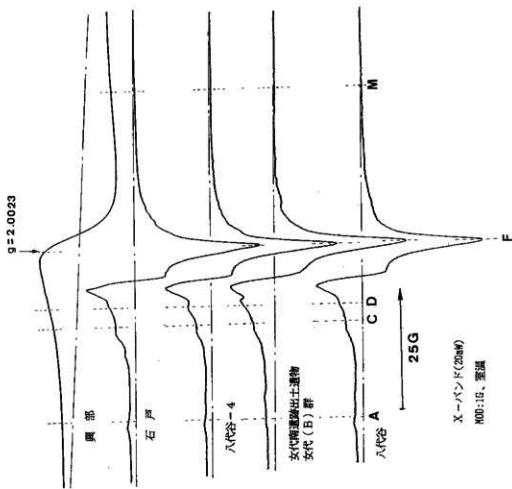
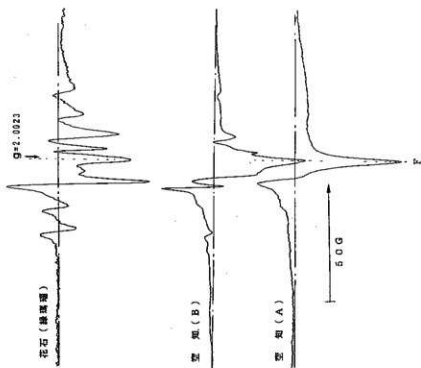


図6 (2) 碧玉原石の信号IIIのESRスペクトル



X-バンド(20mW)
MOD:10、室温

図6 (3) 碧玉原石の信号IIIのESRスペクトル



各種玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原群	石名	分析個数	Al/Si 又±σ	K/Si 又±σ	Ca/K 又±σ	Ti/K 又±σ	K/Fe 又±σ
興部	空知A1	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
	空知A2	10	0.049±0.017	1.044±0.299	2.308±0.556	0.484±0.096	0.052±0.012
	空知B	3	0.019±0.009	0.675±0.377	0.623±0.203	0.172±0.031	0.040±0.007
	空知B	2	0.066±0.001	3.927±0.267	0.088±0.004	0.089±0.003	0.283±0.034
	猿八岐	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
	土岐	11	0.010±0.001	0.404±0.229	0.090±0.074	0.057±0.035	0.027±0.007
	玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.194	0.045±0.014
	花仙山1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
	花仙山2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
	細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
	二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
	石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.036	0.154±0.072
女代南B		68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099

原群	石名	分析個数	Rb/Fe 又±σ	Fe/Zr 又±σ	Rb/Zr 又±σ	Sr/Zr 又±σ	Y/Zr 又±σ
興部	空知A1	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
	空知A2	10	0.108±0.042	4.658±2.044	0.438±0.089	15.676±4.311	0.054±0.041
	空知B	3	0.037±0.010	27.651±10.97	1.132±0.759	5.930±3.179	0.349±0.251
	空知B	2	0.455±0.010	2.281±0.278	1.035±0.104	0.235±0.084	0.129±0.022
	猿八岐	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
	土岐	11	0.091±0.029	47.540±31.76	4.074±2.784	0.271±0.323	0.269±0.265
	玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
	花仙山1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.478±0.192	0.098±0.052
	花仙山2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
	細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
	二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
	石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
女代南B		68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047

原群	石名	分析個数	Mn/Fe 又±σ	Ti/Fe 又±σ	Nb/Zr 又±σ	比重 又±σ
興部	空知A1	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
	空知A2	10	0.078±0.152	0.019±0.005	0.003±0.007	2.495±0.039
	空知B	3	0.009±0.003	0.006±0.002	0.118±0.167	2.632±0.012
	空知B	2	0.015±0.002	0.022±0.004	0.123±0.010	2.607±0.001
	猿八岐	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
	土岐	11	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009
	玉谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
	花仙山1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
	花仙山2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
	細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
	二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
	石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
女代南B 遺物群		68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019

又：平均値、σ：標準偏差値

女代南B：女代南遺跡（豊岡市）で使用されている原石産地不明の玉原材料で作った群

祇園原遺跡出土碧玉製管玉の元素分析結果

試料番号	Al/Si	K/Si	元素 Ca/K	素 Ti/K	比 K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
33416	.025	1.010	.088	.195	.049	.221	17.696	3.908
33417	.025	.989	.092	.178	.051	.204	22.525	4.592

試料番号	元素 Sr/Zr	素 Y/Zr	比 Mn/Fe	比 Ti/Fe	Nb/Zr	重量 gr	比重
33416	.460	.271	.001	.007	.000	3.893	2.561
33417	.487	.124	.001	.007	.000	4.517	2.565

表3 祇園原遺跡出土碧玉製管玉の産地分析結果

遺物番号	分析番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率					ESR信号形	総合判定 原石産地
		興部群	玉谷群	花仙山群	親八群	女代(B)群		
管玉-1	33416	$1 \times 10^{-5} \%$	$1 \times 10^{-10} \%$	10.0 %	$1 \times 10^{-17} \%$	$< 10^{-25} \%$	花仙山形	花仙山産
// -2	33417	$1 \times 10^{-4} \%$	$1 \times 10^{-10} \%$	0.1 %	$1 \times 10^{-20} \%$	$< 10^{-25} \%$	//	//

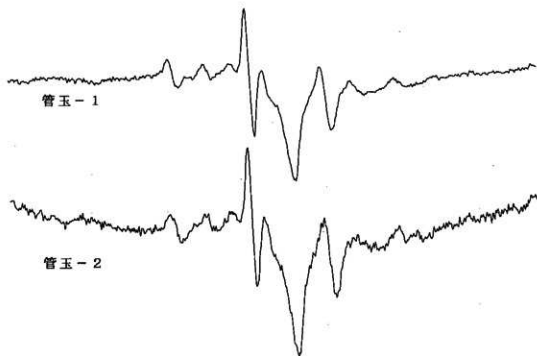


図7 祇園原遺跡出土碧玉製管玉の信号ⅢのESRスペクトル

出上土器観察表

No.	種類	法 量	調 整	焼 成	色 調	備 考
1	須惠器 環 身	口径 12.5 器高 3.9	外-ナデ ヘラ削り 内-ナデ 仕合げナデ	良好	外-灰 5Y7/2 灰オリーブ 5Y6/2 内-灰 7.5Y6/1	
2	須惠器 環 身	口径 12.2 器高 3.85	外-ナデ ヘラ削り 内-不定方向ナデ	良好	外-糖灰質 2.5Y6/2 浅黄 5Y7/3 内-灰 7.5Y6/1	
3	須惠器 高 瓶	口径 5.9 器高 13.4	外-ナデ ヘラ削り 内-ナデ	良好	外-灰白 10YR7/1 灰白 2.5Y8/2 内-灰白 5Y8/2 糖オリーブ 7.5Y8/2	自然釉 外面
4	須惠器 高 瓶	口径 11.0 器高 11.0	外-ナデ 内-ナデ	不良	外-灰 5Y6/1 灰白 2.5Y8/1 内-黄灰 2.5Y6/1 灰白 5Y8/2	
5	須惠器 高 瓶	-	外-ナデ ヘラ削り 内-ナデ	不良	外-灰白 5Y7/2 2.5Y7/1 内-灰白 2.5Y7/1	
6	須惠器 高 瓶	-	外-ナデ 内-ナデ	不良	外-灰 5Y6/1 黄灰 2.5Y6/1 内-灰白 2.5Y7/1 灰黄 2.5Y8/2	自然釉 外面
7	土師器 高 瓶	-	外-ナデ 内-ナデ	良好	外-糖 7.5YR7/6 内-糖 7.5YR7/6 浅黄橙 7.5YR8/6	
8	須惠器 壺	口径 15.7	外-平行タタキ ナデ 内-同心円タタキナデ	良好	外-灰白 7.5Y8/1 内-灰白 7.5Y8/2	
9	須惠器 提 瓦	-	外-カキ目 内-ナデ 指頭痕	良好	外-灰白 5Y7/2, 10Y7/1 黄 2.5Y8/6 内-灰黄 2.5Y6/3 内-灰白 5Y7/1	自然釉 外面
10	土師器 環 身	口径 18.4 器高 3.3	外-ナデ 内-ナデ	良好	外-浅黄橙 7.5YR8/6 内-浅黄橙 7.5YR8/6 底-灰白 5Y8/2	
11	須惠器 環 蓋	口径 13.4 器高 3.5	外-ナデ ヘラ削り 内-ナデ 指頭痕	良好	外-灰白 5Y7/1 2.5Y7/1 内-灰 5Y7/2	
12	須惠器 環 蓋	口径 13.2	外-ヘラ削り ナデ 内-ナデ	良好	外-灰白 7.5Y7/1 5Y7/2 内-灰 7.5Y6/1	
13	須惠器 環 蓋	口径 14.65 器高 3.8	外-ナデ ヘラ削り 内-ナデ 指ナデ	良好	外-灰 5Y6/1, 6/1 内-灰 7.5Y6/1	
14	須惠器 環 蓋	口径 11.9	外-ナデ ヘラ削り 内-ナデ	良好	外-灰 10Y5/1 6/1 内-灰 10Y5/1	
15	須惠器 環 蓋		外-ナデ ヘラ削り 内-ナデ	良好	外-灰 10Y6/1 内-灰 10Y6/1	
16	須惠器 環 蓋		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-灰 10Y6/1 内-灰 10Y6/1	
17	須惠器 環 蓋		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-糖灰質 2.5Y6/2 内-灰 5Y6/1	
18	須惠器 環 身	口径 11.7 器高 3.8	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 N.5I 内-灰 N.5I	
19	須惠器 環 身	口径 13.1	外面-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y8/1 内-灰黄 2.5Y6/2	自然釉 外面
20	須惠器 環 身	口径 10.65	外面-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ	良好	外-灰オリーブ 5Y6/2 灰 5Y5/1 内-灰 7.5Y6/1	自然釉 外面
21	須惠器 環 身	口径 13.0	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰白 5Y7/2 内-灰白 5Y7/2	
22	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y6/1 灰白 10Y7/1 内-灰 5Y5/1	自然釉 外面
23	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y6/1 内-灰 7.5Y6/1	
24	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 10Y5/1 6/1 内-灰 10Y6/1	
25	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰白 5Y8/2 灰 10Y5/1 内-灰 10Y5/1	自然釉 外面
26	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰白 5Y7/2 灰 5Y6/1 内-灰 5Y6/1	
27	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰白 5Y8/2 灰 7.5Y5/1 内-灰 7.5Y5/1	自然釉 外面
28	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y6/1 内-灰白 7.5Y7/1	自然釉 外面
29	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 10Y5/1 7.5 5/1 内-灰 7.5Y5/1	
30	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y8/1 内-灰 5Y8/1	
31	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y8/1 内-灰 7.5Y6/1	自然釉 外面
32	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y5/1 内-灰 7.5Y5/1	
33	須惠器 環 身	口径 7.6	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 10Y6/1 内-灰 10Y6/1	
34	須惠器 環 身	口径 13.0	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰白 5Y7/2 灰 7.5Y6/1 内-灰 7.5Y6/1	
35	須惠器 環 身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-糖灰質 2.5Y6/2 灰 10Y5/1 内-灰 5Y6/1	
36	須惠器 壺		外面-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ	良好	外-黄 2.5Y8/1 糖 7.5Y8/1 灰黄 2.5Y6/2 内-黄 2.5Y6/1 灰黄 2.5Y6/2	
37	須惠器 短頸壺	口径 7.6 器高 9.3	外面-ナデ 内面-ナデ 指頭痕	良好	外-灰 5Y5/1 灰白 7.5Y7/1 内-灰 10Y6/1	自然釉
38	須惠器 壺	口径 18.0	外面-平行タタキ後カキ目 内面-同心円タタキ	良好	外-灰黄 10YR5/2 浅黄 6YR7/3 内-赤赤黄 5YR8/3	
39	須惠器 壺		外面-ナデ ヘラ削り 内面-指押え後ナデ	良好	外-灰白 2.5Y8/1 内-灰白 5Y7/2, 2.5Y8/1	
40	須惠器 壺		外面-ヘラ削り 内面-ナデ	良好	外-糖灰 10YR5/1 灰オリーブ 5Y6/1 内-灰 5Y6/1 灰白 5Y8/1	自然釉 遊カシ 外・内面

No.	種類	法量	調整	焼成	色調	備考
41	須惠器 壺		外面-カキ目 格子目タタキ 内面-同心円タタキ 柵コナテ 柵頭線	良好	外-灰 5Y5/1 内-灰オリーブ 5Y5/2	へう記号 自然釉
42	須惠器 提瓶		外面-カキ目 内面-ナテ	良好	外-黄灰 2.5Y5/1 内-青みがかった灰色	へう記号
43	須惠器 提瓶		外面-カキ目 内面-ナテ	良好	外-灰 5Y6/1.5/1 内-黄灰 2.5Y6/1	
44	須惠器 壺		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-灰 7.5Y5/1 内-灰 7.5Y5/1.4/1 灰白 7.5Y8/1	
45	土師器 坏蓋		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-浅黄緑 10YR8/4 淡黄 2.5Y8/3 内-浅黄緑 10YR8/4	
46	土師器 坏身		外面-ヨコナテ 内面-ヨコナテ	良好	外-浅黄緑 7.5Y8/3 内-浅黄緑 7.5Y8/3	
47	土師器 坏身		外面-ヨコナテ 内面-ナテ	良好	外-浅黄緑 10YR8/4 淡黄 2.5Y8/4 内-淡黄 2.5Y8/3	
48	土師器 高坏		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-橙 2.5YR6/6 内-橙 2.5YR6/6 浅黄緑 7.5YR8/4 淡黄 5YR8/4	丹塗-外・内面
49	土師器 壺	口径 16.2	外面-ヨコナテ 斜方向ナテ 内面-ヨコナテ	良好	外-浅黄緑 7.5YR8/4, 10YR8/4 内-浅黄緑 10YR8/4	
50	土師器 坏身		外面-ヨコナテ 内面-ヨコナテ	良好	外-橙 2.5YR6/6 内-橙 2.5YR6/6 浅黄緑 7.5YR8/3	丹塗-外・内面
51	土師器 壺		外面-ナテ 内面-指ナテ	良好	外-浅黄緑 7.5YR8/4, 10YR8/4 内-褐灰 10YR4/1	黒灰-内
52	土師器 高坏		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-橙 2.5YR6/6 内-橙 2.5YR6/6 浅黄緑 7.5YR8/4 淡黄 5YR8/4	丹塗-外・内面
53	土師器 高坏		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-橙 2.5YR6/6 内-橙 2.5YR6/6 浅黄緑 7.5YR8/4 淡黄 5YR8/4	丹塗-外・内面
54	土師器 高坏		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-橙 2.5YR6/6 内-橙 2.5YR6/6 浅黄緑 7.5YR8/4 淡黄 5YR8/4	丹塗-外・内面
55	須惠器 坏身	口径 12.1	外面-ナテ へう削り 内面-ナテ	良好	外-灰オリーブ 5Y6/2 灰 10Y6/1 内-灰 N5/0	自然釉-外
56	須惠器 坏身		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-暗灰黄 2.5Y5/2 灰 7.5Y6/1 内-灰 7.5Y6/1	自然釉-外
57	須惠器 坏身		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-暗灰黄 2.5Y4/2 暗灰黄 2.5Y5/2 内-暗灰黄 2.5Y5/2	自然釉-外
58	須惠器 提瓶		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-灰 5Y5/1 灰白 5Y7/1 内-灰白 5Y7/1.7/2	
59	土師器 壺		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-淡黄 2.5Y7/3 内-淡黄 2.5Y7/3	
60	土師器 坏		外面-ナテ 内面-横方面ミガキ	良好	外-淡黄 2.5Y8/4 内-黒緑 10YR3/1	
61	土師器 壺		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-橙 7.5YR7/6 内-橙 5YR7/8	丹塗-内
62	須惠器 坏蓋	口径 15.6	外面-ナテ へう削り 内面-ナテ	良好	外-紅黄緑 10YR5/3 紅黄緑 6YR5/4 内-灰黄緑 10YR5/2	
63	須惠器 坏蓋	口径 12.8	外面-ナテ へう削り 内面-ナテ	良好	外-紅黄緑 5YR5/4 暗灰黄 2.5Y5/2 内-紅黄緑 10YR5/3	自然釉-外
64	須惠器 壺		外面-平行タタキのあとカキ目 内面-同心円タタキ	良好	外-灰 5Y6/1 内-黄灰 2.5Y6/1	
65	須惠器 坏蓋	口径 12.7 器高 3.45	外面-ナテ へう削り 内面-ナテ	良好	外-灰 N61 灰 N41 内-オリーブ灰 2.5GY6/1	
66	須惠器 坏蓋	口径 14.5 器高 3.55	外面-ナテ へう削り 内面-ナテ	良好	外-灰オリーブ 5Y6/2 内-灰 7.5Y6/1	
67	須惠器 坏蓋	口径 14.2 器高 3.85	外面-ナテ へう削り 内面-ナテ 仕上げナテ	良好	外-灰 5Y5/1, 7.5Y5/1 内-灰 5Y4/1.5/1	
68	須惠器 坏身	口径 12.3 器高 4.1	外面-ナテ へう削り 内面-ナテ	良好	外-灰白 5Y7/2 淡黄 5Y8/3 内-灰白 5Y7/2	
69	土師器 坏		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-浅黄緑 7.5YR8/4 淡黄 5YR8/6 内-浅黄緑 6YR8/4 浅黄緑 7.5YR8/3	
70	土師器 壺		外面-ナテ 内面-ナテ 指頭線	良好	外-浅黄緑 7.5YR8/4 内-浅黄緑 2.5YR8/4 淡黄 2.5Y8/3	
71	土師器 坏		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-紅黄緑 10YR7/3 内-浅黄緑 10YR8/3	
72	土師器 壺-底部		外面-ナテ 内面-ナテ	良好	外-黄緑 7.5YR7/8 内-橙 5YR7/8	
73	須惠器 壺		外面-ナテ 横線文 内面-ナテ	良好	外-灰 5Y5/1.6/1 灰白 5Y8/2 内-灰 5Y5/1.6/1	透かし 自然釉-外
74	須惠器 高坏		外面-ナテ 内面-ナテ へう削り	良好	外-紅黄緑 7.5YR8/4 淡黄 5YR8/6 内-灰白 5Y7/2-灰 5Y8/2 淡黄 5Y7/2-黄	自然釉-外・内
75	須惠器 壺		外面-ナテ カキ目 平行タタキ 内面-ナテ 同心円タタキ	良好	外-灰白 5Y7/1 灰 7.5Y5/1 内-黄灰 2.5Y6/1	自然釉-外
76	須惠器 壺		外面-ナテ 平行タタキのあとカキ目 内面-ナテ 同心円タタキ	良好	外-灰 5Y7/1, 7.5Y7/1 黒緑 10YR4/1 淡黄 5Y8/3 内-灰 7.5Y6/1 淡黄 2.5Y6/2 淡黄 5Y8/3	自然釉-外
77	須惠器 坏蓋	口径 14.8 器高 4.85	外面-ナテ へう削り 内面-ナテ 仕上げナテ	良好	外-灰 5Y5/1, 7.5Y5/1 内-灰 5Y5/1, 10Y8/1	朱付着-外・内
78	須惠器 坏蓋	口径 15.8 器高 4.4	外面-ナテ 仕上げナテ 内面-ナテ	良好	外-淡黄 5Y8/3 内-灰白 5Y7/1.7/1	黒灰-外 朱付着-外・内
79	須惠器 坏蓋	口径 9.1 器高 2.5	外面-ナテ へう削り 内面-ナテ	良好	外-灰白 5Y8/1 内-灰白 5Y8/1	
80	須惠器 坏身	口径 13.4 器高 3.9	外面-ナテ へう削り 仕上げナテ 内面-ナテ 仕上げナテ	良好	外-紅黄緑 10YR5/3, 7.5YR5/3 内-淡黄 5YR8/3	赤焼け-外

No.	種類	法量	調整	焼成	色調	備考
81	須惠器 坏身	口径 12.8 器高 3.9	外面-ナデ 内面-ナデ	へう削り 仕上げナデ 仕上げナデ	良 良好	外-灰白 2.5Y8/1.5Y8/1.7/1 内-灰白 2.5Y8/1.7.5Y7/1
82	須惠器 坏身	口径 13.4 器高 4.4	外面-ナデ 内面-ナデ	へう削り	良 良好	外-灰白 7.5Y7/2 灰 10Y6/1 内-灰 10Y6/1.N6/0
85	須惠器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-灰 2.5Y6/1 内-灰 2.5Y6/1
86	須惠器 壺	口径 14.0	外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-灰黄 2.5Y7/12 内-灰黄 2.5Y7/12
87	須惠器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	カキ目 同心円文タタキ	良 良好	外-灰白 2.5Y7/1 内-黄灰 2.5Y6/1
88	須惠器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	格子目タタキ 同心円文タタキ	良 良好	外-灰 7.5Y5/1 内-灰 N61
89	須惠器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	一平行タタキ 同心円文タタキ	良 良好	外-灰黄褐 10YR6/2 内-灰 N61
90	須惠器 提瓶		外面-ナデ 内面-ナデ	カキ目	良 良好	外-灰白 5Y7/1 内-灰 10Y5/1
91	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-にがい壇 5YR6/3 内-にがい壇 2.5YR6/4
92	須惠器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	格子目タタキ 同心円文タタキ	良 良好	外-灰白 5Y7/2 内-灰黄 2.5Y6/2
93	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	指懸	良 良好	外-にがい壇 10YR7/4 内-褐灰 10YR5/1
95	須惠器 罐		外面-ナデ 内面-ナデ	へう削り へう削り	良 良好	外-灰黄 2.5Y6/2 黄灰 2.5Y5/1 内-灰 10Y5/1 灰 2.5Y5/1
96	須惠器 罐		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-暗灰黄 2.5Y5/2 灰 5Y5/1 内-灰 5Y5/1
97	須惠器 罐		外面-ナデ 内面-ナデ	へう削り	良 良好	外-灰黄褐 10YR6/2 内-褐灰 10YR6/1
98	須惠器 高坏		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-黄灰 2.5Y6/1 オリーブ黒 10Y3/1 内-黄灰 2.5Y6/1
99	須惠器 高坏		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-褐灰 10YR5/1 内-褐灰 10YR5/1
100	須惠器 坏身	口径 12.8 器高 4.15	外面-ナデ 内面-ナデ	へう削り	良 良好	外-灰白 7.5Y7/1 内-灰 7.5Y5/1
101	須惠器 坏身	口径 13.3 器高 3.95	外面-ナデ 内面-ナデ	へう削り	良 良好	外-灰 7.5Y5/1 内-黄灰 2.5Y5/1
102	須惠器 坏身	口径 11.4	外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-灰 7.5Y6/1 内-灰 7.5Y6/1
103	須惠器 坏身	口径 10.8	外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-灰白 7.5Y7/1 灰白 7.5Y8/2 内-灰白 7.5Y7/1
104	須惠器 坏身	口径 11.1	外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-灰 10Y6/1 内-灰 7.5Y6/1
105	須惠器 坏身	口径 12.6	外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-灰 7.5Y6/1 内-灰 7.5Y6/1
106	須惠器 坏身	口径 13.5	外面-ナデ 内面-ナデ	へう削り 仕上げナデ	良 良好	外-灰黄 2.5Y7/2 内-黄灰 2.5Y6/1
107	須惠器 坏身	口径 13.1	外面-ナデ 内面-ナデ	へう削り 仕上げナデ	良 良好	外-オリーブ黒 7.5Y3/1 灰オリーブ 5Y6/2 内-灰 5Y6/1
108	須惠器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ	へう削り	良 良好	外-黄灰 2.5Y6/1 内-灰 5Y6/1 灰オリーブ 5Y6/2
109	須惠器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ	仕上げナデ	良 良好	外-オリーブ黒 7.5Y3/1 灰 5Y5/1 内-灰 7.5Y6/1
110	須惠器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-灰 10Y6/1 内-灰 10Y5/1
111	須惠器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-灰黄 2.5Y6/2 黒褐 2.5Y3/1 内-灰 5Y6/1
112	須惠器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-灰 7.5Y6/1 灰 10Y5/1 内-灰 7.5Y6/1
113	須惠器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-灰 7.5Y5/1 内-灰 7.5Y5/1
114	須惠器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ	へう削り	良 良好	外-黄灰 2.5Y6/1 内-灰 5Y5/1
115	須惠器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-黄灰 2.5Y6/1 灰黄 2.5Y6/2 内-黄灰 2.5Y6/1
116	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	ミガキ 斜方向ナデ	良 良好	外-にがい壇 7.5Y7/4 内-洗黄褐 7.5YR8/6
117	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	ミガキ	良 良好	外-洗黄褐 7.5YR8/3 内-洗黄褐 7.5YR8/4
118	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	斜方向ナデ 斜方向ナデ	良 良好	外-洗黄褐 7.5YR8/4 内-にがい壇 5YR7/4
119	土師器 高坏		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-黄 2.5YR6/6 橙 5YR7/6 内-橙 5YR7/6
120	土師器 高坏		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-橙 7.5YR7/6 洗黄褐 7.5YR8/6 内-黄灰 7.5YR8/8
121	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-洗黄 5YR8/3 内-褐灰 10YR6/1 洗黄橙 10YR8/4
122	土師器 壺	口径 9.9	外面-ナデ 内面-ナデ		良 良好	外-洗黄褐 7.5YR8/4 褐灰 10YR6/1 内-洗黄褐 7.5YR8/4
123	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	ヘケ目	良 良好	外-洗黄褐 7.5YR8/4 内-洗黄褐 10YR8/4 褐灰 10YR6/1

No.	種 類	法 量	調 整	焼 成	色 調	備 考
124	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-にぶい橙 5YR4/1 灰燻 5YR5/2 内-極灰 7.5YR4/1	
125	土師器 高杯		外面-斜方向ミガキ 内面-ナデ	良好	外-赤燻 10R6/6 浅黄橙 7.5YR8/6 内-橙 5YR7/6	丹塗-外面
126	土師器 高杯		外面- 内面-	良好	外-黄橙 7.5YR8/8 内-黄橙 7.5YR8/8	
127	土師器 高杯		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-橙 7.5YR7/6 内-にぶい橙 7.5YR7/4	
128	土師器 高杯		外面-風化著しい 内面-ナデ	良好	外-にぶい橙 5YR7/4 浅黄橙 7.5YR8/6 内-浅黄橙 7.5YR8/6	丹塗-外面
129	土師器 高杯		外面-風化著しい 内面-ナデ 指頭痕	良好	外-浅黄橙 7.5YR8/4 内-浅黄橙 7.5YR8/6	
130	土師器 高杯		外面-ナデ 内面-ナデ 指頭痕	良好	外-浅黄橙 10YR8/4 黄灰 2.5Y6/1 内-浅黄橙 10YR8/4	
131	土師器 カメ		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-にぶい橙 5YR7/4 浅黄橙 7.5YR8/6 内-浅黄橙 10YR8/4	
132	土師器 カメ		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-淡黄 5YR8/4 内-淡黄 5YR8/4	
133	須恵器 杯身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y6/1 内-灰白 5Y7/2 灰 10Y5/1	自然輪-外・内面
134	須恵器 壺	口径 14.7	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y6/1 灰白 7.5Y7/1 内-灰白 7.5Y7/1 灰白 5Y7/2	
135	須恵器 高杯		外面-ヘラミガキ	良好	外-にぶい橙 5YR7/4	
136	須恵器 提瓶		外面-ナデ カキ目 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y5/1 灰白 5Y7/2 内-灰 5Y5/1	
137	須恵器 高杯		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 N6/ 黄灰 2.5Y5/1 内-灰 7.5Y6/1 灰 10Y5/1	三方透
138	須恵器 杯身		外面-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ	良好	外-灰 オリーブ7.2 灰 5Y6/1 内-灰 5Y6/1	
139	須恵器 杯蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-オリーブ灰 2.5GY5/1 内-灰 10Y5/1	
140	須恵器 杯蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y6/1 内-灰 NEI	
141	須恵器 杯蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 10Y6/1 内-灰 10Y6/1	
142	須恵器 杯蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰白 7.5Y7/1 内-灰 5Y5/1	
143	須恵器 杯蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y5/1 内-黄灰 2.5Y5/1	
144	須恵器 杯蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 内-灰 10Y5/1	
145	須恵器 杯身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 10Y6/1 内-灰 10Y6/1	
146	須恵器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-オリーブ黒 5Y3/1 黄橙 10YR8/6 内-暗オリーブ 5Y4/3 オリーブ黒 5Y3/1	
147	須恵器 杯蓋		外面-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y6/1 内-灰 7.5Y6/1 灰 5Y6/1	
148	須恵器 杯身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 内-灰 5Y4/1	自然輪-外面
149	須恵器 杯身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y5/1 黄灰 2.5Y6/1 内-灰 10Y5/1	
150	須恵器 杯蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y5/1 内-灰 7.5Y6/1	
151	須恵器 杯蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 灰 5Y5/1 内-黄灰 2.5Y6/1	
152	須恵器 壺		外面-ナデ 平行タタキ 内面-ナデ 同心円タタキ	良好	外-灰燻 5YR6/2 内-灰 5Y5/1	
153	須恵器 壺		外面-平行タタキ 内面-同心円タタキ	良好	外-明燻灰 7.5YR7/1 内-灰 5Y5/1	
154	土師器 高合付		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-橙 7.5YR7/6 内-赤燻 10R6/6	
155	土師器 フダ		外面-丁寧なナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄橙 7.5YR8/4 内-浅黄橙 10YR8/4	
156	土師器 カメ		外面-ナデ 内面-斜方向ナデ	良好	外-にぶい橙 7.5YR7/4 内-にぶい橙 7.5YR7/4	
157	土師器 壺		外面-ナデ ヨコナデ 内面-ヨコナデ	良好	外-橙 5YR6/6 内-橙 7.5YR7/6	
158	土師器 高杯・壺		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-橙 7.5YR7/6 内-にぶい黄橙 10YR7/3	
159	土師器 壺	口径 23.6	外面-ヨコナデ 内面-ヨコナデ	良好	外-橙 7.5YR7/6 内-橙 7.5YR7/6	
160	須恵器 杯蓋	口径 13.8 器高 4.15	外面-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 灰白 2.5Y7/1 内-灰 5Y6/1	
161	須恵器 杯蓋	口径 14.25 器高 4 + a	外面-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y6/1 内-灰 7.5Y6/1	
162	須恵器 杯蓋	口径 13.6 器高	外面-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y6/1, 10Y6/1 内-灰 7.5Y6/1, 10Y6/1	
163	須恵器 杯蓋	口径 13.8 器高	外面-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ	良好	外-灰白 5Y7/2 灰オリーブ 7.2 灰 5Y6/1 内-灰 7.5Y6/1, 5Y6/1	

No	種類	法量	調整	焼成	色調	備考	
164	須恵器 杯蓋	口径 14 器高 4.2	外面-ナダ 内面-ナダ	へう削り	良好	外-灰白 5Y8/1, 7.5Y7/1 内-灰白 7.5Y7/1	へう記号
165	須恵器 杯蓋	口径 14.4 器高 4.6	外面-ナダ 内面-ナダ	削り	良好	外-灰 5Y5/1, 6/1 内-灰 N5/0	
166	須恵器 杯身	口径 13.71 器高 3.85	外面-ナダ 内面-ナダ	削り	良好	外-灰黄 2.5Y8/2 灰白 5Y7/1 内-灰 5Y6/1	
167	須恵器 杯身	口径 12.85 器高 4.2	外面-ナダ 内面-ナダ	削り	良好	外-灰白 7.5Y7/1 内-灰 10Y6/1	
168	須恵器 短頸壺	口径 13.65 器高 19.96	外面-ナダ 内面-ナダ	へう状工具による 方向の文様 彫刻	良好	外-青灰 5PB5/1 赤灰 2.5YR6/1 内-灰 N6/0	三方通かし蓋
169	須恵器 短頸壺	口径 7.4 器高 10.4	外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-灰白 5Y8/2 浅黄 2.5Y7/3 内-灰黄 2.5Y7/3	自然釉
170	須恵器 短頸壺	口径 12.2 器高 14.25	外面-ナダ 内面-ナダ	平行叩き	良好	外-灰 5Y5/1, 6/1 灰白 5Y7/1 内-灰 5Y6/1	
171	須恵器 短頸壺	口径 6.6	外面-ナダ 内面-ナダ	削り	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 灰白 10Y8/1.5Y7/1 内-灰 5Y6/1 灰白 10Y8/1	通かし孔
172	須恵器 短頸壺	口径 6.6	外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-灰 10Y5/1.5Y6/1.4/1 灰白 5Y7/2 内-灰 7.5Y6/1.5Y5/1	へう記号
173	土師器 土師壺		外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-浅黄緑 7.5YR8/4 内-浅黄緑 10YR8/3	
174	土師器 土師壺		外面-ナダ 内面-ナダ	タタキ	良好	外-浅黄緑 7.5YR8/6 浅黄緑 7.5YR8/4 内-浅黄緑 7.5YR8/6	
175	土師器 土師壺	規定口径 12.5	外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-浅黄緑 10YR8/4 内-浅黄緑 10YR8/3	
176	土師器 高杯		外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-にぬい漆…丹 漆緑 5YR8/4 橙 5YR7/6 内-黄緑 7.5YR8/8	内・外丹塗
177	土師器 高杯		外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-にぬい漆…丹 漆緑 5YR8/4 浅黄緑 7.5YR8/6 内-浅黄緑 7.5YR8/6	外丹塗
178	土師器 土師壺		外面-ミガキ 内面-ナダの後ミガキ		良好	外-にぬい漆…丹 漆緑 5YR8/4 内-浅黄緑 10YR8/3 灰白 10YR7/1	外丹塗
179	土師器 土師壺		外面-タタキ(斜) 内面-ナダ		良好	外-浅黄緑 10YR8/4 浅黄緑 7.5YR8/6 内-浅黄緑 7.5YR8/3	
180	土師器 土師壺		外面-タタキ 内面-ナダ		良好	外-橙 5YR7/6 漆緑 5YR8/4 内-褐灰 7.5YR6/1 灰黄 2.5YR7/2	
181	土師器 土師壺		外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-浅黄緑 7.5YR8/4 浅黄緑 7.5YR8/6 内-黄緑 10YR8/6	
182	土師器 土師壺		外面-タタキ(斜) 内面-ナダ		良好	外-漆緑 5YR8/4 浅黄緑 10YR8/3 内-浅黄緑 7.5YR8/3	
183	土師器 土師壺		外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-赤橙…丹 10YR8/6 浅黄緑 7.5YR8/6 内-浅黄緑 7.5YR8/4	外丹塗
184	土師器 杯・蓋		外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-橙 5YR7/6 内-橙 2.5YR6/3 浅黄緑 7.5YR8/6	
185	土師器 土師壺		外面-削み付き突帯 ナダ 内面-ナダ	ナダ	良好	外-橙 5YR7/6 内-灰白 10YR7/1	
186	土師器 土師壺		外面-ハタ目 ナダ 内面-ハタ目 ナダ	ナダ	良好	外-浅黄緑 10YR8/3 内-灰白 10YR8/2	内ス付着
206	土師器 土師壺		外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-橙 5YR7/6 内-橙 7.5YR7/6	
207	土師器 高杯		外面-ナダ 内面-風化著しい		良好	外-橙 5YR6/6 内-浅黄緑 7.5YR8/4	丹塗
208	須恵器 杯蓋	口径 13.1 器高 4.2	外面-ナダ 内面-ナダ	へう削り	良好	外-灰 N6/0, 10Y6/1 内-灰 N6/0, 10Y6/1	
209	須恵器 杯身	口径 11.7 器高 3.6	外面-ナダ 内面-ナダ	へう削り	良好	外-暗灰黄 2.5Y5/2 灰 7.5Y5/1 内-灰 7.5Y5/1	へう記号
210	須恵器 杯蓋	口径 9.9	外面-ナダ 内面-ナダ	へう削り	良好	外-灰 5Y6/1, 7.5Y6/1 内-灰 5Y6/1, 7.5Y6/1	
211	須恵器 杯蓋	口径 12.4	外面-ナダ 内面-ナダ	へう削り	良好	外-灰 7.5Y6/1 灰黄 7.5YR4/2 内-褐灰 7.5YR5/1	
212	須恵器 短頸壺		外面-カキ目 ナダ 内面-指痕 削り ナダ	ナダ	良好	外-灰 5Y8/1 灰白 7.5Y7/1 内-灰白 5Y7/1	
213	須恵器 短頸壺	口径 7.8	外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-灰 5Y8/1 灰白 7.5Y7/1 内-灰白 5Y7/1	
214	須恵器 須恵壺	口径 20.6	外面-平行タタキ ナダ 内面-同心円タタキ ナダ	ナダ	良好	外-R5Y8/1.5Y8/3 赤鉄石 #1-7赤鉄石 内-灰白 10YR8/1.5Y8/2 #1-7赤鉄石	自然釉
215	須恵器 須恵壺		外面-平行タタキ 内面-同心円タタキ		良好	外-灰 10Y6/1, 7.5Y5/1 浅黄 5Y8/3 内- N5/0	
216	土師器 土師壺		外面-ヨコナダ 内面-ヨコナダ		良好	外-橙 7.5YR7/6 浅黄緑 10YR8/4 内-橙 5YR6/6 浅黄 2.5Y7/3	丹塗外・内面
217	土師器 土師壺		外面-ヨコナダ 内面-ヨコナダ		良好	外-橙 7.5YR7/6 浅黄緑 10YR8/4 内-橙 5YR6/6 浅黄緑 10YR8/4	丹塗外・内面
218	土師器 土師壺		外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-橙 5YR6/6 浅黄緑 7.5YR8/4 内-橙 7.5YR7/6 浅黄緑 10YR8/4	丹塗外・内面
219	土師器 土師壺		外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-黄緑 10YR8/6 内-黄緑 10YR8/6	
220	土師器 土師壺		外面-ナダ 内面-風化著しい		良好	外-浅黄緑 7.5YR8/6 内-黄緑 10YR8/6	
221	土師器 杯身		外面-ナダ 内面-ナダ		良好	外-橙 2.5YR6/6 内-橙 2.5YR6/6 浅黄緑 10YR8/4	丹塗外・内面
222	土師器 杯身	口径 12.4 器高 6.3 器高 4.0	外面-ヨコナダ 内面-ヨコナダ		良好	外-にぬい漆 7.5YR7/4 内-にぬい漆 7.5YR7/4	

No	種類	法量	調整	焼成	色調	備考
223	土師器 高杯	口径 15.4 器高 13.0	外面-ヨコ割方向ミガキ 内面-ヨコ方向ミガキ 指ナデ	良好	外-橙 2.5YR6/6 浅黄緑 10YR6/3 灰 5YR7/6 内-浅黄緑 10YR6/4 橙 5YR6/6 浅黄緑 7.5YR6/4	丹塗外・内面
224	土師器 高杯	口径 15.2 器高 10.45	外面-ナデ方向 工具痕 内面-ヨコ方向 工具痕 ヨコナデ	良好	外-橙 5YR6/6, 5YR7/6 浅黄緑 7.5YR6/4 内-橙 2.5YR6/6, 2.5YR7/6 浅黄緑 7.5YR6/4	丹塗外・内面
225	土師器 高杯	口径 13.9 器高 9.05	外面-ナデ ミガキ 内面-ナデ	良好	外-橙 2.5YR6/6 浅黄緑 7.5YR6/4 内-橙 2.5YR6/6 黄灰 2.5YR6/1 浅黄緑 7.5YR6/4	黒塗外・内面 丹塗外・内面
226	須恵器 坏蓋	口径 14.1 器高 4.4	外面-へう割り ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰白 5Y7/1 内-灰 5Y6/1	自然釉
227	須恵器 坏蓋	口径 14.0	外面-ナデ へう割り 内面-ナデ 斜方向ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 灰白 5Y7/2 内-灰白 5Y7/2 灰 5Y5/1	
228	須恵器 坏蓋	口径 11.8	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y6/1 内-灰 5Y6/1	
229	須恵器 坏蓋	口径 12.0	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y6/1 内-灰 5Y6/1	
230	須恵器 坏身	口径 12.7 器高 4.55	外面-ナデ へう割り 仕上げナデ 内面-ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y6/2 灰 5Y6/1 内-黄灰 2.5Y5/1	
231	須恵器 坏身	口径 12.4 器高 4.3	外面-ナデ へう割り 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y6/1 内-褐灰 10YR5/1	
232	須恵器 坏身	口径 11.3 器高 4.6	外面-ナデ へう割り 内面-へう割り	良好	外-灰白 5Y7/1 内-灰 10Y5/1	工具痕有り
233	須恵器 蓋	口径 13.6	外面-ナデ後カキ目 内面-ナデ	良好	外-灰白 5Y7/1 内-灰白 5Y7/1	
234	須恵器 蓋	口径 10.8	外面-ナデ 平行ナデ 斜ナデ 斜ナデ 斜ナデ 内面-ナデ 同心円文タタキ 指痕	良好	外-灰白 5Y7/2 黄灰 2.5Y6/1 灰 5Y7/1 内-灰 5Y6/1 灰オリーブ 5Y6/2	自然釉
235	須恵器 蓋	口径 12.0	外面-平行ナデ 平行ナデ 内面-ナデ 同心円文タタキ	良好	外-灰白 5Y7/1 灰 5Y6/1 内-灰 5Y6/1	
236	須恵器 蓋	口径 12.0 器高 14.6	外面-ナデ後カキ目 平行ナデ後カキ目 内面-ナデ 仕上げナデ	良好	外-灰 5Y6/1, 6/1 灰白 5YR6/3 内-灰 2.5Y4/1 灰黄 2.5Y6/3	自然釉・施胎
239	須恵器 蓋	口径 8.3	外-平行ナデの上 ナデ 内-同心円文	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 内-灰 7.5Y6/1	
240	須恵器 短瓶	口径 8.3	外-ナデ 内-ナデ	良好	外内-灰白 7.5Y7/1	
241	須恵器 短瓶	口径 8.3	外-ナデ 内-ナデ	良好	外内-灰白 7.5Y7/1	
242	須恵器 短瓶(肥内)	口径 8.3	外-ナデ 内-ナデ	良好	外内-灰白 7.5Y7/1	
243	土師器 蓋	口径 14.1	外-へうみがき 内-ナデ みがき	良好	外-橙 7.5YR7/6 内-橙 5YR7/6 浅黄緑 7.5YR8/6	
244	土師器 蓋	口径 14.1	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	良好	外-橙 7.5YR6/6 内-橙 7.5YR7/6	
245	土師器 蓋	口径 14.1	外-みがき 内-ヨコナデ	良好	外-橙 7.5YR6/6 内-橙 7.5YR7/6	
246	土師器 坏蓋	口径 14.1	外-ナデ 内-ナデ	良好	外内-黄緑 7.5YR7/8	外-スス付着
247	土師器 坏身	口径 14.1	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ ナデ	良好	外-灰黄 7.5YR6/4 橙 7.5YR6/6 内-灰黄 7.5YR6/3 灰黄 10YR5/3	
248	土師器 坏身	口径 14.1	外-ヨコナデ ミガキ 内-ヨコナデ	良好	外内-橙 5YR6/8	
249	土師器 坏身	口径 14.1	外-丁寧なナデ 内-丁寧なナデ	良好	外内-橙 5YR6/6	
250	土師器 坏身	口径 14.1	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	良好	外-橙 7.5YR6/8 内-橙 7.5YR6/8	
251	土師器 坏蓋	口径 14.1	外-ミガキ 内-ミガキ	良好	外-橙 5YR6/6 内-橙 5YR6/8	外、部分的に黒 塗
252	土師器 坏蓋	口径 6.85	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	良好	外内-橙 7.5YR7/6	
253	土師器 坏身	口径 13.8	外-ヨコナデ ナデ(斜) 内-ヨコナデ ナデ(斜)	良好	外-浅黄緑 7.5YR6/4 灰黄 10YR7/3 内-灰黄 7.5YR7/4	外)一部、黒斑 あり
254	土師器 坏身	口径 13.8	外-ミガキ(横) 内-ミガキ(横)	良好	外内-灰黄 7.5YR6/3	
255	土師器 坏身	口径 13.8	外-ナデ 内-ナデ	良好	外-浅黄緑 7.5YR6/6 灰黄 10YR7/3 内-浅黄緑 10YR8/4	
256	土師器 坏身	口径 13.8	外-ナデ 内-ヨコナデ	良好	外-橙 7.5YR6/8 内-橙 7.5YR6/6	
257	土師器 坏身	口径 13.8	外-ヨコナデ 内-ナデ	良好	外-橙 5YR6/6 内-橙 7.5YR7/6	
258	土師器 坏身	口径 12.1	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	良好	外内-橙 5YR7/6	
259	土師器 坏身	口径 12.5	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	良好	外-黄 1.5YR7/4 黄緑 10YR6/4 灰 1.5YR8/1-黒 内-灰黄 7.5YR7/4	外)一部黒斑 あり
260	土師器 坏身	口径 12.5	外-ヨコナデ 内-ナデ	良好	外内-灰黄 7.5YR6/4	
261	土師器 轆	口径 13.9	外-ナデ 内-ナデ	良好	外内-浅黄緑 10YR8/3	
262	土師器 坏身	口径 13.6	外-ミガキ 内-ミガキ	良好	外-橙 5YR7/6-丹 灰白 2.5Y8/2 内-橙 7.5YR7/6-丹 浅黄緑 10YR8/3	外、内、丹塗り
263	土師器 坏身	口径 13.6	外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	良好	外内-橙 7.5YR7/6	外、スス付着
264	土師器 坏身	口径 13.6	外-ナデ 内-ナデ	良好	外内-橙 7.5YR6/6	外、一部黒塗

No.	種類	法量	調整	焼成	色調	備考
265	土師器 杯身		外-ナデ 内-ナデ ミガキ	良好	外-浅黄緑 7.5YR8/3, 10YR8/3 内-浅黄緑 10YR8/3 土黄 7.5YR8/3, 10YR8/3	内、丹塗り
266	土師器 碗	口径 12.2	外-ナデ 内-ナデ	良好	外-淡黄 2.5Y8/4 内-浅黄緑 10YR8/4	外、黒染あり
267	土師器 壺		外-ミガキ 内-ナデ ミガキ	良好	外-にじみ黄 7.5YR7/4 橙 7.5YR7/6 内-にじみ黄 7.5YR7/4	内、一部黒染
268	土師器 壺	口径 26	外-ナデ 内-ヨコナデ ナデ(斜)	良好	外-にじみ黄 7.5YR7/4 内-にじみ黄 10YR7/4	外、スス付着
269	土師器 壺		外-ナデ 内-取り ナデ(斜)	良好	外-橙 5YR7/6-丹 内-浅黄緑 10YR8/3	外、一部丹塗り
270	土師器 壺		外-ナデ	良好	外内底-浅黄緑 10YR8/4	
271	土師器 杯蓋		外-ヨコナデ 内-ヨコナデ	良好	外-橙 5YR7/6-丹 浅黄緑 7.5YR8/4 内-浅黄緑 10YR8/3	外、丹塗り
272	土師器 壺		外-ナデ 内-丁寧なナデ	良好	外-浅黄緑 10YR8/4 内-灰黄 2.5Y6/2	外、突帯
273	土師器 壺		外-ナデ 内-風化著しい	良好	外-浅黄緑 10YR8/4 内-灰白 5Y8/1 底-浅黄緑 10YR8/4	
274	土師器 高杯		外-ミガキ 内-ミガキ ナデ	良好	外内-赤緑 10YR6/6-丹	外、内、丹塗り
275	土師器 壺		外-ナデ(縦) 内-ナデ(斜)	良好	外-にじみ黄 10YR7/4 内-にじみ黄 1.5YR7/4 褐灰 10YR4/1-黒染	外、すす付着 内-黒染
276	土師器 皿		外-ヘラ切り 内-ナデ	良好	外内-橙 5YR6/8	
277	土師器 土師		外-ミガキ 内-ミガキ	良好	外-明黄緑 10YR7/6 褐灰 10YR4/1 内-灰黄緑 10YR5/2	
280	須恵器 身	口径 12.7 (器高 5.45)	外-ナデ ヘラ削り 内-ナデ	良好	外-灰 5Y5/1 内-灰白 5Y7/1, 7/2	
281	須恵器 高台付 壺	口径 12.6 (器高 4.1)	外-ナデ 内-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 灰白 2.5Y7/1 内-青みかゆった灰黄	
282	須恵器 壺		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-灰白 2.5Y7/1 黄緑 2.5Y3/1 黄 2.5Y7/3 内-灰白 7.5Y7/1	自然軸
283	須恵器 壺		外-ナデ 沈線 柳掻き波状文 斜突文 内-ナデ	良好	外-灰 5Y4/1 灰白 7.5Y7/1 内-灰 5Y5/1 灰オリーブ 5Y6/2	斜突文=斜方向 の柳状工具
284	土師器 壺		外- 内-ナデ	良好	外-浅黄緑 10YR8/4 黄緑 10YR8/6 内-灰白 10YR8/2	
285	土師器 壺	底径 8.6	外-ナデ 内-ナデ	良好	外-橙 5YR7/8 浅黄緑 7.5YR8/6 内-橙 5YR7/8	
286	土師器 高杯・杯		外-ナデ 内-ナデ	良好	外内-浅黄緑 7.5YR8/6	
288	須恵器 壺		外-ナデ ヘラ削り 内-ナデ	良好	外-灰 7.5YR6/1, 6/1 内-灰 N6/	外、自然軸
289	須恵器 壺		外-ナデ カキ目 内-ナデ	良好	外-灰 N6 内-灰 N6	
290	須恵器 壺	口径 19	外-柳掻き波状文 沈線 内-ナデ	良好	外内-灰内 2.5Y7/1	
291	須恵器 壺	口径 13.7	外-ナデ 内-ナデ	良好	外内-灰 N61, 51	
292	須恵器 壺		外-タタキの縁 カキ目 斜縦方向の平行タタキ 内-同心円タタキ	良好	外内-灰白 2.5Y7/1	
293	須恵器 壺		外面-タタキのとカキ目 内面-ナデ 同心円タタキ	良好	外-灰白 2.5Y7/1 内-灰白 2.5Y7/1	
294	土師器 壺		外面-ナデ・タタキ方向のナデ 内面-板状工具によるヨコナデ	良好	外-浅黄緑 10YR8/3 黄緑 10YR8/6 内-浅黄緑 10YR8/4	
295	須恵器 環蓋	口径 14.5 器高 4.35	外-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ 指痕	良好	外-灰オリーブ 5Y6/2 灰白 5Y7/2 内-灰黄 2.5Y6/2	
296	土師器 杯身		外面-風化著しい 内面-ナデ	良好	外-橙 5YR7/8 内-橙 5YR7/6	
297	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄緑 7.5YR8/4 内-浅黄緑 10YR8/4	斜方向の連続刻 目突帯-外
298	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄緑 7.5YR8/6 内-黄緑 10YR8/6	格子状の刻目突 帯-外
299	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄緑 10YR8/4 内-浅黄緑 10YR8/4	斜方向の刻目突 帯-外
300	土師器 碗		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄緑 7.5YR8/4 内-浅黄緑 7.5YR8/4	
301	須恵器 杯蓋		外面-ナデ ヘラ削り 内面-ナデ 仕上げナデ	良好	外-灰 10Y6/1 内-灰 10Y6/1	ヘラ記号-外
302	土師器 壺		外面-ナデ タタキ方向の板状工具によるナデ 内面-板状工具によるナデ	良好	外-淡黄 2.5Y8/4 内-淡黄 2.5Y8/3 灰 5Y6/1	
303	土師器 環蓋	口径 13.4	外面-ヨコナデ ナデ 内面-ヨコナデ	良好	外-淡黄 2.5Y8/4 内-淡黄 2.5Y8/4	
304	土師器 杯身		外面-ナデ ミガキ 内面-ナデ ミガキ	良好	外-橙 2.5YR6/6 浅黄緑 内-橙 2.5YR6/6	丹塗り-外・内
305	土師器 壺		外面-ヨコナデ 内面-ヨコナデ	良好	外-浅黄緑 10YR8/4 内-浅黄緑 10YR8/4	
306	土師器 壺		外面-ヨコナデ 内面-ヨコナデ	良好	外-浅黄緑 10YR8/4 内-淡黄 2.5Y8/4	
307	土師器 壺		外面-ヨコナデ 斜方向のナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄緑 10YR8/4 内-淡黄 2.5Y8/4	スス付着-外

No	種類	法量	調整	焼成	色調	備考
308	須恵器 坏身	口径 11.3	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄 2.5Y7/3 黄灰 2.5Y6/1 内-黄灰 2.5Y6/1	自然軸-外
309	須恵器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y5/1 内-灰 5Y5/1	
310	須恵器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y6/1 内-灰 5Y6/1	
311	須恵器 高坏	口径 13.9	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄 2.5Y7/2 内-浅黄 2.5Y7/3	自然軸-内
312	土師器 壺	口径 12.5	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄橙 7.5YR8/4, 10YR8/4 内-浅黄 2.5Y8/4	
313	須恵器 壺	口径 18.4	外面-ナデ 平行タタキ 内面-ナデ 同心円タタキ	良好	外-明塩灰 7.5YR7/1 内-浅黄橙 10YR8/2 灰白 10YR7/1	
314	須恵器 壺		外面-平行タタキ 内面-同心円タタキ	良好	外-灰白 5Y7/2 灰白 10YR7/1 内-浅黄 10YR6/1 灰黄橙 7.5YR8/2	
315	土師器 鉢		外面-風化著しい 内面-ナデ	良好	外-黄橙 10YR8/6 明黄橙 10YR7/6 内-明黄橙 10YR8/6 底-浅黄橙 7.5YR8/6	木の葉底-外
316	土師器 坏身		外面-風化著しい 内面-風化著しい	良好	外-黄橙 10YR8/6 内-黄橙 7.5YR7/8	
317	須恵器 壺		外面-風化著しい 内面-風化著しい	良好	外-灰白 5Y7/1 灰 5Y6/1 内-灰白 5Y7/1	
318	土師器 鉢		外面-ヨコナデ 内面-風化著しい	良好	外-浅黄橙 7.5YR8/6, 10YR8/4 内-浅黄橙 7.5YR8/6	
319	土師器 壺		外面-ナデ 内面-斜指頭模	良好	外-にぶい橙 7.5YR7/4 内-にぶい橙 7.5YR7/4	
320	土師器 鉢		外面-風化著しい 内面-風化著しい	良好	外-浅黄橙 7.5YR8/6 内-浅黄橙 7.5YR8/6	
321	土師器 坏身	口径 14.75 器高 5.3	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-橙 7.5YR7/6 浅黄橙 7.5YR8/6 内-橙 7.5YR7/6	
322	土師器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄橙 7.5YR8/4 内-黄橙 10YR8/6	木の葉底-外
323	須恵器 坏蓋	口径 9.66 器高 3.96	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y6/1 内-灰 5Y6/1	
324	須恵器 坏身	口径 12.9 器高 4.1	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰オリブ 5Y6/2 灰白 5Y7/2 内-灰 7.5Y6/1	
325	須恵器 鉢	口径 13.6 器高 16	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 灰 5Y4/1 内-灰 5Y5/1, 6/1	透かし
326	須恵器 壺	口径 13	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y5/1 内-灰 5Y5/1	
327	須恵器 壺		外面-平行タタキ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y5/1 内-灰 5Y5/1	
328	須恵器 壺	口径 6.9 器高 7.6	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰白 7.5Y7/1 灰 7.5Y6/1 灰 5Y4/1 内-灰 7.56/1, 5Y6/1	
329	須恵器 鉢		外面-ヨコ方向の櫛歯状放文 カキ目 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y5/1, 1.5Y6/1 内-灰 7.5Y5/1 黄灰 2.5Y6/1	透かし自然軸-内
330	須恵器 壺		外面-格子目タタキ 内面-ナデ	良好	外-浅黄橙 10YR8/2 内-黄灰 2.5Y6/1	
331	須恵器 壺		外面-格子目タタキ 内面-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 内-灰黄 2.5Y6/2	自然軸-外
332	須恵器 壺		外面-格子目タタキ 内面-ナデ	良好	外-青灰 6PB5/1 黄灰 2.5Y6/1 内-青灰 6PB5/1	
333	土師器 坏身	口径 15.7 器高 5.6	外面-ナデ ヨコナデ 内面-ナデ ヨコナデ	良好	外-浅黄橙 7.5YR8/6 橙 5YR7/6 内-浅黄橙 7.5YR8/6 橙 2.5YR7/8	
334	土師器 坏身	口径 13.85 器高 4.72	外面-ナデ ヘラミガキ 内面-ヨコナデ	良好	外-橙 7.5YR7/6, 6/6 内-橙 7.5YR8/2 底-にぶい 7.5YR8/4	
335	土師器 壺		外面-ヨコ方向のヘラミガキ 内面-ヘラミガキ ナデ 指頭模	良好	外-橙 2.5YR8/6 底-橙 2.5YR8/6 内-橙 2.5YR6/6 浅黄橙 10YR8/4	丹塗り-外・内
336	土師器 坏身	口径 12.3 器高 5.6	外面-ナデ ヨコナデ 内面-ナデ ヨコナデ	良好	外-橙 5YR7/6 内-橙 5YR7/6	
337	土師器 壺	口径 7.2	外面-ナデ 30方角の平行タタキとナゲツシ 内面-ナデ ヨコナデ 指頭模	良好	外-浅黄橙 10YR8/4 内-浅黄橙 10YR8/4 黄灰 2.5Y5/1	
338	須恵器 鉢	口径 6.6 器高 20.8	外面-ナデ カキ目 内面-ナデ 指頭模	良好	外-にぶい黄 2.5Y6/3 黄灰 2.5Y5/1 内-黄灰 2.5Y5/1 灰白 2.5Y8/2	ヘラ記号-外
339	土師器 坏身	口径 12.2	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄橙 10YR8/4 内-橙 2.5YR8/6	丹塗り-外・内
340	土師器 壺	口径 8.2	外面-ハケ目 内面-ナデ	良好	外-橙 5YR6/6 浅黄橙 10YR8/3 内-浅黄橙 10YR8/3	丹塗り-外
341	土師器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄橙 10YR8/4 内-浅黄橙 10YR8/4	
342	土師器 鉢		外面-風化著しい 内面-風化著しい	良好	外-黄橙 7.5YR8/8 内-黄橙 7.5YR8/8 底-黄橙 7.5YR8/8	
343	土師器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄橙 10YR8/4 灰黄 2.5Y6/2 内-黄灰 2.5Y5/1	
344	土師器 坏身		外面-ヨコナデ ミガキ 内面-ミガキ	良好	外-橙 7.5YR7/6 内-橙 2.5YR6/6, 5YR7/6	
345	土師器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-橙 2.5YR6/6 内-橙 5YR6/6	
346	土師器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-橙 5YR6/6 内-橙 5YR6/6	
347	土師器 坏身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-橙 7.5YR6/6 内-橙 7.5YR6/6	

No.	種類	法 量	調 整	焼 成	色 調	備 考
348	七脚器		外面- (斜の) 平行タタキ 内面- 同心円タタキ	良好	外-黄橙 7.5YR7/8 内-黄橙 7.5YR7/6	
349	須恵器 高		外面- 平行タタキ 内面- ナデ	良好	外- 灰 10Y5/1 内- 灰 10Y6/1	
350	須恵器 坏身		外面- ナデ ヘラ削り 内面- ナデ	良好	外- 灰白 NT/1 内- 黄灰 2.5Y5/1	
351	須恵器 坏身		外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ	良好	外- 灰白 5Y7/1 内- 灰黄 5Y7/1	
354	須恵器 坏蓋	口径 15.2	外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ 沈め	良好	外内- 灰 5Y6/1	
355	須恵器 坏身	口径 12.6 器高 4.35	外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ	良好	外- 灰 7.5YR5/1 灰黄 2.5Y6/2 内- 灰黄 2.5Y7/2	外- 宇(自然釉) 内- 宇に自然釉の黒斑
356	須恵器 坏蓋	口径 16.2	外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 黄灰 2.5Y6/1 内- 灰黄 2.5Y6/2	
357	須恵器 身	口径 12.3 器高 4.5	外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ	良好	外- 灰黄 2.5Y6/2 内- 灰 5Y5/1, 7.5Y5/1	
358	須恵器 蓋	口径 13.2 器高 3.8	外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ 仕上げナデ	良好	外- 灰 5Y6/1 灰白 5Y8/2...自然釉 内- 灰 5Y5/1	ヘラ削り外- 自然釉 仕上げナデ (内)
359	須恵器 蓋	口径 9.4	外- ナデ 内- ナデ	良好	外内- 褐灰 10YR4/1	
360	須恵器 蓋	口径 20.4	外- ナデ 縦方向 平行叩き 横カキ目 内- ナデ 同心円叩き	良好	外- 褐灰 10YR6/1 灰オリブ 5Y6/2 灰白 5Y8/2 内- 黄灰 2.5Y6/1 灰黄 2.5Y7/2	
361	須恵器 蓋		外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ	良好	外- 灰 7.5Y5/1, 10Y6/1 灰白 7.5Y7/1 内- 灰 7.5Y6/1	
362	須恵器 蓋	口径 9.65	外- ナデ 格子タタキ 内- ナデ	良好	外内- 灰黄 2.5Y7/2, 6/2	外- 自然釉
363	須恵器 蓋		外- ナデ(工具ナデ) 押圧工具痕 内- ナデ	良好	外- 褐灰 10YR4/1 灰 7.5YR6/1 内- 黄灰 2.5Y4/1, 5/1 灰 7.5YR6/1	
364	土師器 身		外- ヨコナデ ナデ 内- ヨコナデ	良好	外- 浅黄橙 10YR8/4 灰白 10YR7/1 内- 黄 2.5Y8/3	
365	土師器 蓋	口径 11.35	外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 浅黄橙 7.5YR8/6 内- 浅黄橙 7.5YR8/4	
366	土師器 蓋		外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 浅黄橙 10YR8/4 内- 浅黄橙 10YR8/4	
367	土師器 蓋		外- ヨコナデ 内- ヨコナデ	良好	外- 浅黄橙 7.5YR8/4 内- 浅黄橙 7.5YR8/4	
368	土師器 蓋		外- ヨコナデ 内- ミガキ 丁寧ナデ	良好	外- 浅黄橙 10YR8/3 内- 浅黄橙 7.5YR8/4	
369	須恵器 模座		外- ナデ 格子叩き 部分の縦方向のみ目 内- 同心円叩き	良好	外- 黄灰 2.5Y5/1 灰黄 2.5Y6/2 内- 黄灰 2.5Y5/1	
370	土師器 蓋	推定口径 9.1	外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 浅黄橙 10YR8/3 内- 浅黄橙 10YR8/3 灰白 10YR7/1	内- 黒斑
371	土師器 蓋		外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 黄 5YR4/4 内- 黄橙 5YR8/4	
372	須恵器 坏蓋		外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 灰白 5Y7/1 内- 黄灰 2.5Y6/1	
373	須恵器 身		外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 灰 5Y5/1 内- 黄灰 2.5Y5/1	
374	須恵器 坏身		外- ナデ 内- ナデ	良好	外内- 灰 5Y6/1	
375	須恵器 坏蓋		外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 灰白 5Y7/1 内- 灰 5Y6/1	
376	須恵器 坏蓋	口径 15.3 器高 3.9	外- ナデ ヘラ削り 仕上げナデ 内- ナデ	良好	外- 灰白 5Y7/2, 7/1 内- 灰 5Y6/1	
377	須恵器 坏身	口径 11.15 器高 4.05	外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ	良好	外- 灰オリブ 5Y6/2 灰 5Y5/1 内- 灰 5Y5/1	
378	須恵器 坏身	口径 13.4 器高 4.9	外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ	良好	外- 灰 7.5Y6/1 灰白 5Y7/2 内- 灰 5Y6/1 灰オリブ 5Y6/2	
379	須恵器 坏身	口径 15.2 器高 4	外- ナデ ヘラ削り 内- 仕上げナデ ナデ	良好	外- 黄灰 2.5Y6/1 内- 黄灰 2.5Y6/1	
380	須恵器 長頸壺		外- ナデ 縦へり 斜方向へり 工具 に磁鉄粉 内- ナデ	良好	外- 灰 5Y6/1 灰オリブ 5Y6/2 灰白 5Y8/3...自然釉 内- 灰 5Y6/1, 8/2	外- 自然釉
381	須恵器 坏身		外- ナデ 内- ナデ	良好	外内- 浅黄 2.5Y7/3	
382	須恵器 坏身	口径 12.8	外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 灰白 5Y7/2 灰 5Y5/1 内- 灰 5Y5/1	外- 自然釉
383	須恵器 坏身		外- ナデ 内- ナデ	良好	外内- 灰 5Y5/1	
384	須恵器 坏身	口径 9	外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ	良好	外内- 灰 5Y5/1	
385	須恵器 高杯	口径 12.1 器高 9.0	外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 灰 5Y7/1 黄 5YR4/4 黄 5YR7/1... 内- 灰 5Y7/1 黄 5YR4/4 黄 5YR7/1... 外- 灰 7.5Y5/1, 2.5Y6/1 内- 黄灰 2.5Y6/1	三方透かし
386	須恵器 坏蓋	口径 14.8 器高 3.5	外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ	良好	外内- 黄灰 2.5Y5/1	
387	須恵器 坏身	口径 13.6 器高 4.75	外- ナデ ヘラ削り 内- ナデ 仕上げナデ	良好	外内- 黄灰 2.5Y5/1	
388	須恵器 坏蓋	口径 14.5 器高 4.2	外- ナデ ヘラ削り 内- 仕上げナデ ナデ	良好	外- 黄灰 2.5Y6/1 灰黄 2.5Y7/2 内- 灰黄 2.5Y7/2	外- 粘土質が現 る
389	須恵器 坏身	口径 13.4	外- ナデ 内- ナデ	良好	外- 灰 5Y6/1, 7.5Y6/1 内- 灰 5Y6/1	

No.	種類	法量	調整	焼成	色調	備考
390	須恵器 坯身	口径 12.6	外-ナデ へら削り 内-ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y7/2,6/3 内-灰黄 2.5Y7/2	
391	須恵器 坯身	口径 14 器高 3.7	外-ナデ へら削り 内-ナデ	良好	外-灰 5Y6/2 内-灰白 5Y7/2,7/1	外-自然釉
392	須恵器 釉輪		外-カキ目 ナデ 内-ナデ	良好	外-灰 5Y6/1,7.5Y5/1 内-灰 7.5Y5/1	
393	土師器 坯身	口径 12.2	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-淡黄 5YR4/4 内-淡黄 7.5YR8/6	丹塗り内面
394	土師器 坯身		外面-ミガキ 内面-ミガキ	良好	外-橙 2.5YR7/6 内-に灰黄 7.5YR7/4	丹塗り外面
395	土師器 坯身		外面-ミガキ 内面-ミガキ	良好	外-橙 2.5YR6/6 内-に灰黄 5YR7/4	丹塗り外面
396	土師器 坯身		外面-ミガキ 内面-ミガキ	良好	外-橙灰 5YR5/1 に灰黄 5YR6/3 内-橙灰 5YR6/1 に灰黄 5YR6/3	
397	土師器 坯身		外面-ミガキ 内面-ミガキ	良好	外-橙 2.5YR7/6 内-に灰黄 7.5YR7/4	丹塗り外面
398	土師器 坯身		外面-ミガキ 内面-ミガキ	良好	外-に灰黄 5YR8/3 内-に灰黄 5YR7/3	丹塗り外面
399	土師器 坯身		外面-丁寧なナデ 内面-丁寧なナデ	良好	外-に灰黄 橙 10YR7/3 内-に灰黄 7.5YR7/4	丹塗り外・内面
400	土師器 蓋		外面-ヨコナデ 丁寧なナデ 内面-ヨコナデ	良好	外-淡黄 7.5YR8/3 内-淡赤 2.5YR7/4	
401	土師器 蓋		外面-ナデ 内面-ヨコナデ	良好	外-淡黄 10YR8/3 内-灰白 7.5YR8/2	
402	須恵器 坯身	口径 11.7	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y6/2 黄灰 2.5Y5/1 内-黄灰 2.5Y5/1	
403	土師器 蓋	口径 11.7	外面-ミガキ 内面-ヘラミガキ	良好	外-淡黄 10YR8/3 内-淡黄 橙 10YR8/3	
404	須恵器 坯身	口径 14.4	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰白 2.5Y7/1 灰黄 2.5Y6/2 内-黄灰 2.5Y6/1 灰白 2.5Y8/1	
405	須恵器 坯身		外面-ナデ へら削り 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y6/1 内-灰 5Y6/1	
406	須恵器 坯身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y5/1 内-灰 5Y5/1	
407	須恵器 坯身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y5/1 内-灰 7.5Y5/1	
408	須恵器 坯身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y5/1 灰白 5Y7/1 内-灰 5Y5/1	
409	須恵器 坯身		外面-へら削り 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y5/1 内-灰 5Y5/1	
410	須恵器 坯身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y5/1 灰 5Y5/1 内-灰 5Y5/1	
411	須恵器 坯身		外面-ナデ へら削り 内面-ナデ	良好	外-灰 10Y5/1 内-灰 7.5Y5/1	
412	須恵器 坯身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 灰 10Y4/1 内-灰 10Y6/1	
413	須恵器 坯身		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y5/1 内-灰 7.5Y6/1	
414	須恵器 坯身	口径 11.5	外面-ナデ へら削り 内面-ナデ	良好	外-灰白 5Y7/2 灰 5Y4/1 内-灰 5Y4/1	
415	須恵器 坯身	口径 17.45	外面-ナデ へら削り 内面-ナデ	良好	外-灰 10Y5/1 内-灰 7.5Y6/1	
416	須恵器 蓋	口径 23.2	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰白 10Y7/1 灰黄 2.5Y7/2 内-灰白 5Y7/1	自然釉-外面
417	須恵器 高坯		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰赤 2.5YR5/2 褐灰 10YR4/1 内-暗黄灰 2.5Y5/2	茶帯-外面
418	須恵器 蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y7/2 黄灰 2.5Y5/1 内-黄灰 2.5Y6/2	スス付着-外面
419	須恵器 蓋	口径 16.7	外面-ナデ カキ目 内面-ナデ 同心円文タキ	良好	外-灰黄 2.5Y7/2 灰 7.5Y6/1 内-灰黄 2.5Y7/2	
420	須恵器 蓋		外面-ナデ カキ目 内面-ナデ 同心円文タキ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1,5/1 灰白 5Y7/1 内-黄灰 2.5Y6/1 灰白 5Y7/2	
421	須恵器 蓋		外面-平行タタキ 内面-同心円紋タタキの模ナデ	良好	外面-灰 7.5Y6/1 内面-灰 5Y6/1	
422	須恵器 蓋		外面-平行タタキ 内面-同心円紋タタキ	良好	外面-明褐灰 7.5YR7/1 内面-灰 5Y5/1	
423	須恵器 蓋		外面-平行タタキ 内面-ナデ	良好	外面-灰 7.5Y5/1 内面-5Y5/1	
424	須恵器 蓋		外面-平行タタキ 内面-同心円紋タタキの模ナデ	良好	外面-灰 10Y6/1 灰 5Y4/1 内面-灰 5Y6/1	
430	須恵器 蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外面-灰 7.5YR6/2 内面-に灰黄 5YR6/3 暗赤 7.5R2/4 灰 NS	
431	須恵器 蓋	口径 8.2	外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外面-淡黄 2.5Y7/4 内面-淡黄 2.5Y7/3 暗灰黄 2.5Y5/2	外・内自然釉
432	須恵器 蓋		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外面-灰黄 2.5Y6/2 内面-黄灰 2.5Y6/1	
433	須恵器 蓋		外面-ナデ へら削り 内面-同心円文タタキ	良好	外面-に灰黄 2.5Y6/3 黄灰 2.5Y6/1 内面-黄灰 2.5Y6/1	外自然釉
434	須恵器 蓋		外面-平行タタキ 内面-ナデ	良好	外面-灰 5Y4/1 内面-灰黄 2.5Y6/2	

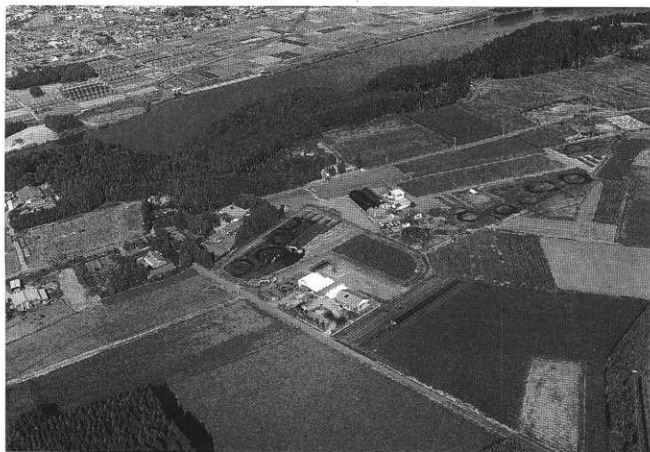
No	種類	法 量	調 整	焼 成	色 調	備 考
435	須原器 壺		外面-柳掛紋状文 内面-ナデ	良好	外面-オリブ黒 5Y3/1 内面-黄灰 2.5Y5/1	外-自然釉
436	須原器 壺		外面-柳掛紋状文 ※4目 2条の沈線 ナデ 内面-ナデ	良好	外-緑灰 10YR4/1 褐灰 7.5YR5/1 内-黄灰 2.5Y5/1	
437	須原器 壺		外面-平行タタキ ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y4/1 内-灰 5Y5/1	
438	須原器 壺		外面-平行タタキ ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y4/1 内-灰 5Y5/1	
439	須原器 壺		外面-カケ目 2条の沈線 ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰 5Y4/1 内-黄灰 2.5Y4/1	
440	須原器 壺		外面-平行タタキ 内面-同心円タタキ ナデ	良好	外-灰 5Y4/1 内-灰 N5/1	
441	須原器 壺		外面-平行タタキ 内面-同心円タタキ	良好	外-明灰黄 2.5Y4/2 内-灰 2.5Y6/1	外-自然釉
442	須原器 壺		外面-格子目タタキ ナデ 内面-ナデ 斜方向ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y6/1 内-灰 10Y6/1	
443	須原器 壺		外-平行タタキ 内-内弧タタキ	良好	外-灰黄 2.5Y6/2 内-灰 7.5Y5/1	
444	須原器 壺		外-タタキ 内-同心円タタキ	良好	外-黄灰 2.5Y5/1 内-灰 7.5Y5/1	
445	須原器 壺		外-タタキ 内-ナデ	良好	外-灰 5Y4/1 灰褐 7.5YR5/2 内-灰黄 2.5Y6/2	
446	須原器 壺		外-平行タタキ 内-同心円タタキ	良好	外-灰白 7.5Y8/1 内-灰 7.5Y6/1	
447	須原器 杯蓋		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y5/1 内-灰 5Y5/1	外-釉
448	須原器 杯蓋		外-ヘラ刷り ナデ 沈線 内-平行タタキ ナデ	良好	外-緑灰 10YR6/1 内-黄灰 2.5Y5/1	
449	須原器 杯蓋		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y6/2 褐灰 10YR6/1 内-灰黄褐 10YR6/2	
450	須原器 高杯、罎	口径 8.2	外-ナデ 内-ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y6/2 内-灰 5Y4/1	外-釉
451	須原器 高杯、罎		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y5/1 内-黄灰 2.5Y8/1	遺かし
452	須原器 杯蓋		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-灰 7.5Y5/1 内-灰 5Y5/1	
453	須原器 杯身		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y6/2 褐灰 10YR6/1 内-灰黄褐 10YR6/2	
454	須原器 壺		外-ナデ 平行タタキ 内-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 内-灰黄 2.5Y6/2	
455	須原器 壺		外-平行タタキ 内-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y5/1 内-灰黄 2.5Y6/2	
456	須原器 壺		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-灰白 5Y8/1 灰黄 2.5Y6/3 釉 内-黄灰 2.5Y6/1	
457	須原器 杯蓋		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-灰 10Y5/1,4/1 内-灰 10Y5/1	
458	須原器 杯蓋		外-ナデ 内-ナデ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 内-黄灰 2.5Y5/1	
459	須原器 壺		外-ナデ タタキ 内-ナデ 同心円タタキ	良好	外-灰黄 2.5Y6/2 灰白 5Y8/2 内-黄灰 2.5Y5/1	外-自然釉
461	須原器 壺		外面-ナデ 柳掛紋状文 内面-ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y5/1 内-黄灰 2.5Y5/1	外-沈線
462	須原器 壺		外面-ナデ 柳掛紋状文 内面-ナデ	良好	外-灰黄 5YR5/2 内-緑灰 10YR5/1	
463	須原器 壺		外面-格子目タタキ ナナめとあとのナデ 内面-同心円タタキ	良好	外-灰 5Y5/1 内-灰 5Y6/1	
464	須原器 壺		外面-平行タタキ 内面-同心円タタキのあとナデ消し	良好	外-灰 10Y5/1 内-灰 7.5Y5/1	
465	須原器 壺		外面-格子目タタキのあとナデ 内面-同心円タタキ	良好	外-灰 5Y5/1 内-灰 5Y5/1	
466	須原器 壺		外面-平行タタキ 内面-同心円タタキのあとナデ消し	良好	外-浅黄褐 7.5YR8/4 浅黄褐 7.5YR8/6 内-緑 10YR8/6	
467	須原器 壺		外面-格子目タタキ 内面-同心円タタキのあとナデ消し	良好	外-灰 N4 内-灰 7.5Y5/1	
468	須原器 壺		外面-格子目タタキ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y5/1 内-灰 10Y5/1	
469	須原器 壺		外面-平行タタキ 内面-同心円タタキ	良好	外-黄灰 2.5Y6/1 内-灰 5Y6/1	
470	須原器 壺		外面-平行タタキの重ねタタキ 内面-ナデ	良好	外-灰 7.5Y5/1 内-灰 5Y6/1	
471	須原器 壺		外面-格子目タタキ 内面-ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y6/3 内-灰 N5	
472	須原器 壺		外面-ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄 2.5Y7/3 灰 N5/ 内-灰 7.5Y5/1	
473	内筒 埴輪		外面-ハケ目 ナデ 内面-ナデ	良好	外-灰黄 2.5Y6/2 内-灰黄 7.5YR6/3	外-貼付変帯 口縁-透かし
474	内筒 埴輪		外面-ハケ目 ナデ 内面-ナデ	良好	外-浅黄 10YR8/3 内-浅黄 2.5Y8/3	外-透かし

石器計測表

番号	グリッド	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
第7 図	1	SE2	磨石	7.3	6.8	4.55	309.6	砂岩
	2	SC2	石錘	7.5	5.75	1.35	85.0	"
	3	SC3	石錘	7.05	5.95	1.0	57.8	"
	4	SC3	石錘	5.75	4.45	1.5	56.4	"
	5	SC3	石錘	7.3	5.3	1.85	90.7	"
	6	SC3	石錘	6.8	5.05	1.3	64.2	"
	7	SC3	石錘	8.3	6.2	2.4	180.4	"
	8	SC3	石錘	7.25	5.5	1.5	92.2	"
	9	SC3	石錘	6.25	6.05	2.2	115.5	"
	10	SC3	石錘	6.9	6.35	1.95	104.4	"
	11	SC3	石錘	8.5	4.9	1.5	101.4	"
	12	SC3	石錘	7.15	4.6	2.7	109.6	"
	13	SC3	石錘	6.75	6.6	2.4	118.1	"
第24 図	14	SC3	石錘	6.9	4.25	1.1	48.3	"
	15	SC3	石錘	6.0	4.5	1.2	45.9	"
	16	SE5	石錘	5.25	5.85	1.1	52.5	"
	17	SC3	石錘	6.8	4.05	1.65	78.2	"
	18	SC3	石皿	11.6	14.5	6.3	1100	"
	19	SE1	砥石	8.5	5.1	0.85	62.5	"
	20	SE1	石斧	14.45	6.85	1.3	168.7	"
	15	SA4	石錘	7.9	5.9	2.1	147.9	砂岩
	16	SA4	石斧	(7.9)	(5.9)	(2.7)	(206.4)	"
	17	SA4	石斧	(10.25)	(6.2)	(4.8)	(345.3)	"
18	SA4	磨石	7.5	7.6	3.85	334.0	"	
19	SA4	磨石	6.9	7.05	3.2	241.5	"	
20	SA4	台石	(19.8)	(15.38)	(4.52)	(1,550)	"	
21	SA4	石皿	23.5	(13.0)	(8.1)	(2,900)	"	
22	SA4	石皿	(17.8)	(16.95)	(4.5)	(1,860)	"	
第25 図	37	SA6	磨石	8.6	6.0	2.7	206.5	"
	38	SA6	磨石	9.8	9.8	2.8	347.6	"
	39	SA5	石錘	7.25	6.75	1.75	121.7	"
	40	SA5	石斧	12.65	4.9	1.95	147.4	"
	41	SA6	石錘	6.85	5.3	1.05	88.3	"
第27 図	62	SA8	敲石	(8.5)	7.75	(3.9)	(376.9)	"
	63	SA8	敲石	9.3	7.55	3.85	432.9	"
	64	SA8	磨石	6.25	5.6	1.9	119.4	"
	65	SA8	磨石	(6.1)	7.25	5.3	379.9	"

石器計測表

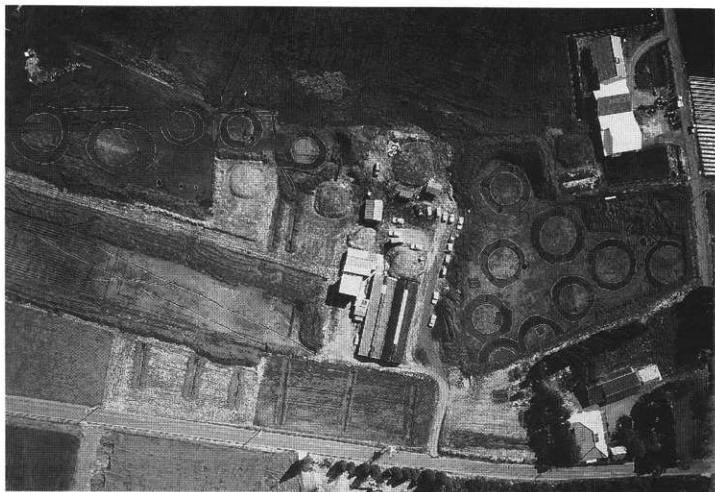
番号	グリッド	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考	
第 27 図	66	S A 8	敲石	13.8	5.75	3.9	459.4	〃	
	67	S A 8	磨石	13.5	8.9	2.75	476.5	〃	
	68	S A 8	磨石	9.1	8.21	5.45	565.4	〃	スス付着
	69	S A 8	磨石	(9.75)	(9.0)	(6.55)	(810.9)	〃	
	70	S A 8	石錘	9.05	4.5	2.75	163.2	〃	
	71	S A 8	石錘	6.35	4.8	1.65	61.4	〃	
	72	S A 8	石錘	4.8	4.8	1.0	35.6	〃	
	73	S A 8	石皿	26.7	18.1	7.3	4.800	〃	
第 28 図	74	S A 8	石皿	31.8	22.15	7.55	6.500	〃	
	75	S A 9	磨石	(15.55)	(12.5)	(3.8)	(1.140)	〃	
	76	S A 9	石斧	(7.55)	(5.95)	(2.65)	(157.4)	〃	
	77	S A 9	石錘	7.15	6.05	1.05	66.2	〃	
	78	S A 9	石錘	8.75	4.7	(1.0)	57.3	〃	
第 38 図	89	S A 3	磨石	14.1	11.95	4.7	1,129.7	砂岩	
	90	S A 3	敲石	15.85	4.55	2.65	357.8	〃	
	91	S A 3	磨石	7.59	6.95	3.05	255.5	〃	
	92	S A 3	敲石	(8.1)	7.5	3.35	296.3	〃	



調査風景 (I・II区)



調査前風景 (III~IV区)



Ⅰ区遺構検出状況



Ⅰ号墳およびⅡ区検出状況



石棺検出状況（東より）



石棺検出状況（南西より）



5号墳検出状況



整坑検出状況



玄室左壁



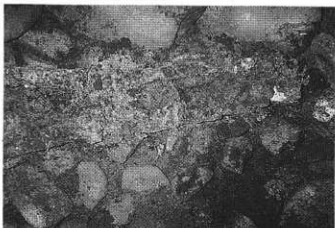
玄室中央



人骨頭部



人骨足部



人骨足部



埋め戻し状況